

刊本

○寛永十二年本

○寛文七年本

○新群書類従

参考書

○近古小説解題

○幸若舞曲研究

◎大 職 冠

(たいしよくわん) 刊二冊

解説

王代物の一。玉取傳説を材料としたもの。大織冠藤原鎌足の二女こうはく女が唐の太宗皇帝に迎へられて后となり、太宗皇帝は鎌足の興福寺遺營に當つて、むけい寶珠をはじめ種々の寶物を送つたのを、八大龍王が奪ひ取つたので、鎌足は寶珠を取返すために、身を賣して房崎の蟹に契り、蟹にその目的を明すと、蟹は海中に入つて、八大龍王より寶珠を奪ひ返し、龍王の部下に逐はれて、己の胸を割いて寶珠を匿したが、遂に落命し、鎌足はその遺骸の中から寶珠を得て、興福寺本尊の釋迦像の眉間に鑲めることが出来たことを叙す。玉取傳説は讃岐志度寺の縁起として傳へられるが、その本源は印度の佛本生譚中の大施太子龍宮行傳説であらうといはれる。謡曲「海士」と同材、「源平盛衰記」卷四十四には、蟹の老松・若松母子が海底に寶劍を探つた話がある。影響文學としては、元祿五年刊六段本「新大職冠」、井上播磨掾正本「大職冠知略玉取」、近松門左衛門作「大職冠」などがある。

刊本

○寛永十二年本

○新群書類従

参考書

○近古小説解題

○幸若舞曲研究

○入鹿と大職冠

長井素枝 (國語國文の研究十五)

◎高 館

(たかだち) 刊二冊

解説

判官物の一。義経が秦衡らの兵に高館を襲はれ、鈴木三郎・龜井六郎・辨慶らが衣川で壯烈な最期を遂げることを作る。「和泉が城」と姉妹篇をなす判官物舞曲中の大曲で、「義経記」卷八と同材、寛永二年版の古淨瑠璃「高館記」金平本「義経記」などの粉本となつた。

刊本

○寛永十二年本

○新群書類従

○舞の本

○名著文庫

○近代日本文學大系

参考書

○近古小説解題

○幸若舞曲研究

◎張 良

(ちやうりやう) 一卷

解説

異國物の番外舞曲。「史記」「漢書」などに傳はる黄石公傳説を主材としたもの。張良が黄石公から兵法の秘傳を受ける話に、大蛇退治などを絡み、黄石公を觀音の化現として本地物的性質をも持たせてゐる。謡曲「張良」と同材。日本の兵法傳授に關する説話には、黄石公傳説の影響を受けたと思はれるものが多い。内閣文庫に節附古寫本がある。

刊本

○新群書類従

参考書

○近古小説解題

○幸若舞曲研究

第三篇 鎌倉室町時代 (物語・草子)

◎築 島 (つきしま) 刊二冊

解説

源平物の一。經ヶ島人柱傳説を主材とした本地物。清盛が福原遷都の後、輪田泊を築造しようとし、荒浪を鎮めるために三十人の人柱を選び、三十人目に刑部左衛門國春と、その女名月女といふものが人柱とならうとしたが、人柱供養の當日、清盛の侍童松王健兒は自ら進んで人柱となり、二十九人の命に代つて一萬部の法華經と共に海中に沈み、工事がめでたく成就した。これが經ヶ島である。名月女は吉祥天、松王は大日王、清盛は地藏菩薩の化身で、築島造營の方便として現はれたと説いてゐる。

明治四十二年榎本寅彦作脚本「經島娘生贄」はこの作に據つて作られた。

刊本

○寛永十二年本 ○新編御伽草子(下) ○新群書類従 ○近代日本文學大系

参考書

○近古小説解題 ○幸若舞曲研究

◎劍 讚 歎 (つるぎさんだん) 刊一冊

解説

曾我物の一。曾我兄弟が、箱根の別當から、黒鞘巻の刀と兵庫鎖の太刀とをそれぞれに貰つて富士野の狩場へ向ふことを作つたもので、別當の説く兵庫鎖の太刀の由來話が主材となつてゐる。「曾我物語」巻八前半と同材。寶劍の由來は「太平記」(又は平家物語)劍の巻と同種異傳である。

刊本

○寛永十二年本 ○新群書類従

参考書

○近古小説解題 ○幸若舞曲研究

◎富 樫 (とがし) 刊一冊

解説

一名「勸進帳」。判官物の一。義經主従北國落の途中、加賀國安宅の關を通るために、富樫介の館で、辨慶が南都東大寺の勸進僧と偽り、進勤帳を読み上げて通行を許されることを作る。安宅の關のことは「義經記」にもあるが、勸進帳を読むことは見えない。謡曲「安宅」と同材である。淨瑠璃・歌舞伎など後の文學に影響するところが多い。

刊本

○寛永十二年本 ○明暦四年本 ○新群書類従 ○舞の本 ○名著文庫

参考書

○近代日本文學大系 ○羅生門の鬼(安宅の辨慶の項) 一冊 島津久基 昭和四年

◎常 盤 問 答 (ときはもんだう) 刊一冊

解説

一名「鞍馬常盤」。判官物の一。常盤が牛若丸を鞍馬寺に托さうとして、自らまづ寺に行つて別當東光と問答することを作る。内容上「伏見常盤」(別項)に續くものである。

第三篇 鎌倉室町時代 (物語・草子)

刊本  
参考書

- 寛永木活字本
- 寛永十二年本
- 新群書類従
- 近古小説解題
- 幸若舞曲研究

◎那須與一 (なすのよいち) 刊一冊

解説

源平物の一。「平家物語」「源平盛衰記」に傳はる那須與一扇の的話で、扁舟に扇を立てて射よと挑む美人玉蟲の經歷などを敷衍して叙べてゐる。

刊本  
参考書

- 寛永十二年本
- 新群書類従
- 舞の本
- 名著文庫
- 近代日本文學大系
- 幸若舞曲研究

◎日本記 (にほんぎ) 一卷

解説

一名「大日本記」。「日本紀」とも書く。神代物。伊弉諾・伊弉册二神の國生みのことを作つたもので、陰陽五行説・佛説などによつて叙べてゐる。

刊本  
参考書

- 木活字十行本
- 近古小説新纂初輯
- 近古小説新纂初輯(考説)
- 幸若の「日本紀」の所説について 湯澤幸吉郎 (國語と國文學昭和七ノ六)

解説

◎濱出 (はまいで) 刊一冊

一名「蓬萊山」。梶原景季が江の島詣にことよせ、諸士を招いで濱遊をすることを作つたもので、御伽草子二十三篇の一なる「濱出草子」と同内容である。「九穴貝」(別項)はその後段である。なほ「濱出草子」の條参照。

刊本  
参考書

- 寛永十二年本
- 御伽文庫本
- 御伽草子
- 有朋堂文庫
- 近古小説解題
- 幸若舞曲研究

◎笛の巻 (ふえのまき) 刊一冊

解説

判官物の一。「常盤問答」に接続するもので、東光房に托された牛若丸が、常盤から名笛を贈られ、もとの所持者、淀の津のみた次郎から、その笛の由來話を聞くことを作る。「烏帽子折」(別項)の中に牛若吹笛のことがあり、それに合わせるために作られたものであらう。異本があり、「近古小説新纂初輯」に收められてゐる。

刊本  
参考書

- 寛永十二年本
- 正徳四年本
- 新群書類従
- 近代日本文學大系
- 近古小説解題
- 近古小説新纂初輯(考説)

◎伏見常盤 (ふしみときは) 刊二冊

一名「伏見落」。判官物の一。源義朝が紫宸殿の怪物を退治して常盤を賜はつたこと、平治の亂後常盤が今若・乙若・牛若の三兒を携へて雪中をさまよひ、伏見の里の或老夫婦の家に宿つた時、五人の下女が鄙歌を唄つて、常盤を慰めたことを作る。「平治物語」「義經記」などに本づいて敷衍したものである。

○慶長本活字本 ○寛永十二年本 ○新群書類従 ○近代日本文學大系

○近古小説解題 ○幸若舞曲研究

◎堀河夜討 (ほりかはようち) 刊二冊

一名「土佐正尊」。判官物の一。土佐正尊が頼朝の命を受けて京堀河の義經の館を夜襲し、捕へられて六條河原に斬られることを作る。「義經記」卷四、謡曲「正尊」と同材である。

○寛永十二年本 ○明暦四年本 ○新群書類従 ○近代日本文學大系

○近古小説解題 ○幸若舞曲研究

◎満仲 (まんぢゆう) 刊二冊

王代物の一。多田満仲の子美女丸が僧侶となることを嫌ひ、父の怒に觸れて殺されようとしたのを、家來仲光がおのが子幸壽丸を身替にして、美女丸を救ふ。美女丸は改心して、恵心院の僧都について佛學を修め、後法力で母の失明を癒し、また幸壽丸の追善のために一寺を建立することを作る。謡曲「仲光」(満仲)とほぼ同材である。

○寛永十二年本 ○新群書類従 ○近代日本文學大系

○近古小説解題 ○幸若舞曲研究

◎未來記 (みらいき) 刊一冊

判官物の一。鞍馬の天狗が、牛若の兵法熱心に感じ、源平二氏の未來を示すことを叙す。「義經記」卷一「牛若貴船詣の事」に本づいて敷衍したものと思はれる。謡曲「鞍馬天狗」と同材である。

○寛永十二年本 ○新群書類従 ○舞の本 ○名著文庫 ○近代日本文學大系

○近古小説新纂初輯(天狗の内裏)考説)

◎文覺 (もんがく) 刊一冊

源平物の一。高雄神護寺の文覺が、法住寺殿で佛堂建立のために勸進帳を読み上げ、青侍の無禮を愾して捕へられ、伊豆に流されること、頼朝に謀叛を勸めて、平家調伏の修法を行ふことなどを作る。

第三篇 鎌倉室町時代 (物語・草子)

解説

刊本

参考書

解説

刊本

参考書

解説

刊本

参考書

解説

刊本

参考書

解説

文覺 八島 山中常盤 夢合

七七二

「平家物語」「源平盛衰記」によつて敷衍したものである。

- 刊本 ○寛永十二年本 ○新群書類従 ○舞の本 ○名著文庫 ○近代日本文學大系
- 参考書 ○近古小説解題 ○幸若舞曲研究

◎八 島 (やしま) 刊二冊

一名「八島軍」。判官物の一。義經主従が奥州落の途中、佐藤莊司の寡婦の尼の家に泊つて、嗣信・忠信兄弟の壯烈な忠死を物語ることを作る。御伽草子「八島にこう物語」と同材である。

- 刊本 ○寛永十二年本 ○萬治元年本 ○新群書類従 ○近代日本文學大系
- 参考書 ○近古小説解題 ○幸若舞曲研究

◎山中常盤 (やまなかときわ) 一卷

大江大頭の舞曲。御伽草子「山中常盤雙紙」と同材であるが、全く文辭を異にしてゐる。笹野堅氏の「大橋の中將と山中常盤」(國語と國文學昭和七ノ九)に、兩者の全文を對照して掲げてゐるほか、刊本はない。「山中常盤雙紙」の條参照。

◎夢 合 (ゆめあはせ) 刊一卷

源平物の一。安達盛長が頼朝の前で珍らしい夢の話をし、大庭景義がこれを合せて、頼朝の前途を祝ふことを作る。夢合のことは、「平治物語」「源平盛衰記」「曾我物語」にも見えるが、それぞれ異同がある。

- 刊本 ○寛永整版丹緑本 ○新群書類従
- 参考書 ○近古小説解題 ○幸若舞曲研究

◎百合若大臣 (ゆりわかだいじん) 刊二冊

王代物の一。嵯峨天皇の弘仁七年に、むこ國のむくりが筑紫の博多に襲來し、鐵砲毒矢で攻めたてた時左大臣百合若は神勅に依り、鐵の弓矢を携へ、三十萬騎の兵を率ゐて、筑紫に向ひ、敵を追退け、後朝命によつて、八萬餘艘の兵船を率ゐ、高麗百濟を経てむこ國に攻入らうとしたが、むくりこれを知つて、ちくらが沖で會戦し、對峙すること三年、百合若は遂にむくりを破つて、凱旋する途中、玄界島に上陸して憩ひ、假睡するうちに、百合若のめのと別府兄弟が、逆心を起し、百合若を島に置去りにして、戦死と欺き、その戦功を横奪して、筑紫の國司となり、百合若の御臺所をも手に入れようとしたが、御臺所はこれを拒み、危害を危れ、綠丸といふ鷹の使で、玄界島の百合若の消息を得たが、やがて百合若はいきの島人の舟が漂着したのに乗つて筑紫に歸り、身體に苔がむしたやうになつてゐるので、苔丸と呼ばれて門脇の翁の許にあつたが、正月の弓の催に、鐵弓をひいて人々を靡き従へ、別府兄弟を亡し、御臺所に再會し、都に上つて日本國の將軍になつたといふ話である。影響文學に、近松門左衛門作の「百合若大臣野守鏡」、

第三篇 鎌倉室町時代 (物語・草子)

七七三

爲永太郎兵衛ら作の「百合若高麗軍記」及びそれらを小説化した八文字屋其笑・瑞笑作の「百合稚錦島」などがある。

百合若傳説の本源に關しては、坪内逍遙氏がホーマーの「オデッセイ」にあるユリシーズの話の傳來轉化であらうといふ説を出された。島津久基氏が御伽草子「天狗の内裏」をヴァジルの「イニード」に關係させて論じたのと共に、注意すべきである。

- 刊本 ○寛永十二年本 ○新群書類従 ○舞の本 ○名著文庫 ○近代日本文學大系
- 参考書 ○百合若傳説の本源 坪内逍遙 (早稲田文學明治三十九ノ一。逍遙選集十一)

- 壹岐の百合若傳説 高野辰之 (早稲田文學明治四十ノ二)
- 近古小説解題

◎夜討曾我 (ようちそが) 刊二冊

曾我物の一。曾我兄弟が富士野の卷狩に乘じ、父の仇工藤祐經を覗つて一二度機を逸したが、夜雨に紛れ、秩父の郎黨本田次郎の案内で、祐經の陣屋に忍び入り、首尾よく本懐をとげることを叙す。「曾我物語」卷八・卷九及び謡曲「夜討曾我」と同材。淨瑠璃・歌舞伎・小説などに多くの影響文學を出してゐる。

- 寛永十二年本 ○新群書類従

刊本 解説

参考書

- 近古小説解題 ○幸若舞曲研究

◎和田酒盛 (わださかもり) 刊二冊

曾我物の一。和田義盛が一門九十三騎と酒宴を張つた席上で、遊女虎が曾我祐成に思ひざしをし、義盛怒つて祐成に危害を加へようとした時、祐成の弟時致が駆けつけて祐成を救ふことを叙す。中に朝比奈義秀が時致の鎧の草摺を曳いて力較べをすることがある。「曾我物語」卷六と同材。後世の影響文學が多い。

- 寛永十二年本 ○新群書類従 ○舞の本 ○名著文庫 ○近代日本文學大系
- 近古小説解題 ○幸若舞曲研究

刊本 参考書

◇烏帽子折 (ゑぼしをり) 刊一冊

判官物の一。牛若丸奥州入の途中、鏡の宿で左折の烏帽子をあつらへて舊臣にあふこと、青幕の長の許で笛の妙技を現はすこと、熊坂長範を退治することなどを作る。謡曲「烏帽子折」及び「熊坂」と共通の題材を扱つてゐる。

- 寛永木活字本 ○寛永十二年本 ○新群書類従 ○舞の本 ○名著文庫
- 近代日本文學大系

刊本 解説

参考書

- 強盜熊坂長範考 小山田與清 (古老遺筆)
- 近古小説解題
- 幸若舞曲研究

### 第十一 謡曲

緒言

謡曲は能樂の詞章で、「うたひ」ともいひ、それに謡・謳・唄などの字を當ててゐる。能樂は一種の樂劇で、劇的の仕組に音楽と舞踊とを伴つたものであるから、その詞章たる謡曲も歌謡的性質と戯曲的性質とを兼ね、かつ叙事的性質をも含んでゐる。つまり抒情詩的要素・叙事詩的要素を混有せる劇詩といふべきもので、そこに文學としての謡曲の特殊性があるのである。

能樂並びに謡曲の由來・沿革・性質等については細説することは、舞踊史・演劇史・音楽史・歌謡史・戯曲史・文學史などの職分で、個々の文學作品の解説を目的とする本書の領域外であるから、それらについては一切省略して、ここには、現行の謡曲二百三十餘の曲名をあげ、その各の解説として、作者、はじめてその曲名の記録に見える年代、上演順位、構造の種類、人物(役割)、事件の所と時、中心となる事件の概要などを記し、作の出典をあげ、そのあとに謡曲の諸本・参考書の類をまとめて掲げることにする。

まづ解説の準備として必要なことを簡條書にしておく。

一、曲・名 謡曲の曲名ははじめから皆一定してゐたものではなく、古名と現今の通用名と違ふものも少くない。たとへば、古くは「高砂」を「相生」、「松風」を「松風村雨」、「蟬丸」を「逆髪」、「源氏

供養」を「紫式部」、「百萬」を「嵯峨物狂」、「正尊」を「土佐坊」、「大江山」を「酒吞童子」、「邯鄲」を「盧生」と呼んだ類である。本書においては現今の名稱に従つて、これを五十音順に配列し、異名または同名異字のものは、下の括弧〔 〕内に記すことにする。

二、作 者 謡曲は公卿・僧侶・神官・歌人・連歌師などの手に成つたもので、能役者は曲節をつけたに過ぎないであらうとの説が、古くから行はれてゐたが、世阿彌の遺著が発見されて以來、その説の誤であることが明らかに成り、今は謡曲の大部分は能役者の手に成つたものであるのが通説となつてゐる。

謡曲の作者について記したもののうち、最も信用出来るものは、世阿彌の遺著であるが、なほ大永四年に吉田兼持が、観世彌次郎長俊と相謀つて記した「能本作者註文」、降つて明和二年に観世元章の作つた「二百十番謡目録」がある。「二百十番謡目録」は後世のものだけに、誤もあらうと思はれ、世阿彌の遺著及び「能本作者註文」と記載の一致しないものもあるが、一概に排斥し去ることも出来ないものである。

各解説中の作者の記載はこの三書により、世阿彌の著書に明記せるものはそのまま載せ、他の二者の間に異同あるものは、兩者をあげて、括弧内に略符によつてその何れによるかを註記することにした。即ち(能本)は「能本作者註文」、(二百)は「二百十番謡目録」の略符である。その何れが正しいかは、今日まだ殆んど明かになつてゐない。

三、製作年代 個々の謡曲の製作年代は大部分精確には分らないが、諸種の古記録中に曲名の見えるものを探索し、一方その作者に照らし合はせて見れば、大體の見當をつけることが出来る。解説中にはそ

の意味で「初見、何年(何々)」といふ體裁にして、各の曲名の最初に記録に見える年代と、その記録名とを記すことにした。左にそれらの記録名と、本書に用ひる略符とをあげておく。上の括弧内は略符、書名の下

- の括弧内は収載叢書名または單行刊本名である。
- (粟田口)……粟田口猿樂記(群書類從卷三六三) (飯尾)……飯尾宅御成記(群書類從卷四〇九)
  - (異本糺)……異本糺河原勸進猿樂記(群書類從卷三六三) (蔭涼)……蔭涼軒日錄(大日本佛教全書)
  - (春日)……春日拜殿方諸日記(續群書類從卷四三) (歌舞)……歌舞髓記(群書類從)
  - (口傳)……花傳書別紙口傳(世阿彌十六部集) (花傳)……花傳書(世阿彌十六部集)
  - (看聞)……看聞御記(續群書類從補遺) (言繼)……言繼卿記(圖書刊行會第四期本)
  - (言經)……言經卿記 (五音曲)……五音曲條々(世阿彌十六部集)
  - (五音三)……五音三曲集(群書類從)
  - (拾玉)……拾玉得花(群書類從)
  - (拾玉)……拾玉得花(群書類從)
  - (糺河原)……糺河原勸進猿樂記(群書類從卷三六三) (談儀)……世子六十以後申樂談儀(世阿彌十六部集)
  - (親長)……親長卿記 (親元)……親元日記(東京帝大文庫大學史誌叢書)
  - (田樂)……文安田樂能記(群書類從卷三六三) (二水)……二水記
  - (能作)……能作書(世阿彌十六部集) (能本)……能本作者註文(群書類從)
- 四、上演順位 能樂一日の上演曲数は、古くは一定してゐなかつたが、江戸時代に至つて五番立と

定まり、五曲を取合せては上演することになり、脇能・二番目・三番目・四番目・五番目(尾能)の順位を設けて、各曲の所屬がほぼ一定するに至つた。

脇能は、普通能樂の最初に演ぜられる「翁」の脇に演ずる能の意で、これに屬するものは、神物・神事物などと呼ばれ、概ねめでたい祝言の意に叶つたものである。

二番目は、いはゆる修羅物で、戦死した武士の亡霊が現はれて、戦争の有様を物語ることを主材としたものである。

三番目は、鬘物すなはち女性を主人公としたもので、それらの女性は、概ね「源氏物語」「伊勢物語」「大和物語」などの平安朝物語の類に取材した優雅な人々である。

四番目は、種々のものを含んでゐるが、歴史的材料を取扱つたものでは源平時代の武人に關したものが多く、義經に取材した判官物、曾我兄弟に取材した曾我物などもこれに入るものが多い。また當世のことを材料とした世話物では、子の行方を失つた母の悲しみを取扱つた狂女物が多い。その他これに屬するものには種々の古傳説を取扱つたものがある。

五番目、即ち尾能は、内外の傳説に取材したものが多く、その主人公は鬼畜の類であるところから、鬼畜物とも呼ばれるが、惡鬼の類は勇士に退治せられ、善良なものは人間に福徳を與へて、共にめでたく終結を告げることになる。

以上の五順位は、これを簡約して神・男・女・狂・鬼とも呼ばれてゐる。



**五、構造の種類** 謡曲の構造すなはち劇的結構は、いろいろに分類して見ることが出来る。佐成謙太郎氏は「謡曲大観」において、單式能・複式夢幻能・劇的夢幻能・一段劇能・二段劇能の種類を設けられた。それによれば單式能は、劇的要素の稀薄な一場物、複式夢幻能・劇的夢幻能は共に前後二場より成り、後の場において亡霊が生前の姿を現はす仕組のものであるが、そのうち前者は、主人公と副主人公との関係が偶然的なもので、後者は兩者の間に因果的關係あるものを指し、劇能は普通の劇に近く、過去の亡霊の出現しないもので、その一場より成るものを一段劇能、二場より成るものを二段劇能として居られるやうである。この分類は謡曲の構造と共にそれぞれの内容的性質を知る上に便利であるが、やや名稱の紛らわしい點がないでもない。謡曲の構造は、要するにこれを形式上から見れば、一場物と二場物との二種、内容上から見れば、夢現的なものと現實的なものとの二種に歸着するのであつて、この兩者を組合はせれば、(一)一場物の夢幻能、(二)一場物の現實能、(三)二場物の夢幻能、(四)二場物の現實能の四種になるのである。

本書においてはこの分類により、「一場夢幻物」「一場現實物」「二場夢幻物」「二場現實物」の名稱を用ひることにする。二場物の夢幻能における主人公と副人物との關係が偶然的のものか、必然的のものかは、中心事件の概要の記述によつて、おのづから明かになるであらう。

**六、人物** 謡曲中の人物には、シテ・ワキ・ツレ・トモ・子方・狂言などの役名がつけられてゐる。シテは爲手(仕手)で、主演者を意味し、作の主人公に當る。前後二場に分れてゐる曲では、前場のシテを前ジテ、後場のシテを後ジテといふ。

ワキは脇で、シテの相手役たるものである。

ツレはシテまたはワキに附隨してこれを助ける役で、シテに附隨するものをシテツレ、ワキに附隨するものをワキツレといふが、單にツレといへばシテツレを指すのである。

トモはシテツレ・ワキツレの一種であるが、單純な從者の役をするものに對してこの名を用ひる。なほシテツレまたはワキツレが多人數連れだつて出る場合にはこれを立衆たしやうと呼んでゐる。

子方は子供の演ずる役。

狂言はアヒ・ヲカシなどともいひ、シテの中入中に間語まがことばをつとめるものである。

以上は演能の役割の名であるが、一方謡曲の作中人物の關係を示すのにも都合がよいから、これらの名稱を借りて人物を示し、記載の順序は大抵登場の順序に従ふことにする。

**七、所と時** 作中事件の背景たる所と時で、所は概ね具體的の場所が示されてゐるが、時は普通年月の明記がなく、ただ漠然と時代や季節を示したものが多く、中には時代や季節の示されないものもあるが、上演の約束上の季節はほぼきまつてゐるから、それは括弧内に記すことにする。

**八、事件の概要** 作中に取扱はれてゐる中心事件の概要であるが、紙數の關係上、簡単に眼目を記すにとどめる。

**九、出典** 謡曲の材料の出典は、ずむぶん廣汎多方面に亘つて居り、かつ直接の典據か間接の典據かの明かでないもの、出典と事實の相違あるもの、單に、何らかの示唆を受けてゐるに過ぎないものな

ど、その関係もいろいろであるが、それらを一々區別し、考證する邊がないから、ただ直接間接に典據的關係があると思はれる文書の名目をあげるに止める。

なほ各曲の解説にあつては、特に丸岡桂氏の「古今謡曲解題」及び佐成謙太郎氏の「謡曲大観」に負ふところが多いことを附記しておく。

○鴉鷓小町 (あうむこまち)

作者並びに初見文献未詳。三番目。一場現實物。ワキ、陽成院勅使行家。シテ、小野小町。所、近江國關寺邊。時、陽成院御宇春(三月)。

老後落魄して關寺邊に住居してゐた小町が、内裏から憐憫の歌を賜はり、鴉鷓返しの返歌を奉ることを作る。〔出典〕「阿佛鈔」十訓抄「第一可定心採振舞事」。

○阿漕 (あこぎ) 〔阿濃・阿古貴・阿古木〕

作者、世阿彌(能本)。初見、大永四年(能本)。四番目。二場夢幻物。ワキ、日向の國人。前シテ、漁翁。狂言、阿漕の浦人。後シテ、阿漕。所、伊勢國阿漕浦。時、秋(九月)。

日向の國人か、伊勢參宮の途次、阿漕浦で、殺生禁斷を破り、網を曳いた科によつて海に沈められた漁夫阿漕の靈に逢ふことを作る。〔出典〕「古今六帖」鯛の歌、「源平盛衰記」卷八「讃岐院事」。

○蘆刈 (あしかり)

作者、世阿彌(能本)、禪竹(二百)。初見、康正二年(歌舞)。四番目。一場現實物。ツレ、左衛門の妻、ワキ、その從者。ワキツレ、同從者二人。狂言、里人。シテ、目下左衛門。所、攝津國難波。時、(三月)。

目下左衛門が貧困のため妻に別れて、難波の浦で蘆賣をしてゐるうち、妻が賣人の乳母になり、生活が裕になつたので

彼を尋ねて来たのに巡りあひ、連れ立つて都へ歸ることを作る。〔出典〕「拾遺集」卷九、「大和物語」。

○飛鳥川 (あすかがは)

作者、世阿彌(能本)。初見、寛正七年(飯尾)。四番目。一場現實物。子方、友若。ワキ、都の男。シテ、友若の母。ツレ、田植女。所、大和國飛鳥川邊。時、五月。

母に別れて、その行方を探してゐた友若が、都の旅人に伴はれて飛鳥川の邊を過ぎ、田植女になつて物狂する母に再會することを作る。〔出典〕「狂女の巷説」。

○安宅 (あたく) 〔安宅判官〕

作者、親世小次郎(二百)。初見、寛正六年(親元)。四番目。一場現實物。ワキ、關守富樫某。子方、源義經。シテ、武藏坊辨慶。ツレ(立衆)、義經の郎黨九人。狂言、強力。所、加賀國安宅。時、文治三年二月。

義經奥州落の途次、安宅の關で、辨慶が東大寺建立勸進の山伏と詐り、勸進帳を偽讀し難を免れることを作る。〔出典〕「吾妻鏡」文治三年二月十日の條、「源平盛衰記」卷三十六、「義經記」卷七、「平家物語」卷五「勸進帳」。

○安達原 (あだちがはら) 〔黒塚・糸車〕

作者、禪竹(二百)。「能本作者註文」には近江能とある。初見、寛正六年(親元)。五番目。二場現實物。ワキ、東光坊祐慶。ワキツレ、同行山伏二人。狂言、能力。前シテ、老婆。後シテ、鬼女。所、奥州安達原。時、秋(八月)。

熊野那智の行者祐慶が、安達原の黒塚で、一老婆の家に宿り、老婆の鬼女であることを知つて逃れ出たが、老婆が鬼女の姿を現はして追ひ來つたので、これを祈り伏せることを作る。〔出典〕「拾遺集」卷九兼盛の歌、「大和物語」。

○敦盛 (あつもり) 〔草刈敦盛〕

作者、世阿彌。初見、應永三十年(能作)。二番目。二場夢幻物。ワキ、蓮生法師。前シテ、草刈男。前ツレ、草刈男三人。狂言、所の者。後シテ、平敦盛の靈。所、攝津一の谷。時、(八月)。

解説

解説

解説

解説

解説

解説

解説

解説

熊谷蓮生坊が、嘗て自分の討取った教盛の菩提を弔ふために一の谷に行き、草刈男に化した教盛の霊に逢ふことを作る  
〔出典〕「平家物語」巻九、「源平盛衰記」卷三十八。

◎淡路 (あはち) 〔淡路島・樺葉〕

作者、親阿彌(二百)。初見、長祿四年(五音三)。臨能。二場夢幻物。ワキ、當今の臣下。ワキツレ、同從臣。前シテ、老翁。前ツレ、男。狂言、所の者。後シテ、伊弉諾尊。所、淡路二の宮。時、春(三月)。或朝臣が淡路の古跡を尋ね、伊弉諾尊の影向に遭ひ、國土創成の様を拜觀することを作る。〔出典〕「古事記」「日本書紀」。

◎葵上 (あふひのうへ)

作者、禪竹(能本・二百)。但し「能作書」に既に曲名が見えてゐるから、禪竹作といふは疑はしい。四番目。二場夢幻物。ツレ、照日の巫女。ワキツレ、朱雀院の臣。前シテ、六條御息所の生霊(上臈姿)。狂言、左大臣從臣。ワキ、横川小聖。後シテ、同(鬼女姿)。所、京都左大臣邸。時、(無季)。六條御息所の生霊が、光源氏の北の方奏の上に憑き、照日の巫女のために本性を現はし、更に横川の小型の法力によつて、怨を去ることを作る。〔出典〕「源氏物語」葵の巻。

解説

◎海士 (あま) 〔海人・白水郎・蛭〕

作者、世阿彌(能本・二百)。但し「申樂談儀」の記事より推して、世阿彌以前の古作かと思はれる。初見、永享二年(談儀)。五番目。二場夢幻物。子方、藤原房前。ワキ、房前の從者。ワキツレ、同二人。前シテ、海士(房前母の靈)。狂言、所の者。後シテ、龍女(同)。所、讃岐志度浦。時、春(二月)。藤原房前が、その母は志度浦の海女であることを聞き、追善のためにその浦に行き、海女の靈に會つて、昔唐の后から贈つた寶珠が、龍宮へ奪はれた時、房前を出世させるために、海底に入り命に替へて珠を奪ひ返した話を聞き、亡母の追善供養をすると、母が龍女となつて現はれ、成佛を喜ぶことを作る。〔出典〕「日本書紀」允恭紀十四年の條、「志度寺縁起」、舞の本「大職冠」。

解説

起、舞の本「大職冠」。

◎綾鼓 (あやのつづみ)

作者、世阿彌(能本)。初見、大永四年(能本)。四番目。二場現實物。ツレ、女御。ワキ、天智天皇臣下。狂言、同從者。前シテ、御庭掃の老人。後シテ、同怨靈。所、筑前木丸皇居(桂の池)。時、(八月)。木丸の皇居の御庭掃の老人が、女御に思をかけ、桂の池の桂の木に掛けた綾の鼓を打つ音が聞えたら、再び女御の御姿を見せてやるといはれ、鼓を打ち續けたが、鳴らないので、池に身を投げて死に、のち怨靈となつて現はれ、女御を恨むことを作る。古曲「綾の太鼓」の改作。「懸重荷」と同巧。出典未詳、巷説に取材したものであらう。

解説

◎嵐山 (あらしやま)

作者、禪鳳。初見、永正二年(粟田口)。臨能。二場夢幻物。ワキ、勅使。ワキツレ、同從者二人。前シテ、花守の尉(木守神靈)。前ツレ、花守の姥(勝手神靈)。後ツレ、勝手神。後シテ、藏王權現。所、山城嵐山。時、春(三月)。勅使が吉野から嵐山に移植した櫻の花見に行き、藏王權現・木守の神・勝手神の神の影向に逢ふことを作る。〔出典〕「建長年間に後醍醐上皇が龜山殿に吉野の櫻を移植し給うたことがあり、「續古今集」にもそのことが見えるが、嵐山に吉野の櫻を移植したことは明徴がない。

解説

◎蟻通 (ありどほし)

作者、世阿彌。初見、應永三十年(能作)。四番目。一場現實物。ワキ、紀貫之。ワキツレ、同從者二人。シテ、老社人(蟻通明神の化身)。所、和泉蟻通社。時、(四月)。紀貫之が、玉津島參詣の途次、蟻通明神の境内へ知らずに馬を乗り入れたため、神の怒に觸れ、大雨に濡まされたが、和歌の徳で神慮を和げたことを作る。〔出典〕「貫之集」。

解説

◎藍染川 (あゐぞめがは) 〔染川〕

第三篇 鎌倉室町時代 (謡曲)

解説

碓潜 生田敦盛 一角仙人 岩船

七八六

作者不明。初見、大永四年(能本)。四・五番目。二場夢幻物。ワキツレ、宿主左近尉。前シテ、京女(術臺侍従)。子方、梅千代。狂言、神主の後妻。ワキ、太宰府神主。トモ、神主従者。所、筑前太宰府。時、(無季)。太宰府の神主と契つた京女が、一子梅千代を連れ、夫を尋ねて筑紫へ下つたが、神主の後妻に欺かれて藍染川に投身する。神主は歸途これを知り、天満天神に祈つて女を蘇生させることを作る。〔出典〕未詳。

◎碓 潜 (いかりかづき) 〔碓被〕

作者不明。初見、大永四年(能本)。二番目。二場夢幻物。ワキ、都の旅僧。前シテ、漁翁(平教經の靈)。狂言、浦人。後ツレ、二位尼の靈・大納言局の靈。後シテ、平知盛の靈。所、長門早瀬浦。時、(無季)。

都の旅僧、知盛・二位尼らの亡靈に逢ひ、平家滅亡の有様を聞くことを作る。〔出典〕「平家物語」卷十一。

◎生田 敦盛 (いくたあつもり) 〔生田〕

作者、禪風(二百)。初見、大永四年(能本)。二番目。一場夢幻物。子方、敦盛の遺子。ワキ、法然上人の従者。シテ、平教盛の靈。所、山城賀茂社・攝津生田森。時、秋(七月)。

敦盛の遺子が法然上人に拾はれて育てられ、賀茂明神に父との再會を祈り、神の告によつて上人の従者と共に生田森に行き、父敦盛の靈に會ふことを作る。御伽草子「小敦盛」と同村。

◎一角 仙人 (いっかくせんじん)

作者、禪風。初見、大永四年(能本)。五番目。一場現實物。ツレ、旋陀夫人。ワキ、波羅奈國官人。ワキツレ、奥丁二人。シテ、一角仙人。子方、龍神二人。所、天然波羅奈國中。時、(九月)。

印度波羅奈國で、一角仙人が龍神を岩屋に封じこめたが、旋陀夫人の容色に迷ひ、通力を失つたので、龍神が岩屋を出て雨を降らすことを作る。〔出典〕「今昔物語」卷五、「太平記」卷三十七。

◎岩 船 (いはふね)

解説

作者不明。初見、寛正七年(飯尾)。脇能。二場夢幻物(觀世流では後半を削つて一場とす)。ワキ、勅使。ワキツレ、同従者二人。前シテ、童子。後シテ、龍神。所、攝津住吉浦。時、(九月)。

◎鵜 飼 (うかひ)

原作者、江波左衛門。改作者、世阿彌。初見、永享二年(談儀)。五番目。二場夢幻物。ワキ、旅僧(日蓮上人)。ワキツレ、同従者。狂言、石和の者。前シテ、鵜飼の靈。後シテ、閻魔王。所、甲斐石和川。時、夏(五月)。

◎浮 舟 (うきふね) 〔宇治浮舟〕

作者、横尾光久。初見、應永三十年(能本)。四番目。二場夢幻物。ワキ、旅僧。前シテ、里女(浮舟の靈)。狂言、宇治の者。後シテ、浮舟。所、山城宇治・同小野。旅僧が宇治で、里女から浮舟の物語を聞き、のち小野で浮舟の靈に逢ふことを作る。〔出典〕「源氏物語」。

◎雨 月 (うげつ)

作者、禪竹。初見、大永四年(能本)。四番目。二場夢幻物。ワキ、西行法師。前シテ、老翁(住吉明神靈)。前ツレ、老婦。狂言、住吉門守の神。後シテ、住吉神靈の憑いた社人。所、攝津住吉。時、秋(八月)。

西行法師が、住吉の老夫婦の家に宿を求め、雨と月との風流の争を聞き、歌の上句を讀んで、招じ入れられ、明神の賞讃を得ることを作る。〔出典〕「撰集抄」卷五「江口遊女事」、「古今著聞集」第一住吉明神託宣の條。

◎右 近 (うこん) 〔右近の馬場〕

作者、世阿彌。世阿彌の「五音曲條々」にこの曲のこと見え、應永年間の作かと思はれる。脇能。二場夢幻物。ワキ、

解説

第三篇 鎌倉室町時代 (謡曲)

七八七

歌占 内外詣 善知鳥

七八八

鹿島の神職。ワキツレ、同従者二人。前シテ、貴女(櫻葉明神靈)。前ツレ、侍女二人。狂言、所の者。後シテ、櫻葉明神。所、山城北野右近馬場。時、春(三月)。鹿島の神職が上京して右近の馬場の花見に行き、北野の末社櫻葉の神の奇瑞を見ることを作る。「出典」『伊勢物語』十九段。

◎歌 占(うたうら)

作者、世阿彌(能本)。初見、永享二年(談儀)。四・五番目。一場現實物。子方、幸菊丸。ツレ、里人。シテ、神職渡會某。所、加賀白山の麓。時、四月。伊勢二見の神職渡會某が、歌占をしながら諸國を廻つて、子の行方を尋ねるうち、加賀の國で、めぐり會ふことを作る。「出典」曲中に地獄の曲舞のことがあり、それは、『太平記』卷二十「結城入道墮三地獄事」から出てゐる。

◎内外詣(うちとまうで)〔参宮〕

作者、金剛長頼(金剛流の所傳による)。臨能。二場現實物。ワキ、勅使。ワキツレ、同従者二人。シテ、太神宮神官。ツレ、同神子。所、伊勢太神宮。時、(三月)。勅使が伊勢の内外宮に詣て、神官に神樂を奏し、獅子舞を舞はせることを作る。

◎善知鳥(うとう)〔鳥頭八湯〕

作者、世阿彌。初見、寛正六年(親元)。四番目。二場夢幻物。ワキ、旅僧。前シテ、靈師の靈。狂言、外の濱の者。ツレ、靈師の妻。子方、千代童。ワキ、旅僧。後シテ、靈師の靈。所、越中立山の麓・陸奥外の濱。旅僧が越中立山の麓で、陸奥外の濱の靈師の亡靈に逢ひ、故郷の妻子に傳言を頼まれ、衣の片袖を托されたので、外の濱に行つて靈師の妻子に會ひ、供養をしようと、靈師の靈が現はれ、生前善知鳥を殺した報で、苦しめられてゐることを告げ、僧の回向を頼むことを作る。出典末詳。〔参考〕『安齋隨筆』。

◎安女(うねめ)

作者、世阿彌。初見、永正十一年(談儀)。三番目。二場夢幻物。ワキ、旅僧。ワキツレ、從僧二人。前シテ、里女(安女の靈)。狂言、所の者。後シテ、安女。所、大和猿澤池畔。時、三月。帝の龍の變つたのを怨んで、猿澤の池に入水した安女の靈が、旅僧に身の上を語ることを作る。「出典」『大和物語』。

◎鵜祭(うのみつり)

作者並びに初見文献未詳。臨能。二場夢幻物。ワキ、勅使。ワキツレ、同従者二人。前シテ、海女(氣多明神の化身)。前ツレ、海女三人。狂言、氣多末社。後ツレ、八尋玉殿神。後シテ、氣多明神。子方、鵜。所、熊登氣多神社。時、十一月初午。勅使が、氣多神社の十一月初午の神事に参り、明神の影向に逢ふことを作る。

◎梅(うめ)

作者、觀世元章。明和頃成る。三番目。二場夢幻物。ワキ、藤原某。ワキツレ、同従者二人。前シテ、女(梅の精)。狂言、所の者。後シテ、梅の精。所、攝津難波。時、二月。都五條の藤原某が難波の春景色を賞てゐるところへ、梅の精が現はれて、梅の故事を語り、御代をたたへることを作る。全體の出典と見るべきものはない。

◎梅枝(うめがえ)

作者、世阿彌。初見大永四年(能本)。四番目。二場夢幻物。ワキ、身延山の僧。ワキツレ、同従僧二人。前シテ、里女(富士の妻の靈)。狂言、所の者。後シテ、富士の妻。所、攝津住吉。時、(九月)。内裏の管絃の役を争つて、天王寺の俗人淺間に討たれた住吉の俗人富士の妻の亡靈が、旅僧に宿を與へて、回向を乞ふことを作る。「富士太鼓」と同村。事實に取材したものかと思はれるが、俗人の名は、『後撰集』卷十九の駿河の歌「信濃な

鱗形 雲林院 江口 江島

七九〇

る、浅間の山も燃ゆなれば、富士の煙のかひやなからん」に本づいて假作したものであらう。曲名は後シテの奏する「梅が枝に云々」といふ越天樂の唱歌から出てゐる。

鱗形 (うろこがた)

作者並びに初見文献未詳。二場夢幻物。ワキ、北條時政。ワキツレ、同従者二人。前シテ、女(辨才天神靈)。狂言、江島末社神。後シテ、江島辨才天。所、相模江島。時、鎌倉初期(無季)。

北條時政が、江島辨才天より鱗形の旗の紋を授かり、その守護を得ることを作る。〔出典〕「太平記」卷五「時政參籠江島事」。

雲林院 (うんりんゐん)

「能本作者註文」「二百十番諸目録」共に世阿彌作と傳へるが、「申樂談儀」に「雲林院」の能について敘したところが今の曲に合はないから、後に改作したものかと思はれる。三・四番目。二場夢幻物。ワキ、公光。ワキツレ、同従者二人。前シテ、老翁(業平の靈)。狂言、京北山の者。後シテ、在原業平。所、京都雲林院。時、春(二月)。

攝津蘆屋の里の公光といふ者が、「伊勢物語」を愛誦して靈夢を蒙り、雲林院へ行つて業平の靈に逢ひ、「伊勢物語」の秘事を聞くことを作る。〔出典〕「伊勢物語」第四段、「源氏物語」花宴の巻。

江口 (えぐち) 〔江口女〕

作者、世阿彌(能本)。禪竹(二百)。初見、康正二年(歌舞)。三番目。二場夢幻物。ワキ、旅僧。ワキツレ、同従僧。前シテ、里女(江口君の靈)。狂言、所の者。後シテ、江口君。後ツレ、遊女二人。所、攝津江口。時、(九月)。

旅僧が江口の里へ来ると、江口君の幽霊が現はれて、西行法師と贈答した歌のことを語り、船遊びの様を見せることを作る。〔出典〕「撰集抄」第九、「十訓抄」第六。

江島 (えのしま) 〔江之島・江野島・榎島〕

解説

作者、親世彌次郎。初見、大永四年(能本)。脇能。二場夢幻物。ワキ、飲明天皇勅使。ワキツレ、同従者。前シテ、漁翁(五頭龍王靈)。前ツレ、漁夫。狂言、鶴の精。後シテ、五頭龍王。後ツレ、辨才天。後子方、童子二人。所、相模江島。時、飲明天皇御宇(無季)。

相模國江野の海に島が湧き出て、辨才天が影向したことを聞き召されて、飲明天皇が勅使をお遣はしになると、辨才天・龍王が現はれて、奇瑞を示すことを作る。〔出典〕「江島縁起」。

籠 (えびら) 〔籠梅〕

作者、世阿彌(能本)。初見、大永四年(能本)。二番目。二場夢幻物。ワキ、西國の僧。ワキツレ、同従僧二人。前シテ、里男(景季の靈)。狂言、所の者。後シテ、梶原景季。所、攝津生田。時、(二月)。

梶原景季の靈が、旅僧に籠の梅の由来を語り、生田の合戦の標を示すことを作る。〔出典〕長門本「平家物語」・「源平盛衰記」卷三十六「一谷城構事」。

老松 (おいまつ) 〔追松〕

作者、世阿彌。初見、應永三十年(能作)。脇能。二場夢幻物。ワキ、梅津某。ワキツレ、同従者二人。前シテ、老翁(老松の神靈)。前ツレ、男(紅梅殿の神靈)。狂言、所の者。後シテ、老松の神靈。所、筑前安樂寺。時、春(正月)。

梅津某が、靈夢によつて安樂寺に詣り、老松及び紅梅殿の神靈に逢ふことを作る。〔出典〕「源平盛衰記」卷三十二「北野天神飛梅事」。

翁 (おきな) 〔式三番・神歌〕

作者不明。初見、正安三年(繼應記)。番外(但し喜多流では一番目)。歌舞曲。シテ、翁。ツレ、千歳。狂言、三番叟。狂言、面筋持。所、不定。時、(無季)。

数種の歌謡を寄せ集めただけで、敘事的要素や劇的要素は殆ど持つてゐない。文學としては極めて單純なものであるが、能樂としては、古來これを神聖視して、演能の初におき、全く他と別種のものとして取扱つてゐる。「翁」の成立事情につ

解説

解説

解説

解説

解説

解説

いては今説かない。

◎大原御幸 (おはらごかう)

作者、世阿彌(二百)。初見、康正二年(拾玉)。三番目。二場現實物。ワキツレ、大臣。狂言、同従者。前シテ、建禮門院。ツレ、阿波内侍・大納言局。後ツレ、後白河法皇。後ワキ、萬里小路中納言。トモ、供奉與了二人。後シテ、建禮門院。所、山城大原寂光院。時、文治二年四月。平家滅亡後、大原の寂光院に出家して居られた建禮門院が、後白河法皇の御幸を受け、昔を語ることを作る。「出典」「平家物語」卷十一「先帝御入水の事」及び灌頂の巻。

◎大江山 (おほえやま) [酒呑童子]

作者、世阿彌(能本)、宮増(二百)。初見、大永四年(能本)。五番目。二場現實物。ワキ、源頼光、ワキツレ、獨武者・保昌・貞光・季武・綱・公時。狂言、隨從強力・都女。前シテ、酒呑童子。子方、童女二人。後ワキ・ワキツレ、前場と同人。後シテ、鬼神(酒呑童子)。所、丹波大江山。時、秋(七月)。源頼光らが勅命により、山伏姿となつて大江山に入り、酒呑童子を退治することを作る。「出典」「大江山繪詞」か。御伽草子「酒呑童子」と同村。

◎大社 (おほやしろ)

作者、彌次郎。初見、大永四年(能本)。臨能。二場夢幻物。ワキ、朝臣。ワキツレ、同従者二人。前シテ、老社人(杵築大神化身)。前ツレ、社人。狂言、神主・參詣人 巫子。後シテ、杵築大神。後ツレ、天女・龍神。毎年十月に日本國中の神々が出雲にお集りになるので、他國では神無月、出雲では神有月といひ、大社で御神事が行はれると聞き、朝臣が杵築大社に參詣して、杵築大神・天女・龍神などの奇瑞を見ることを作る。口碑に取材したものであらう。

解説

◎項羽 (かうう) [美人草]

作者、世阿彌(能本)。初見、永正二年(能本)。五番目。二場夢幻物。ワキ、草刈男。ワキツレ、同二人。前シテ、老母夫(項羽の靈)。狂言、烏江の渡守。後シテ、項羽。後ツレ、虞氏。所、支那烏江の畔。時、秋(九月)。烏江の草刈男が渡船の舟夫に美人草を所望され、そのわけを問ふと、それは項羽の後虞氏を埋めた塚の上に生へた草だと答へて消え、のち項羽と虞氏の靈が現はれて最期の様を示すことを作る。「出典」「漢書」「史記」「太平記」卷二十八「漢楚合戦の事」。

◎高野物狂 (かうやものぐるひ)

作者、世阿彌、初見、應永三十年(能作)。四番目。二場現實物。前シテ、高師四郎。狂言、同家來。子方、平松春満丸。ワキ、高野山の僧。ワキツレ、同従僧二人。後シテ、高師四郎。所、當陸平松菩提寺・紀州高野山。時、(無季)。平松の臣高師四郎が、主君の遣子春満丸を養育してゐるうち、春満が書置を遺して出家したために、狂氣して尋ね歩き、遂に高野山で再會することを作る。「出典」高野山に關することは、「源平盛衰記」卷四十一「高野山事」「弘法大師入唐事」によつたものであらう。

◎杜若 (かきつばた) [燕子花]

作者、世阿彌。初見、寛正五年(糺河原)。三番目。一場夢幻物。ワキ、旅僧。シテ、里女(杜若の精)。所、三河八橋。時、(四月)。旅僧が八橋で、葉平の歌によまれた杜若の精に逢ひ、伊勢物語のことを聞く。「出典」「伊勢物語」東下りの段。

◎景清 (かげきよ) [盲目景清]

作者、世阿彌。初見、寛正七年(飯尾)。四番目。一場現實物。ツレ、景清女。トモ、同従者。シテ、悪七兵衛景清。ワキ、里人。所、日向宮庭。時、秋。

第三篇 鎌倉室町時代 (謡曲)

解説

解説

解説

解説

解説

解説

柏崎 春日龍神 合浦 葛城

七九四

景清の女人丸が、日向に流されて盲目の乞食となつてゐる父を尋ねてゆき、屋島での功名談を聞くことを作る。出典未詳。佐成謙太郎氏は、「平家物語」の有玉島下りの翻案かといつて居られる。舞の本「景清」と一部同村。

◎柏崎 (かしはさき)

榎並左衛門五郎原作、世阿彌改作。初見、永享二年(談儀)。四番目。二場現貨物。ワキ、柏崎の臣小太郎。前シテ、花若の母。子方、柏崎の子花若。ワキツレ、善光寺住僧。後シテ、花若の母(狂女)。所、越後柏崎・信濃善光寺。時、(十月)。柏崎殿の妻が、家臣小太郎から、夫が鎌倉で死に、一子花若は出家したことを聞き、狂氣して迷ひ歩いたが、善光寺如来堂で花若に再會することを作る。巷説に取材したものであらう。

◎春日龍神 (かすがりうじん) [明慧上人]

作者、世阿彌。初見、寛正六年(親元)。五番目。二場夢幻物。ワキ、明慧上人。ワキツレ、同從僧二人。前シテ、春日宮守(時風秀行)。狂言、春日社人。後シテ、龍神。所、大和春日の里。時、(二月)。

梅尾の明慧上人が、天然に渡ることを志して、春日社に詣ると、明神が奇特を現じて、思ひ止まらせることを作る。[出典]「古今著聞集」卷二。

◎合浦 (かつぼ) [合浦・かつぼの玉]

作者未詳。初見、永享四年(看聞)。五番目。二場現貨物。ワキ、合浦の里人。狂言、漁夫。前シテ、童子(鮫人)。狂言、鱗の精。後シテ、鮫人。

合浦の里人が、漁夫から白色の美魚を買ひ受け、これを助けて海へ放すと、その魚(鮫人)が自分の涙から成つた如意珠を贈つて、救命の恩を謝することを作る。[出典]「蒙求」孟晉還珠の條、「逢異記」、「十訓抄」第一、田樂の古曲。

◎葛城 (かづらぎ) [雪葛城・大峯葛城]

作者、世阿彌。初見、寛正六年(親元)。三・四番目。二場夢幻物。ワキ、羽黒山伏。ワキツレ、同行山伏二人。前シテ、

里女(葛城神靈)。狂言、山下の者。後シテ、葛城の神。所、大和葛城山。時、冬(十一月)。

羽黒の山伏が葛城山で、葛城の神が役行者の呪縛によつて三熱の苦を受けてゐるのを、祈り救ふことを作る。

[出典]「日本靈異記」續日本記「文武天皇三年五月の條」、「今昔物語」卷十二「役優婆塞師三持呪驅鬼神語」、「源平盛衰記」卷二十八「役行者事」。

◎鐵輪 (かなわ) [金輪・鼎]

作者、世阿彌(二百)。初見、長享二年(親長)。四番目。二場夢幻物。狂言、貴船の社人。前シテ、京の女。ワキツレ、下京の男。後ワキ、晴明。後シテ、京女の靈(鬼女)。所、京貴船社前・晴明の邸。時、(九月)。

夫に捨てられた京女が、怨のために貴船の社に丑の刻參りをし、鬼となつて、男と後妻とを取殺さうとしたが、安倍晴明の祈によつて退散せしめられることを作る。[出典]「平家物語」鐵の巻。

◎兼平 (かねひら)

作者、世阿彌。初見、大永二年(能本)。但し永享二年の「申樂談儀」に「柴舟」と見えるものが同曲かも知れない。二番目。二場夢幻物。ワキ、木曾の僧。前シテ、老船頭(兼平の靈)。狂言、矢橋の渡守。後シテ、今井兼平。所、近江矢橋の渡船・同栗津原。時、(四月)。

木曾の僧が義仲の戦死の跡を弔はうとし、矢橋の渡船で、老船頭(兼平の靈)に名所の話を聞き、栗津原で、兼平の亡霊から、主君義仲らの最期の様を聞くことを作る。[出典]「平家物語」卷九「河原合戦の事」、「木曾の最期の事」。

◎賀茂 (かも) [鴨・矢立鴨・矢立加茂]

作者、禪竹。但し「能本作者註文」に「奥は實生大夫作」とあるから、實生大夫の改作を経たものであらう。初見、永正十一年(談儀)。臨能。二場夢幻物。ワキ、室の神職。ワキツレ、從者二人。前シテ、里女(賀茂御祖神靈)。前ツレ、里女。狂言、賀茂末社神。後ツレ、天女(御祖神)。後シテ、別雷神。所、山城賀茂。時、六月中旬。

播磨國室の神職が、賀茂明神に參詣して、神靈に逢ひ、川邊の白羽の矢の由來を聞くことを作る。[出典]「釋日本記」

第三篇 鎌倉室町時代 (謡曲)

七九五

解説

解説

解説

解説

解説

解説

解説



所引「山城國風土記」本朝月令所引「秦氏本系帳」賀茂神社縁起類。

◎賀茂物狂 (かもものぐるひ) [加茂物狂・鴨物語]

作者不明。初見、大永四年(能本)。四番目。一場現實物。ワキ、都の男(夫)。ワキツレ、同従者二人。シテ、女(妻)。所、山城賀茂。時、四月中の酉の日。

都の男が東國へ行つて三年歸らない間に、妻が戀慕の餘り狂氣して夫を尋ね歩いたが、賀茂の祭に再會することを作る。「徒然草」第六十七段の實方・樂平に關する傳説の記事によつてゐるが、全體の出典と見るべきものはない。

◎通小町 (かよひごまち) [四位少將・市原小町]

大和某聖道原作、親阿彌改作。初見、永享二年(談儀)。四番目。二場夢幻物。ワキ、僧。前ツレ、里女(小町の靈)。後ツレ、小野小町。シテ、深草少將の靈。所、山城八瀬・同市原野。時、(九月)。

八瀬で一夏を送つてゐる僧の許に、一人の里女が毎日木の實や妻木を持つて來てくれるので、その名を尋ねると、市原野の小町といひさして消えた。僧は市原野へ行つて、小町の跡を尋ふと、小町の靈と深草少將の靈とが現はれ、百夜通ひの様を示し、僧の供養によつて成佛することを作る。「出典」[袖中抄]所引「歌論議」江家次第「右官出車の條」古事談」第二。

◎邯鄲 (かんたん) [邯鄲枕・蘆生]

作者、世阿彌(二百)。初見、康正二年(歌舞)。四番目。一場現實物。狂言、邯鄲の宿主。シテ、蘆生。ワキ、夢中の勅使。ワキツレ、夢中の與丁二人・夢中の大臣二人。子方、夢中の舞人。所、支那邯鄲の里。時、(無季)。

蜀の蘆生といふ青年が、善知識の教を受けようと思つて楚國へ行く途中、邯鄲の里で、宿主の貸した邯鄲の枕をし、粟飯を炊く間に、五位に昇つて榮華を極めた夢を見、名利を夢と悟つて歸國することを作る。「出典」唐の李泌著「枕中記」。「太平記」卷二十五「黃梁夢事」。

解説

◎咸陽宮 (かんやうきう) [荆柯]

作者並びに初見文獻未詳。四・五番目。一段現實物。狂言、秦の官人。シテ、秦始皇帝。ツレ、花陽夫人。ツレ、侍女数人。ワキツレ、大臣三人。ワキ、荆柯。ワキツレ、秦舞陽。所、秦咸陽宮。時、(十月)。

燕の荆柯と秦舞陽とが、秦の叛將樊於期の首と燕の地圖を携へて、始皇に謁し、始皇を刺さうとしたが、花陽夫人の琴の音に聞き惚れて、却つて討たれることを作る。「出典」[史記]「燕丹子」[平家物語]卷五「咸陽宮の事」。

◎鬼界島 (きかいがしま) [俊寛(しゆんくわん)參照]

◎菊童 (きくじどう) [枕慈童]

作者不明。初見、大永四年(能本)。四番目。一場現實物。ワキ、魏文帝勅使。ワキツレ、同従者二人。シテ、慈童。所、支那鄴縣山。時、秋(九)。

魏文帝の使臣が、薬の水を尋ねて鄴縣山にゆき、七百年前に周の穆王に仕へた慈童が、この山に配流された時、王から賜はつた枕の要文を菊の葉にうつして、その露を吸つたために、仙人となつて生きながらへてゐたのに逢ひ、慈童も自分の長命に驚き、文帝の代を祝福することを作る。「出典」[太平記]卷十三「龍馬進奏の事」。

◎木曾 (きそ) [木曾願書・殖生]

作者不明。初見、大永四年(能本)。四番目。一場現實物。ツレ、木曾義仲。シテ、覺明。ツレ、池田次郎。ツレ、義仲従兵数人。所、越中殖生。時、壽永二年五月。

木曾義仲が、越中殖生で、覺明作の願書を八幡宮に納め、俱利伽羅で平氏の軍に大勝したことを作る。「出典」[平家物語]卷七「木曾の願書」。

◎砧 (きぬた) [碓]

作者、世阿彌。初見、永享二年(談儀)。四番目。二場夢幻物。前ワキ、蘆屋某。前ツレ、侍女夕霧。前シテ、蘆屋某妻。

解説

解説

解説

解説

解説

解説

解説

狂言、蘆屋の臣。後ワキ、蘆屋某。ワキツレ、同太刀持。後シテ、蘆屋妻の靈。所、筑前蘆屋。時、(九月)。蘆屋の某が訴訟のために上京して三年たつても歸らないので、妻は夫を慕つて碯を打つて心を慰めてゐたが、遂に夫の變心を疑ひ、狂死した。蘆屋が歸つて跡を弔ふと、妻の亡靈が現はれて、惡をのべることを作る。出典と見るべきものはない。

◎清 經 (きよつね) [清常]

作者、世阿彌。初見、應永三十年(能作)。二番目。一場夢幻物。ワキ、淡路三郎。ツレ、平清經の妻。シテ、平清經の靈。所、京都清經館。時、壽永二年秋(九月)。淡路三郎が、豊前柳が浦で戦に敗れて入水した主君清經の形見の黒髪を携へて都に歸つたのを見て、清經の妻が悲歎に沈むと、清經の亡靈が現はれて、平家敗戦の様を語ることを作る。[出典]「源平盛衰記」卷三十三「清經入海事」。

◎祇 王 (ぎわう) [妓王・二人祇王]

作者不明。初見、大永四年(能作)。三番目。二場現實物。ワキ、瀬尾太郎。前ツレ、祇王。前シテ、佛。狂言、瀬尾の従者。後ツレ、祇王。後シテ、佛。所、京清盛館。時、(三月)。清盛に寵愛されてゐた白拍子祇王が、加賀國から推参した白拍子佛に同情して、佛を清盛に見参させ、清盛の愛が佛に移つたが、佛は祇王への義理でこれに應じなかつたことを作る。[出典]「平家物語」卷一「祇王の事」。

◎金 札 (きんさつ)

作者、世阿彌。初見、享徳四年(五音次第)。脇能。二場夢幻物(觀世流現行曲は一場物、即ち半能として前半を略す)。ワキ、桓武天皇勅使、ワキツレ、同従者二人。前シテ、老翁。狂言、伏見社人。後シテ、天津太玉神。所、山城伏見。時、(正月)。桓武天皇が平安安都に當り、伏見に神殿を造營し給ひ、勅使をお遣はしになると、天津太玉神が金札を降らして、惡魔降伏、國土鎮護を誓はれることを作る。出所未詳。

◎草 薙 (くさなぎ)

作者並びに初見文献未詳。四番目。二場夢幻物。ワキ、惠心僧都。前シテ、花賣男(日本武尊の靈)。前ツレ、花賣女(橘姫の靈)。狂言、熱田社人。後シテ、日本武尊。後ツレ、橘姫。所、尾張熱田神宮。時、平安中期。五月(四月)。熱田神宮に參籠した惠心僧都に、日本武尊と橘姫との靈が現はれて、草薙の劍の威徳を語ることを作る。[出典]「古事記」[日本書紀]「平家物語」劍の卷。

◎國 栖 (くす)

作者、世阿彌(二百)。初見、天文三年(言繼)。五番目。二場夢幻物。子方、天武天皇。ワキ、供奉官人。ワキツレ、奥丁二人。前シテ、老翁。前ツレ、老嫗。狂言、追手武士二人。後ツレ、天女。後シテ、藏王權現。所、大和吉野。時、春(三月)。清見原天皇(天武)が叛亂のために吉野に逃れ給つた時、山神の化身なる老夫婦が、根芹・國栖魚を捧げ、天皇を追手の危難から救ひ、後、藏王權現・天女となつて現はれることを作る。[出典]「源平盛衰記」卷十四「清見原天皇の事」同卷一「五節始」の條、宇治拾遺物語「卷十五清見原天皇與大友皇子合戦の事」。

◎楠 の 露 (くすのつゆ)

喜多流「櫻井」の曲を改作し、觀世清康が節附したものといふ(古今談曲解題)。四番目。一場現實物。ツレ、楠正成。トモ、同従者。シテ、恩地滿一。子方、楠正行。所、攝津兵庫。時、延元元年五月。楠正成が、朝敵源氏討伐のために、兵庫の津に向ひ、一子正行に教訓して、生別の宴を張り、正行の傳恩地滿一の舞の後、正行恩地に伴はれて故郷へ歸ることを作る。[出典]「太平記」卷十六「正成下二向兵庫」事。

◎九 世 戸 (くせのと) [久世戸・九世渡]

作者、觀世小次郎(能本)。初見、大永四年(能本)。脇能。二場夢幻物。ワキ、朝臣。ワキツレ、同従者二人。前シテ、

熊坂 鞍馬天狗 車僧

漁翁。前ツレ、漁夫。狂言、九世戸門守神。後ツレ、天女。後シテ、龍神。所、丹後九世戸。時、六月中旬。九世戸に詣つた朝臣に、さいしやう老人の化身なる漁翁が、九世戸文珠の縁起を語り、やがて天女・龍神が現はれて、佛に燈明を捧げることを作る。出典未詳。

◎熊坂 (くまさか) [幽霊熊坂]

作者、禪竹(二百)。但し「能本作者註文」には作者不明としてある。初見、永正十一年(談儀)。五番目。二場夢幻物。ワキ、都の僧。前シテ、僧(長範の靈)。狂言、所の者。後シテ、熊坂長範。所、美濃赤坂。時、(九月)。美濃の赤坂で、熊坂長範の靈が、都の旅僧に、牛若に殺された次第を語り、回向を頼むことを作る。「鳥朝子折」の後半と同材。「出典」「平治物語」卷三、「義經記」卷二。

◎鞍馬天狗 (くらまてんぐ)

作者、宮附。初見、寛正五年(異本)。五番目。二場夢幻物。前シテ、山伏(大天狗)。狂言、西谷能力。前子方、牛若丸・平家公達数人。前ワキ、鞍馬東谷の僧。ワキツレ、同従者。狂言、木葉天狗二人。後子方、牛若丸。後シテ、大天狗。所、山城鞍馬山。時、(三月)。

鞍馬東谷の僧が、牛若らを伴れて西谷の花見に行き、見馴れぬ山伏に逢つて、牛若の外は皆立歸つたあとで、山伏が大天狗の姿を現はし、牛若に兵法を授けることを作る。「出典」「平治物語」同崎本及び京師本卷三「牛若里州下りの事」、「義經記」卷二「牛若貴船詣の事」、舞の本「未來記」。

◎車僧 (くるまぞう)

作者、世阿彌。初見、永正十一年(談儀)。五番目。二場夢幻物。ワキ、車僧。前シテ、山伏妻の大天狗。狂言、溝越天狗。後シテ、愛宕山大天狗。所、山城嵯峨野。時、冬(十二月)。愛宕の太郎坊天狗が、車僧を打負さうと思ひ、禪問答をしたが失敗し、後、天狗姿で現はれ、行較べをして、結局車僧に降伏することを作る。口碑に傳はる車僧傳説に取材したものであらう。

◎吳服 (くれはとり) [吳機・吳羽]

作者、世阿彌。初見、大永四年(能本)。臨能。二場夢幻物。ワキ、當今臣下。ワキツレ、同従者二人。前シテ、女(吳機の靈)。前ツレ、女(漢織の靈)。狂言、所の者。後シテ、吳機。所、攝津吳服の里。時、(九月)。

吳機・漢織の靈が、吳服の里で、西の宮參詣の朝臣に、機織の由来を語り、君が代を祝福して、機を織つて奉ることを作る。「出典」「日本書紀」應神紀・雄略紀。

◎黒塚 (くろづか) [安達原(あだちがはら)参照]

◎皇帝 (くわうてい) [明王鏡・玄宗・御惱楊貴妃]

作者、觀世小次郎。初見、大永四年(能本)。五番目。二場夢幻物。狂言、唐官人。子方、楊貴妃。ワキ、唐玄宗。ワキツレ、大臣二人。前シテ、老翁(鐘馗の靈)。後ツレ、病鬼。後シテ、鐘馗の靈。所、唐の宮殿。時、(三月)。

鐘馗の靈が、玄宗皇帝へ報恩のために、明王鏡に映つた病鬼を退治して、寵姫楊貴妃の病を癒し、守護神となることを作る。「出典」「長恨歌」、「天中記」所引「唐逸史」。

◎花月 (くわげつ) [果月]

作者、世阿彌。初見、應永三十年(能作)。四番目。一場現實物。ワキ、僧(花月の父)。狂言、清水門前の者。シテ、花月。所、京都清水寺。時、春(三月)。

筑紫彦山の麓の左衛門が出家して、彦山の天狗にさらはれた子息の行方を尋ねるうち、京都清水寺の花の下で、花月と稱して小歌・曲舞などを誦ひ舞つてゐるわが子に再會することを作る。悲説に取材したものであらう。

◎月宮殿 (げつきうてん) [鶴龜(つるかめ)参照]

◎現在七面 (げんさいしちめん) [身延]

作者未詳。江戸時代の作か。四・五番目。二場夢幻物。ワキ、日蓮上人。ワキツレ、同従者二人。前シテ、里女(龍女)。

第三篇 鎌倉室町時代 (謡曲)

解説

解説

解説

解説

解説

解説

解説

源氏供養 絃上 源太夫

狂言、能力。後シテ、龍女。所、甲斐身延山。時、(無季)。日蓮上人が法華經の功德で、七面の池に棲む龍女を成佛させることを作る。「出典」『法華經』提婆達多品。

◎源氏供養 (げんじくやう) [紫式部]

作者、世阿彌または和州十二太夫の先祖河上神主(能本)、禪竹(二百)。初見、寛正五年(糺河原)。三番目。二場夢幻物。ワキ、安居院法印。ツレ、同從僧二人。前シテ、里女(紫式部の靈)。狂言、門前の者。後シテ、紫式部。所、近江石山。時、春(三月)。安居院の法印が、石山の觀音に參詣の途中、紫式部の靈に逢ひ、石山寺で「源氏物語」の供養をすることを作る。「出典」『源氏物語表白』。

◎絃上 (げんじやう) [玄象・玄上・絃聲]

作者、金剛彌五郎(二百)。初見、天文元年(言繼)。五番目。二場夢幻物。ツレ、藤原師長。ワキ、同從者。ワキツレ、同二人。前シテ、老翁(村上天皇靈)。前ツレ、老姫(梨壺女御靈)。後シテ、村上天皇。後ツレ、龍神。所、攝津須磨。時、秋(八月)。

藤原師長が入唐して琵琶の奥儀を究めようと思ひ立ち、須磨の浦で一夜を明かすうち、村上天皇と梨壺女御との靈が現はれて、琵琶の秘曲を彈じ、入唐を断念した師長に、龍神を呼んで獅子丸の琵琶を取寄せて授け給ふことを作る。「出典」『平家物語』卷七「青山の沙汰の事」。

◎源太夫 (げんだいふ)

作者、禪竹(能本)。初見、大永四年(能本)。脇能。二場夢幻物。ワキ、勅使。ワキツレ、同從者二人。前シテ、老翁(脚摩乳即ち源太夫の靈)。前ツレ、老姫(手摩乳の靈)。狂言、熱田末社神。後ツレ、橋姫(天女)。後シテ、源太夫神。所、尾張熱田神宮。時、(六月)。勅使が熱田神宮に參詣して、稲田姫の父母、脚摩乳・手摩乳の神と橋姫との奇瑞を見ることが作る。「大蛇」及び「草薙」の

結合したものである。

◎元服會我 (げんぶくそが)

作者、宮增(能本)。初見、永享四年(看聞)。四番目。二場現實物。シテ、曾我十郎祐成。ツレ、從者團三郎。狂言、箱根能力。ワキ、箱根別當。子方、箱王丸。所、相模箱根寺・箱根街道旅宿。

曾我十郎が、箱根の別當から弟箱王丸を申受けて、曾我へ連れ歸る途中、旅宿で彼を元服させ、別當も来て、重代の太刀を與へることを作る。「出典」『吾妻鏡』建久元年九月七日の條、「曾我物語」卷四、舞の本「元服會我」。

◎小督 (こがう) [仲國]

作者、禪竹。初見、大永四年(能本)。四番目。二場現實物。ワキ、高倉院勅使。前シテ、彈正大弼仲國。狂言、鯉嶋宿主。ツレ、小督局。トモ、同侍女。後シテ、仲國。所、京都仲國宅・鯉嶋小督假住居。時、八月十五夜。

仲國が、中秋の月夜に高倉院の仰を蒙つて、鯉嶋野に小督局の所在を尋ね、想夫戀の琴の音によつて、その隱家を探し當てて、御書を傳へることを作る。「出典」『平家物語』卷六「小督の事」。

◎小鍛冶 (こかぢ) [小狐]

作者並に初見文献未詳。五番目。二場夢幻物。ワキツレ、橋道成。前ワキ、小鍛冶宗近。前シテ、童子(稻荷の神靈)。狂言、稻荷の里人。後ワキ、宗近。後シテ、稻荷明神。所、宗近宅・稻荷山・宗近宅。時、一條天皇の御宇(十一月)。

御靈製作の勅命を受けた小鍛冶宗近が、稻荷明神に祈つて、明神の相違を得、小狐丸の名劍を打つて差上げることを作る。三條小鍛冶宗近の名は一條兼良の「尺素往来」に見え、小狐丸のことは「保元物語」半井本卷一「官軍勢揃の事」の條などに見えるが、兩者を結びつけた最初のものが何であるかは明らかでない。

◎小袖會我 (こそでそが)

作者並に初見文献未詳。四番目。一場現實物。シテ、曾我十郎祐成。ツレ、曾我五郎時致。ツレ、從者團三郎。ツレ、

第三篇 鎌倉室町時代 (話曲)

解説

解説

解説

解説

解説

解説

解説

同鬼王。ツレ、曾我兄弟の母。狂言、乳母春日局。所、相模曾我の館。時、建久四年五月。曾我兄弟が富士野へ赴いて父の仇を討たうとし、故郷の母に會つて暇を乞ひ、十郎の取做して、五郎も母の勸當を許され、共に喜んで富士野へ出發することを作る。舞の本「小袖曾我」と同村。「出典」「曾我物語」卷七。

◎胡蝶 (こてふ) 【小蝶・胡蝶】

作者、親世小次郎。初見、大永四年(能本)。三番目。二場夢幻物。ワキ、吉野の僧。ワキツレ、同從僧二人。前シテ、里女(胡蝶)。狂言、都の者。後シテ、胡蝶の精。所、京一條大宮。時、春(二月)。

胡蝶の精が、一條大宮の或古宮の梅花を見てゐる旅僧の前に現はれ、自分の梅花に縁のないのを嘆き、法華經の讀誦を乞うて、成佛することを作る。文中に、「莊子」齊物論の胡蝶の夢の記事、「源氏物語」胡蝶の卷の記事などを取入れてゐる。

◎戀重荷 (こひのおもに) 【おもに】

原作者不明。改作者、世阿彌。初見、應永三十年(能本)。四番目。二場夢幻物。ツレ、女御。ワキ、白河院臣下。狂言、同從者。前シテ、山科莊司。後シテ、同亡靈。所、京都御所内。時、白河院御宇(九月)。

女御に懸想した菊作りの下人が、重荷を擔つてお庭を百度千度廻れば御姿を拜ませようとの難題を受け、これを果さうとして遂に空しくなる。後亡靈となつて現れ怨を述べるが、やがて心解け女御の御榮を祈ることを作る。古曲「綾の太鼓」を改作したもので、「綾鼓」と同型である。

◎西行櫻 (さいぎやうざくら)

作者、今春禪竹。初見、康正二年(歌舞)。三・四番目。一場現實物。ワキ、西行法師。狂言、能力。ワキツレ、花見の人三・四人。シテ、老櫻の精(老翁)。所、京西山、西行庵室。時、春(三月)。

静寂の庵を花見の人々に侵された西行が、「花見んと群れつゝ人の來るのみぞ、あたら櫻のとがにはありける」と詠み、假寐の中に櫻の精が現はれて、己が身を嘆じて舞を舞ふ夢を見ることを作る。「出典」「玉葉集」「山家集」。

解説

◎草子洗小町 (さうしあらひこまち) 【草子洗・冊子洗・双子洗】

作者、世阿彌(能本)、又は親阿彌(二百)。初見、大永四年(能本)。三番目。二場現實物。前ワキ、大伴黒主。狂言、同從者。前シテ、小野小町。子方、天皇。後シテ、小野小町。後ツレ、壬生忠岑。後ツレ、凡内躬恒。後ツレ、官女二人。後ツレ、紀貫之。後ワキ、大伴黒主。所、小野小町宅・御所清涼殿。時、四月中旬。

黒主は小町の詠歌を立聞きして、これを萬葉集に書き入れ、御歌合の當日古歌として訴へたが、小町その草子洗つて宛を雪ぐ。愧ぢて自害しようとした黒主も、勅説によりもとの座に直り、小町めてたく舞ひ納めることを作る。「出典」古今集序に登場人物の名は見られるが、仕組の典拠は明かでない。

◎逆矛 (さかほこ) 【逆鋒】

作者、世阿彌(能本)、又は宮増(二百)。初見、永享四年(看聞)。脇能。二場夢幻物。ワキ、當今臣下。ワキツレ、同從者二人。前シテ、老翁(瀧祭神の神靈)。前ツレ、若き男。狂言、山下の者。後ツレ、天女。後シテ、瀧祭神。所、大和國龍田山。時、九月下旬。

朝臣が龍田明神に詣り、守護神瀧祭神の神に遭ひ、室山に納められた御矛の由來を聞くことを作る。「出典」「神皇正統記」卷一、「龍田大明神御事」(續群書類從卷四十八)。

◎鷺 (さぎ) 【五位鷺】

作者、世阿彌(二百)。初見、大永四年(能本)。四番目。一場現實物。狂言、官人。ツレ、天皇。ワキ、藏人。ワキツレ、大臣三人。ワキツレ、與泉二人。シテ、鷺。所、京都神泉苑。時、醍醐天皇御宇、夏(六月)。

帝が神泉苑に行幸された時、洲崎の鷺を捕へよとの勅を奉じ、藏人が之を捕へよとして、飛び立つ鷺に勅説であることを聞かすと、鷺は伏して藏人の意に任せたので、帝は藏人と鷺に五位を賜ふことを作る。「出典」「平家物語」卷五「朝敵ぞろへの事」、「源平盛衰記」卷十七「藏人取鷺事」。

解説

解説

解説

解説

解説

解説

櫻川 實盛 佐保山 三笑

解説

◎櫻川 (さくらがは) [櫻子]

作者、世阿彌。初見、永享二年(談儀)。四番目。二場現實物。ワキツレ、人商人。前シテ、櫻子の母。子方、櫻子。ワキ、磯邊寺住僧。ワキツレ、同從僧二人。ワキツレ、里人。後シテ、櫻子の母(狂女)。所、日向國櫻の馬場・常陸國櫻川。時、春(三月)。

日向國櫻の馬場の櫻子は、母の貧を救はうとして人商人に身を賣り、東國に下つたが、三年後常陸國櫻川で、狂女となつた母に再會し、母子喜んで佛道に入ることを作る。狂女物の一。

◎實盛 (さねもり) [眞盛・篠原・篠原實盛]

作者、世阿彌。初見、應永三十年(能作)。二番目。二場夢幻物。狂言、所の者。ワキ、僧(他阿彌上人)。ワキツレ、從僧二人。前シテ、老翁(齋藤實盛の靈)。後シテ、齋藤實盛。所、加賀國篠原。時、室町初期(八月)。

加賀國篠原で念佛説法をしてゐる上人の許へ、二百年前に討死した齋藤實盛の靈が現はれ、手塚太郎に討ち取られるまでの戦の顛末を語り、弔を請ふことを作る。[出典]「平家物語」卷七「實盛最後の事」。

◎佐保山 (さほやま) [三保山]

作者、世阿彌。初見、康正二年(歌舞)。臨能。二場夢幻物。ワキ、藤原俊家。ワキツレ、同從者三人。前シテ、里女(佐保山姫靈)。前ツレ、同侍女。狂言、所の者。後シテ、佐保山姫。所、大和國佐保山。時、平安末期、二月初申の日。

藤原俊家が春日に參詣して、佐保山に白雲のやうにかかつてゐるものに不審を懷き、山に登つて見ると、女が「葦ち織はぬ衣」を晒してゐるが、この女はやがて佐保山の妻を現はして、御代を語り、舞を舞ふことを作る。

◎三笑 (さんせう) [三咲]

作者未詳。初見、文祿四年(言経)。四番目。一場現實物。狂言、門前の者。シテ、慧遠禪師。ツレ、陶淵明。ツレ、陸修靜。所、支那廬山。時、晋・宋の頃(十一月)。

解説

◎志賀 (しが) [大伴・黒主・志賀黒主]

作者、世阿彌。初見、應永三十年(能作)。臨能。二場夢幻物。ワキ、當今臣下。ワキツレ、同從者二人。前シテ、老樵夫(大伴黒主の靈)。前ツレ、樵夫。狂言、山下の者。後シテ、志賀明神(黒主)。所、近江國志賀山。時、春(三月)。

◎七騎落 (しちきおち) [七騎落忍]

作者未詳。初見、文明十五年(親元)。四番目。二場現實物。ツレ、源頼朝。シテ、土肥實平。ツレ、新開次郎。ツレ、土屋三郎。ツレ、田代信綱。ツレ、土佐坊。子方、土肥遠平。ツレ、岡崎義實。後ワキ、和田義盛。狂言、船頭。後子方、土肥遠平。所、相模灣の海岸・同じく沖合より海岸へ。時、治承四年八月。

石橋山に敗戦した頼朝等が、海路上總に落ちのびようとした時、頼朝は八騎落を因例とし、一人を減すべく實平に命じたので、實平は遂に我が子遠平を陸に残したが、後、海上で和田義盛の船中に救はれた遠平に邂逅して、一同喜びの酒宴を催すことを作る。[出典]「平家物語」卷五「大場が早馬の事」、「曾我物語」卷二「頼朝七騎落の事」、「源平盛衰記」卷二十一・卷二十二「兵衛佐殿隠三隊木事」、「小道地藏堂」、「佐殿清三合三浦事」。

◎自然居士 (じねんこじ)

作者、觀阿彌。初見、應永廿五年(口傳)。四番目。一場現實物。狂言、雲居寺門前の者。シテ、自然居士。子方、女兒。ワキ、人商人。ワキツレ、人商人。所、京都雲居寺、近江國大津湖畔。時、鎌倉時代(無季)。

説法中の自然居士のもとへ、一少女が兩親追善の爲に風謠を捧げたが、やがて人買に引き立てられて去つたのを、居士これを追ひ、大津の浦で人買の前に請藝を演じ、少女を取戻して歸ることを作る。

第三篇 鎌倉室町時代 (謡曲)

狸々 正尊 石橋 舍利

八〇八

○狸々 (しやうん)

作者、世阿彌。初見、寛正七年(飯尾)。五番目祝言能。一場現實物。ワキ、かうふう。シテ、狸々。所、支那淨陽江の邊。時、九月。かうふうといふ親孝行者が、夢の告に従ひ、酒を賣つてゐると、海中の狸々が来て酒を飲み、無盡蔵の酒の泉を興へることを作る。「出典」「庭訓往來註」の「市町之興行」の註に類似の説話があるが、その原據は詳かでない。

○正尊 (しやうぞん) [昌俊・正存・土佐坊・土佐正存]

作者、觀世彌次郎。初見、大永四年(能本)。四・五番目。二場現實物。ツレ、源義經。子方、靜御前。ツレ、江田源三。ツレ、熊井太郎。ワキ、武藏坊辨慶。前シテ、土佐坊正尊。狂言、義經の侍女。後シテ、土佐坊正尊。後ツレ、姉和光景。立案、正尊郎黨三・四人。所、京都義經館。時、文治元年九月。義經を狙ひ討つために、鎌倉より上つて来た土佐坊正尊が、義經の面前で糺明され、起清文を書いたが、辨慶は彼の眞意を知り、正尊の夜討を迎へ討つてこれを博りあげることを作る。「出典」「吾妻鏡」卷五文治元年十月十七日の條、「平家物語」卷十二「土佐坊斬られの事」、「源平盛衰記」卷四十六「土佐坊上治の事」、「長門本平家物語」卷十九「土佐坊夜討並頸被切事」、「義經記」卷四「土佐坊義經の討手に上る事」。

○石橋 (しやくけう) [獅子]

作者、世阿彌(能本)、又は元雅(二百)。初見、寛正六年(親元)。「獅子」永享二年(談儀)。五番目。二場夢幻物。ワキ、寂昭法師。前シテ、童子。狂言、文殊菩薩の從者。後シテ、獅子。所、支那清涼山麓。時、平安盛期(四月)。

寂昭法師が清涼山に来て、石橋を渡らうとした時、童子現はれて橋の謂れを語り、奇特の出現を暗示して去ると、獅子が現はれ舞を演じて見せることを作る。「出典」寂昭法師のことは「十訓抄」に見えてゐるが、脚色に關する典據は詳かでない。

○舍利 (しやり)

解説

作者、世阿彌。初見、寛正五年(隆涼)。五番目。二場夢幻物。ワキ、出雲僧。狂言、泉涌寺能力。前ジテ、里人(足疾鬼の靈)。後シテ、足疾鬼。後ツレ、草駄天。所、京都泉涌寺、天上界。時、無季。出雲の僧が泉涌寺で舍利を拜んでゐると、足疾鬼が里人となつて現はれ、舍利の謂れを語る中、眞の姿を現はし、舍利を奪つて逃げたが、やがて草駄天現はれ、これを追ひつめて舍利をとりかへす事を作る。「出典」「太平記」卷八「谷堂炎上事」。

○春榮 (しゆんえい)

作者、世阿彌。初見、大永四年(能本)。四番目。一場現實物。子方、増尾春榮。ワキ、高橋權頭。狂言、同從者。シテ、増尾種直。トモ、同從者。ワキツレ、早打。所、伊豆國三島高橋權頭館。時(八月)。

宇治橋の合戦で高橋權頭に生捕られた春榮の兄種直は、共に誅せられようとして訪ねて来たが、鎌倉より春榮助命の早打が来たので、一同大いに喜び、春榮は高橋の養子となり、うち連れて鎌倉にゆくことを作る。

○俊寛 (しゆんくわん) [俊寛僧都・鬼界島・鬼海島・硫黄島]

作者、世阿彌。初見、康正二年(歌舞)。四番目。一場現實物。前ワキ、教免使。ツレ、丹波少將成經。ツレ、平判官康頼。シテ、僧都俊寛。後ワキ、教免使。狂言、舟夫。所、薩摩湯鬼界島。時、治承二年九月。

平家倒滅の隠謀顯れ、鬼界島に流された三人の中、康頼・成經のみ大敵によつて免され、哀願叫喚する俊寛を残して都へ漕ぎ去つてゆくことを作る。「出典」「源平盛衰記」卷九「康頼兼野詣附祝言事」卷十「丹波少將上洛事」、「平家物語」卷二「康頼祝詞の事」卷三「足摺の事」。

○俊成忠度 (しゆんぜいただのり) [五條忠度]

作者、内藤藤左衛門(能本)。初見、大永四年(能本)。二番目。一場夢幻物。ツレ、藤原俊成。トモ、同從者。ワキ、同部六彌太。シテ、平忠度の靈。所、京五條藤原俊成邸。時、壽永三年(三月)。忠度を討ち取つた同部六彌太が、その形見の短冊を持つて、藤原俊成を訪ねると、忠度の靈が現はれて、自分の歌を讀

第三篇 鎌倉室町時代 (謡曲)

八〇九

解説

解説

解説

解説

解説

解説

人不知として「千載集」に入れられた恨みを述べ、和歌の物語をし、やがて修羅の苦患を示す事を作る。「出典」『平家物語』卷七「忠度の都落の事」卷九「忠度の最期の事」、「源平盛衰記」卷三十二「落行人々歌附忠度自れ流歸詞」後成「事」卷三十七「忠度通盛等最後事」。

○鐘 馗 (しろうき)

作者、金春禪竹(能本)。初見、大永四年(能本)。五番目。二場夢幻物。ワキ、終南山麓の者(旅人)。前シテ、鐘馗の靈。狂言、山下の者。後シテ、鐘馗。所、支那終南山より都に到る途中。時、(九月)。

終南山の者が都に上る途中、國土守護の願を持つ鐘馗に遭ひ、諸々の奇瑞を見ることを作る。「出典」『皇帝』參照。

○白 髭 (しらひげ) [白髭]

作者、金春禪竹(能本)。觀阿彌(二百)。初見、大永四年(能本)。但し「五音曲條々」にも「白髭」の名が見える。脇能。二場夢幻物。ワキ、當今勅使。ワキツレ、同從者二人。前シテ、漁翁(白髭明神々靈)。前ツレ、漁夫。狂言、白髭末社神。後シテ、白髭明神。後ツレ、天女。後ツレ、龍神。所、近江國白髭明神社。時、春(三月)。

勅使が白髭の社に參詣すると、明神が現はれ社の縁起を語り、奇特を現じ御代を祝ふことを作る。「出典」『太平記』卷十八「比叡山開闢事」。

○代 主 (しろぬし) (白主・葛城加茂・葛城鴨)

作者、世阿彌(能本)。脇能。二場夢幻物。ワキ、京都賀茂の神職。ワキツレ、同從者二人。前シテ、葛城賀茂の老社人(事代主神靈)。前ツレ、同社人。狂言、葛城賀茂の者。後シテ、事代主神。所、大和國葛城賀茂明神の社前。時、四月。

京の賀茂の神職が、葛城賀茂明神に參詣すると、老翁現はれ、京・葛城南賀茂明神の關係及びその神徳を述べ、後に事代主の神の姿を顯はして奇特を示す事を作る。「出典」『事代主神』については「神皇正統記」卷一に見え、兩賀茂社の關係については「四季物語」(傳鴨長明作)に見えてゐる。

○須 磨 源 氏 (すまげんじ) [須磨源氏]

作者、世阿彌(能本)。初見、大永四年(能本)。五番目。二場夢幻物。ワキ、宮崎社官藤原興範。ワキツレ、同從者二人。前シテ、老樵夫(光源氏の靈)。狂言、須磨の者。後シテ、光源氏。所、攝津國須磨浦。時、三月。

藤原興範が伊勢參宮の途中、須磨の浦で光源氏の靈に逢ひ、その昔語を聞くことを作る。「出典」『源氏物語』の「須磨」。「明石」の巻を中心として、その全般に亘つて題材を採り入れてゐる。

○墨 染 櫻 (すみぞめざくら) [岑雄]

作者未詳。初見、大永四年(能本)。三番目。二場夢幻物。ワキ、上野峯雄。前シテ、里女(櫻の精)。狂言、深草の者。後シテ、墨染櫻の精。所、山城國深草の里。時、文徳天皇御宇三月。

仁明天皇の崩御を悲しんで出家した上野峯雄が、御陵に詣で、御寵愛の櫻を眺め、「深草の野邊の櫻し心あらば、この春ばかり墨染に咲け」と詠むと、櫻の精が現はれ、乞うて佛弟子となり、「この春ばかり」を「この春よりは」と改めることを願ひ、先帝を御墓ひ申上げることを作る。「出典」この歌は「古今集」哀傷歌の部に、藤原基經を悼む歌として收められて居り(第四句「今年ばかりは」)。「大鏡」今昔物語にも同様に取扱はれてゐる。

○隅 田 川 (すみだがは) [角田川・隅田河]

作者、世阿彌(能本)。元雅(二百)。初見、永享二年(談儀)。四番目。一場現實物。ワキ、隅田川渡守。ワキツレ、都の者(旅人)。シテ、梅若丸の母(狂女)。子方、梅若丸の亡靈。所、武藏國隅田川。時、三月十五日。

梅若丸が人商人にかどわかされたので、その母は狂氣になつて跡を追ひ、隅田川に着いた時、大念佛を催してゐる人より、梅若丸の一周忌に當ることを聞き、墓所に行つて念佛すると、梅若丸の亡靈が現はれ、母と言葉をかはすことを作る。「出典」『伊勢物語』第九段の趣向を背景として應用してゐる他は、特に典據と見做すほどのものはない。狂女物の一。

○住 吉 詣 (すみよしまうで)

解説

解説

解説

解説

解説

解説



解説

誓願寺 西王母 昭君

八一

作者並びに初見文献未詳。三・四番目。一場現實物。ワキ、住吉神主菊園某。狂言、同従者。ツレ、光源氏。子方、同隨身二人。子方、同童隨身。ツレ、同臣惟光。ツレ、同従臣三人。シテ、明石上。ツレ、同侍女二人。所、攝津國住吉。時、九月。

須磨配流中に立てた願果しのために、住吉に詣つた光源氏が、同じく住吉詣の明石上の船に出會ひ、酒宴を催し、歌を詠みかはして別れることを作る。「出典」「源氏物語」『落穂』の巻。

○誓願寺 (せいぐわんじ)

作者、世阿彌。初見、寛正五年(糺河原)。三番目。二場夢幻物。ワキ、一遍上人。ワキツレ、同従僧二人。前シテ、里女(和泉式部の靈)。狂言、小川表の者。後シテ、和泉式部(歌舞菩薩)。所、京誓願寺。時、鎌倉中期(三月)。

一遍上人が六十萬人決定往生の御札を弘めるために誓願寺に來ると、和泉式部の亡靈が現はれて、誓願寺の額を六字の名號に書きかへてくれと頼み、後に歌舞菩薩となつて現はれ、歌舞を演ずることを作る。「出典」「一遍上人諸略」。「洛陽誓願寺縁起」(續群書類從卷七八三)。

○西王母 (せいわうぼ)

作者、金春禪竹(能本)。初見、大永四年(能本)。脇能。二場現實物。狂言、周穆王の臣。ワキ、支那帝王。ワキツレ、臣下二人。前シテ、女(西王母)。前ツレ、同侍女。所、支那帝王宮殿。時、(三月)。

支那皇帝の仁政をたゞへて、仙女西王母が天降り、三千年に一度賞るといふ仙桃を君に捧げ、御代を祝ふ事を作る。「出典」「穆天子傳」「武帝内傳」「漢武故事」「列仙傳」「唐物語」。

○昭君 (せうくん) [王昭君]

作者、世阿彌(能本)。初見、永享二年(談儀)。五番目。二場夢幻物。ワキ、かうほの里人。前シテ、昭君の父白桃。ツレ(前後)、同母王母。狂言、所の者。後子方、王昭君の幽霊。後シテ、呼韓邪單于の靈。所、支那かうほの里。時、前漢(三月又は十月)。

解説

○善界 (ぜんがい) [是界・是害・世界・是我意]

作者、竹田法印宗盛。初見、大永四年(能本)。五番目。二場現實物。前シテ、善界坊(山伏姿)。前ツレ、太郎坊。狂言、比叡山飯室の能力。ワキ、比叡山の僧。ワキツレ、同従僧二人。後シテ、善界坊(天狗姿)。所、山城國愛宕山、同比叡山麓。時、無季。

支那の天狗の首領善界坊は、日本に渡り、佛法の妨げをしようとして、比叡山に赴いたが、途中出會つた比叡の僧の祈りによつて、不動明王初め諸神の出現に降伏して逃げ去ることを作る。「出典」「今昔物語」卷二十「震旦天狗智羅水壽波」此朝「語第二」同「天然天狗聞海水音」渡「此朝」語「阿多古山縁起」。

○關寺小町 (せきでらこまち)

作者、世阿彌。初見、應永二十六年(聲出)。三番目。一場現實物。子方、雜兒。ワキ、關寺住僧。ワキツレ、同従僧二・三人。シテ、小野小町。所、近江國關寺。時、平安朝初期七月七日。

落魄の餘生を知る人もなく送つてゐる小町が、七夕祭の日訪れた關寺住僧と歌物語をし、共に寺に伴はれて七夕を祭ることを作る。「出典」小町の老後落魄については「玉造小町子壯衰書」の説話から採り入れて、展開させたものと思はれる。

○關原與市 (せきはらよいち) [關原與一・關原]

作者未詳。初見、文安三年(申樂)。四番目。一場現實物。シテ、源牛若。ツレ、同従者。狂言、早打(與市の従者)。ワキ、關原與市。ワキツレ、同従兵四五人。トモ、同太刀持。所、美濃國山中。時、平家時代春(三月)。

源牛若が鞍馬山を出て關原に下る途中、關原與一に馬のはねをかけられたのを憤つて、これを斬り伏せ、その馬を奪つて關原へ下ることを作る。舞の本「鞍馬出」と同村である。

第三篇 鎌倉室町時代 (謡曲)

八一

解説

解説

解説

解説

解説

解説

◎殺生石 (せつしやうせき)

作者、日吉安清(二百)。(能本作者註文には不明としてある)。初見、大永四年(能本)。四・五番目。二場現實物。ワキ、玄翁。狂言、能力。前シテ、里女(殺生石魂)。後シテ、殺生石魂(野干婆)。所、下野國那須野。時、室町初期(九月)。玄翁和尚が那須野で殺生石の魂(里女)に出會ひ、その謂れを聞くと、昔玉藻前に化して安倍泰成に見破られ、その志を果さなかつた野干の執心との事に、これを供養して成佛させることを作る。「出典」原據と見るべきものは明かでないが玄翁のことは「本朝高僧傳」の「支抄傳」に出てゐる。「参考」下學集「大追物の條」、「臥雲日件錄」享徳二年二月廿五日の條。

◎攝待 (せつたい) (接待)

作者、宮増(二百)。(能本作者註文には不明と記す)。初見、文明十五年(親元)。四番目。一場現實物。狂言、佐藤館の從者。ツレ、源義經。ワキ、辨慶。ツレ、増尾兼房。ツレ、鷲尾十郎。ツレ、外同行山伏八人。子方、繼信の子鶴若。シテ、佐藤繼信の母。所、岩代國佐藤館。時、鎌倉初期(三月)。

義經の一行が山伏姿となつて奥へ落ちてゆく途中、故佐藤庄司の館で攝待を受け、佐藤兄弟の母と繼信の遺兒鶴若の情にひかれて、包み隠してゐた名を名のり、繼信の討死及び忠信の敵討のことなどを物語する事を作る。「出典」「義經記」卷八「次信兄弟御弔の事」、「平家物語」卷十一「嗣信最後の事」、「源平盛衰記」卷四十二「源平侍共の軍附繼信盛政孝養の事」。

◎蟬丸 (せみまる) (蟬麻呂・道襲)

作者、世阿彌。(能本作者註文には「別作と云説あり」と割註してある)。初見、永享二年(談儀)。四番目。一場現實物。ツレ、蟬丸宮。ワキ、勅使(清貫)。ワキツレ、與泉二人。狂言、博雅三位。シテ、遊樂宮。所、近江國逢坂山。時、醍醐天皇御宇(八月)。

延喜帝は盲目の皇子蟬丸を前世の業因から救はうと、逢坂山に捨てて剃髪させ給うたが、同じく前世の業因で、髪逆しまに生えた狂氣の姉宮が、琵琶の音に導かれて蟬丸と邂逅し、互に業を悲しんで再びお別れになることを作る。内容が不敬に亘るので、近時、國文學者の間に津波論が、謡曲家の間に廢曲論が唱へられてゐる。「出典」「今昔物語」卷二十四「源博雅朝臣行會百許」語第廿三、「江談抄」、「平家物語」卷十「海道くだり」、「源平盛衰記」。

解説

解説

解説

◎禪師曾我 (ぜんじそが) (久上・久我美)

作者未詳。初見、大永四年(能本)。四番目。二場現實物。前ツレ、曾我兄弟の母。前ツレ、鬼王。前ツレ、團三郎。後シテ、久上禪師。狂言、久上寺能力。後ワキ、伊東九郎祐宗。ワキツレ、疋田小三郎。同、狩野源六。同、祐宗從兵二三人。所、相模國曾我館。越後國久上寺。時、建久四年(七月)。

鬼王、團三郎が曾我兄弟の形見を持つて曾我に歸り、兄弟の母に渡したので、母は末子の久上禪師の身を案じ、鬼王等に文を届けさせるが、禪師は養父伊東九郎祐宗等の討手と聞ひ、自害しようとしたところを生捕られて、鎌倉に送られることを作る。「出典」「曾我物語」卷十「鬼王團三郎曾我へ歸りし事」・同「禪師法師が自害の事」。

◎千手 (せんじゆ) (千壽・千手重衡・重衡)

作者、金春禪竹。初見、大永四年(能本)。三番目。一場現實物。ツレ、平重衡。ワキ、狩野介宗茂。シテ、千手前。所、鎌倉狩野介館。時、元暦元年四月(三月)。

一の谷の戦に囚人となつて鎌倉に送られた平重衡は、一夜頼朝より遣はされた千手の前と宴に興じたが、再び都へ送られる身となり、互に別れを惜しむ事を作る。「出典」「吾妻鏡」元暦元年四月二十日の條、「平家物語」卷十「千手の事」。

◎卒都婆小町 (そとばこまち) (小町・小町卒都婆・小町物狂)

作者、観阿彌(改作)。初見、永享二年(談儀)。三番目。一場現實物。ワキ、高野山僧。ワキツレ、同從僧。シテ、小野小町。所、京郊外。時、平安初期(九月)。

老衰して乞食となり、行き或れて卒都婆に凭つて息うてゐた小町が、見替めて教化しようとした僧を却つて言ひつめるが、やがて深草少將の靈に憑かれて物狂ひとなり、間もなく覺めて悟道に入ることを作る。「出典」「玉造小町子壯衰書」。

◎泰山府君 (たいさんぶくん) (太山府君・たいさんもく)

作者、世阿彌。初見、應永三十年(能作)。四番目。二場夢幻物。ワキ、櫻町中納言。前シテ、天女。狂言、花守。後シ

解説

解説

解説

大佛供養 大瓶狸々 第六天

テ、泰山府君。後ツレ、天女。所、京櫻町。時、平家時代。春(三月)櫻町中納言が櫻の名残を惜しんで泰山府君の祭をしてみると、天女が天降り、一枝手折って行つたが、やがて泰山府君が現はれて天女の偷盗を責め、中納言の心を嘉して櫻の命を三七日に延ばす事を作る。「出典」『源平盛衰記』卷二「清盛息女事」。

◎大佛供養 (だいぶつくやう) [奈良詣]

作者未詳。初見、大永四年(能本)。四番目。二場現實物。ツレ、景清母。前シテ、悪七兵衛景清。狂言、東大寺能力。子方、源頼朝。ワキ、同臣。立衆、同三人。後シテ、悪七兵衛景清。所、奈良景清母の住家・奈良大佛供養の場。時、建久六年(九月)。

平家滅亡後、常に頼朝を狙つてゐた景清が、奈良大佛供養を頼朝が行ふと聞き、奈良に密行して母に對面して後、社人を装ひ忍び入つたが、見顯されて立ち退く事を作る。「出典」『長門本平家物語』卷十九に中務丞宗助が頼朝を狙つた事として掲げられてゐるのを採り入れたものかと思はれる。

◎大瓶狸々 (たいへいしやうじやう) [秦平狸々・秦坪狸々・大平狸々]

作者並びに初見文献未詳。五番目。二場現實物。ワキ、かうふう。前シテ、童子(狸々)。狂言、水神。後ツレ、狸々四人。後シテ、狸々。所、支那かれ金山の麓。海陽江邊。時、秋(九月)。

◎第六天 (だいろくてん) [大六天]

作者並びに初見文献未詳。五番目。二場夢幻物。ワキ、解説上人。ワキツレ、同從僧二人。前シテ、里女(神靈)。前ツレ、里女。狂言、末社神。後シテ、第六天魔王。後ツレ、素盞鳴尊。所、伊勢大神宮。時、鎌倉初期(三月)。

解説上人が伊勢に参り、靈夢によつて佛法障碍の暗示を受けると、やがて第六天魔王が佛法を破却しようと現はれるが、素盞鳴尊の質棒によつて退散する事を作る。「出典」『太平記』卷十二「千種殿並文觀僧正寄修事附解説上人事」。

解説

◎大會 (だいを) [大繪]

作者、金春頼竹(二百)。(但し「能本作者註文」には不明と記す)。初見、永享二年(談儀)。五番目。二場現實物。ワキ、比叡山僧正。前シテ、山伏(大天狗)。狂言、木葉天狗三・四人。後シテ、愛宕山大天狗。後ツレ、帝釋天王。所、近江國比叡山。時、(無季)。

比叡山の僧正に命を助けられた天狗が、報恩のために僧正の望みに任せて、釋尊が靈鷲山に於ける説法の有稱を示して見せる中、帝釋天が天降り、天狗の魔術を破つて追ひ佛ふことを作る。「出典」『十訓抄』第一。

◎道成寺 (だうじやうじ)

作者、親阿彌(二百)。(但し「能本作者註文」には不明と記す)。初見、天文廿三年(言繼)。四番目。二場現實物。ワキ、道成寺住僧。ワキツレ、同從者二人。狂言、能力二人。前シテ、白拍子。後シテ、蛇體。所、紀伊國道成寺。時、(三月)。男を隠した道成寺の鐘に残る女の執心が、同寺鐘供養の時白拍子となつて現はれ、鐘を下してその中へ這入つたが、僧の祈りによつて蛇體を現はし、日高川に飛び入る事を作る。「出典」『今昔物語』卷十四「紀伊國道成寺僧寫法花救地語」。「元享釋書」『道成寺繪詞」。

◎唐船 (たうせん) [唐舟・祖慶官人]

作者、外山吉廣(二百)。(但し「能本作者註文」には不明と記す)。初見、大永四年(能本)。四番目。一物現實物。ワキ、箱崎某。狂言、同從者(太刀持)。狂言、唐船の舟夫。子方、唐子そんし。同、同そいう。シテ、祖慶官人。子方、日本子二人。所、筑前國箱崎。時、(無季)。

箱崎某の召使祖慶官人が、故國唐土に残して来た二子の迎への船で許されて歸らうとした時、日本で生まれた二子は同行を許されず、唐子日本子の間に板ばさみとなり、投水しようとして箱崎に許され、日本子をも連れて喜んで故國に歸る事を作る。

解説

解説

解説

◎道明寺 (だうみやうじ)

作者、世阿彌。初見、大永四年(能本)。臨能。二場夢幻物。ワキ、飲性。ワキツレ、同從者二人。前シテ、老翁(白太夫神靈)。前ツレ、宮人。狂言、末社神。後ツレ、天女。後シテ、白太夫神。所、河内國道明寺。時、九月。相模田代寺の尊性が、靈夢を蒙り河内の道明寺に行くと、白太夫神の靈現はれ、寺の縁起を語り、神夢に示された木槌樹の實を念珠の料に與へる事を作る。「出典」「江談抄」第三「菅家本土師氏也、子孫雖多官位不至事」。

◎當麻 (たいま) [當摩]

作者、世阿彌。初見、文明十五年(親元)。四・五番目、二場夢幻物。ワキ、念佛僧。ワキツレ、同從者二人。前シテ、化尼。前ツレ、化女。狂言、所の者。後シテ、中將姫。所、大和國當麻寺。時、二月十五日。念佛僧が當麻寺に参り、二尼に出會ひ、中將姫の曼荼羅の事など聞き、やがて夢に中將姫の靈現はれて、念佛の有難さを語る事を作る。「出典」「元亨釋書」卷二十八、「古今著聞集」「當麻寺曼荼羅縁起」。

◎高砂 (たかさご) [相生・相老・相生松]

作者、世阿彌。初見、應永三十年(能本)。臨能。二場夢幻物。ワキ、阿蘇神主友成。ワキツレ、同從者二人。前シテ、財(住吉松の精)。前ツレ、姥(高砂松の精)。狂言、高砂の浦人。後シテ、住吉明神。所、播磨國高砂、攝津國住吉。時、春(正月)。阿蘇の神主友成が高砂の浦で高砂住吉の松の精に會ひ、相生の松の謂れを聞き、船で住吉に行くこと住吉明神が現はれ、御代を壽ぐ事を作る。「出典」「古今集序」「南遷錄」。

◎竹雪 (たけのゆき)

作者、世阿彌(能本)。初見、大永四年(能本)。四・五番目。二場現實物。前ワキ、直井左衛門。狂言、直井後妻。子方、月若。前シテ、月若の實母。狂言、直井の從者。後シテ、月若の實母。後ツレ、月若の姉。後ワキ、直井左衛門。所、越

解説

解説

解説

解説

後國直井邸及び母の宅・直井邸。時、冬(十二月)。

實母と姉とに別れて繼母のもとにある月若が、繼母のために着物を脱がされて、竹の雪を拂はせられ、雪中に凍死したので、實母等が悲しんで様々に介抱する中、竹林の七賢が月若を蘇生させる事を作る。

◎忠信 (ただのぶ) [空腹・吉野忠信・矢倉忠信]

作者、世阿彌。初見、大永四年(能本)。四番目。二場現實物。ツレ、源義經。ツレ、太刀持。ワキ、伊勢三郎義盛。シテ、佐藤忠信。ツレ、討手二人。ツレ、吉野僧兵三人又は五人。所、大和國吉野山。時、文治元年十一月。吉野僧兵の夜討を豫想した義經が、防戦のために忠信を残して山を落ちのびたので、忠信は奮戦の後空腹を切つて谷に飛び下り、都をさして逃れ去る事を作る。「出典」「義經記」卷五に同様の記事があるが、本曲との製作の前後は明かでない。

◎忠度 (ただのり) [忠則・忠教・短冊忠度・短尺忠則・薩摩守]

作者、世阿彌。初見、應永三十年(能本)。二番目。二場夢幻物。ワキ、僧(俊成御内の者)。ワキツレ、同從者二人。前シテ、老樵夫(忠度の靈)。狂言、所の者。後シテ、平忠度。所、攝津國須磨。時、鎌倉初期春(三月)。

僧て俊成の臣であつた旅僧が須磨に行くと、忠度の靈が現はれ、自分の歌を讀人不知とされた不満や、和歌の事、一の谷の最期の事などを物語つて弟を乞ふ事を作る。「出典」「平家物語」卷七「忠度の都落の事」・卷九「忠度の最後の事」。「源平盛衰記」卷三十二「菅行人々歌附忠度自流歸備俊成事」卷三十七「忠度通盛等最後事」。「参考」柳田有穂「平忠度の史實」(講の友二ノ九)

◎龍田 (たつた) [立田・龍田姫・立田姫]

作者、金春禪竹。初見、大永四年(能本)。三・四番目。二場夢幻物。ワキ、旅僧。ワキツレ、同從者二人。前シテ、巫女(龍田姫神靈)。狂言、所の者。後シテ、龍田姫の神。所、大和國龍田。時、十一月。

龍田明神參詣の旅僧が、龍田川を渡らうとすると、明神が巫子と化して現はれ、「古今集」や家隆の歌を引いて、これを止め、後その姿を現はして、縁起を語る事を作る。「出典」「古今集」卷五の龍田川の歌(讀人不知)。「壬二集」の龍田川の歌。

第三篇 鎌倉室町時代 (謡曲)

解説

解説

谷行 玉葛 玉井 田村

解説

◎谷 行 (たにかう)

作者、金春禪竹(二百)。(但し「能本作者註文」には不明と記す)。初見、大永四年(能本)。四五番目。二場現實物。前ワキ、帥阿闍梨。前子方、松若。前シテ、松若の母。後子方、松若。後ワキ、帥阿闍梨。重ワキツレ、小先達。ワキツレ、同行山伏二三人。後シテ、夜樂鬼神。所、京松若宅・大和國葛城山。時、(十月)。母の現世新説の爲、師に従つて畢入した松若は、途中病氣となつたので、山伏の大法に従つて谷行(生埋め)に處せられたが、師の悲教を察した同行の人々の祈りによつて、役行者が孝心に感じてこれを救ふことを作る。

◎玉 葛 (たまかづら) [玉鑿]

作者、金春禪竹。初見、禪風習道目錄。大永四年(能本)。四番目。二場夢幻物。ワキ、旅僧。前シテ、女舟人(玉葛の靈)。狂言、門前の者。後シテ、玉葛内侍。所、大和國初瀬。時、秋(九月)。初瀬詣に出掛けた旅僧が、玉葛内侍の靈に逢ひ、筑紫よりこゝに逃れ来て、母夕顔の侍女右近に逢つた物語などを聞き、回向して成佛させる事を作る。[出典]「源氏物語」玉葛の巻。

◎玉 井 (たまのゐ)

作者、親世小次郎。初見、大永四年(能本)。脇能。二場現實物。ワキ、彦火々出見尊。前シテ、豊玉姫。前ツレ、玉依姫。狂言、(オモ)文蛤。同(立衆)、蛤、海草四・五人。後子方、天女(豊玉姫)。同、天女(玉依姫)。後シテ、海神。所、海都。時、神代(無季)。

彦火々出見尊が兄火闍降命の釣針を魚に取られ、之を求めて海都に行き、玉井の傍で豊玉姫等に逢ひ、三年の後、釣針の他に姫等の贈物を受けて陸地に歸る事を作る。[出典]「古事記」「日本書紀」。

◎田 村 (たむら)

作者、世阿彌。初見、長祿四年(五番三曲)。二番目。二場夢幻物。ワキ、東國僧。ワキツレ、同從僧二人。前シテ、童

解説

解説

解説

解説

子(田村丸の靈)。狂言、清水寺門前の者。後シテ、坂上田村丸。所、京清水寺。時、三月中旬。旅僧が清水寺に參詣すると、田村堂に祭られた坂上田村丸の靈が現はれ、清水寺の縁起及び觀音の功德を語り、鈴鹿山の鬼神を亡ぼした戦功を語ることを作る。[出典]「今昔物語」卷十二「田村將軍始建清水寺語第卅二」、参考源平盛衰記、清水寺縁起、「田村の草子」。

◎檀 風 (だんぷう)

作者、世阿彌。初見、寛正六年(親元)。四・五番目。二場現實物。前ワキツレ、本間三郎。狂言、同太刀持。子方、資朝の子梅若。ワキ、帥阿闍梨。前ツレ、壬生資朝。ワキツレ、奥泉二人。狂言、早打(本間の家來)。ワキツレ、船頭。後シテ、熊野權現。所、佐渡本間宅及び刑場・同船着場。時、元弘二年五月下旬(六月)。

佐渡島の流人壬生資朝の子梅若は、島に渡つて父と對面したが、鎌倉よりの命を蒙つて父を誅した本間三郎を目前の敵として、これを討ち、同行の帥阿闍梨の法力によつて現はれた三熊野權現の助けを借りて逃れ歸る事を作る。[出典]「太平記」卷二「長崎新左衛門尉意見事、附阿新殿事」。

◎竹 生 島 (ちくぶしま)

作者、金春禪竹(二百)。(但し「能本作者註文」には不明と記す)。初見、大永四年(能本)。脇能。二場夢幻物。ワキ、醍醐帝臣下。ワキツレ、同從者二人。前シテ、漁翁(龍神)。前ツレ、女(辨才天)。狂言、社人。後ツレ、辨才天。後シテ、龍神。所、近江國竹生島。時、醍醐帝御宇三月中旬。

朝臣が竹生島に參詣して、龍神と辨才天に逢ひ、金銀珠玉の贈物を受け、衆生濟度國土守護の誓ひを聞く事を作る。

◎張 良 (ちやうりやう) [長郎・現在張良]

作者、親世小次郎。初見、大永四年(能本)。五番目。二場現實物。前ワキ、張良。前シテ、黄石公。狂言、張良從者。後ワキ、張良。後シテ、黄石公。後ツレ、龍神。所、支那下邳。時、漢高祖の代(九月)。

張良が靈夢に従つて兵法の奥儀を學ぶため下邳へ行き、黄石公に試され、急流に落ちた香を火蛇と争つて取り戻して、

第三篇 鎌倉室町時代 (謡曲)

解説

解説

兵法を授かり、大蛇となつた観音が、張良の守護神となる事を作る。「出典」『前漢書』張良傳。「史記」留侯世家。

◎土蜘蛛 (つちぐも)

作者並びに初見文献未詳。五番目。二場現實物。前ツレ、源頼光。トモ、同従者。前ツレ、胡蝶。前シテ、僧形(土蜘蛛)。前ツキ、獨武者、ワキツレ(立案)、同従兵數人。後シテ、土蜘蛛。所京源頼光館・洛外土蜘蛛塚。時、平安盛期(七月)、病に悩む頼光の許へ土蜘蛛のツが現はれ、危害を加へようとしたので、頼光は之を藤丸の名劍で切りつけ、馳せ参じた郎等が、怪物の跡を追うて退治する事を作る。「出典」『平家物語』劍の巻。

◎土車 (つちぐるま)

作者、世阿彌。初見、永享二年(談儀)。四番目。一場現實物。ワキ、僧(深草少將)。狂言、善光寺堂守。子方、少將の一子。シテ、傳小次郎。所、信濃國善光寺。時、無季。深草少將は妻を失ひ、悲嘆のあまり一子を捨てて遁世したので、傳小次郎は若君を土車に乗せて引きながら、亂れ心のまにまにその行方を尋ね歩き、善光寺で遂に少將に再會する事を作る。

◎綱 (つな) 「羅生門」(らしやうもん) 参照。

◎經政 (つねまさ) 「經正・恒正」

作者、世阿彌。初見、長享二年(親長)。二番目。一場夢幻物。ワキ、平經政の靈。所、山城仁和寺。時、平家時代、秋(九月)。

西海の合戦で討死した平經政のために、守覺法親王が故人と山縁深い琵琶を手向けて弔はれると、經政の靈が現はれてこれを彈き、修羅の苦患を示す事を作る。「出典」『平家物語』卷七「經政の都落の事」。「参考」柳田有穂「謠曲と史實、平經政」(謠の友二ノ六・七)。

◎妻 (つまど) 「雷電」(らいでん) 参照。

◎鶴 (つるかめ) 「月宮殿」

作者並びに初見文献未詳。臨能。一場現實物。狂言、官人。シテ、皇帝(玄宗)。ワキ、大臣。ワキツレ、從臣二人。子方、鶴。子方、龜。所、支那皇居。時、唐玄宗の代(正月)。

支那の皇居に於て四季の節會の事始が催され、毎年の嘉例によつて鶴龜を舞はしめ、その後月宮殿で舞樂を奏する事を作る。

◎定家 (ていか) 「定家葛」

作者、金春禪竹(能本)、世阿彌(二百)。初見、永正二年(栗田口)。三番目。二場夢幻物。ワキ、北國僧。ワキツレ、里女(式子内親王の靈)。狂言、所の者。後シテ、式子内親王。所、京千本。時、十月中旬。旅僧が時雨の夕、定家の時雨亭に休んでみると、式子内親王の靈が現はれ、生前契りを結んだ定家の執心が、葛となつて墓に這ひ纏はる事を語り、僧の弔を受けて成佛する事を作る。「参考」柳田有穂「定家と史實」(謠の友二ノ十二)。

◎調伏會我 (てうぶくそが) 「祐經」

作者、宮村(能本)。初見、寛正五年(亂河原「箱王會我」)。五番目。二場現實物。前ツレ、源頼朝。前シテ、工藤祐經。前ツレ、頼朝の従者五人又は七人。前子方、箱王。前ツキ、箱根別當。狂言、箱根能力。後ワキ、箱根別當。ワキツレ、從僧八人乃至十人。後シテ、不動明王。所、相模國箱根權現。時、鎌倉初期(無季)。

箱根の別當は、敵工藤を見て復讐をあせる箱王を制し、祐經調伏の祈禱をすると、不動明王が現はれて工藤の形代を斬り、本望成就の驗證を示す事を作る。「出典」『曾我物語』卷四「箱王祐經に遣ひし事」。調伏については同書卷一「伊東を調伏する事」を變改したものかと思はれる。

◎天鼓 (てんこ)

作者、世阿彌。初見、寛正六年(親元)。四番目。二場夢幻物。ワキ、後漢帝勅使。前シテ、天鼓の父王伯。狂言、勅使

解説

解説

解説

解説

解説

解説

解説

藤榮 東岸居士 東方朔

の従者。後シテ、天鼓の亡霊。所、支那阿房宮・同呂水の河畔。時、後漢の世(七月)。  
天鼓といふものが、その所持する天より降り下つた鼓を帝が御所望したのを拒み、呂水に沈められたが、召し上げられ  
た鼓は少しも鳴らず、天鼓の父が召されて之を打ち、始めて音を出したので、帝は管絃講を以て天鼓を弔はれると、天鼓  
の霊喜んで現はれ、榮を奏する事を作る。「出典」『法華經化城喻品』「唐華嚴經」。

◎藤 榮 (とうえい) [藤永]

作者未詳。初見、永享二年(談儀)。四番目。一場現實物。ワキ、最明寺時頼。子方、月若。ワキツレ、月若の家人。シ  
テ、蘆屋藤榮。狂言、同太刀持。ツレ、鳴尾何某。ツレ(立衆)、鳴尾の従者數人。狂言、同能力。所、攝津國蘆屋(鹽屋、  
浦邊)。時、鎌倉中期(三月)。

最明寺時頼が行脚の途次、蘆屋の里で叔父藤榮に所領を奪はれた月若に逢ひ、藤榮を責めて月若に所領を返させ、一族  
の繁榮を計らせる事を作る。「出典」『増鏡』卷十一「草まくら」。「太平記」卷卅五「北野通夜物語事附青砥左衛門事」。

◎東岸居士 (とうがんこじ)

作者、世阿彌。初見、應永卅年(能本)。四番目。一場現實物。ワキ、旅人。狂言、門前の者。シテ、東岸居士。所、京  
清水寺。時、鎌倉時代春(三月)。

清水寺參詣の旅人の求めに應じ、東岸居士が狂言時話にこと寄せて、高僧の法話を語り、又羯鼓を打つて歌謡を演ずる  
事を作る。「出典」『東岸居士傳』。タセの文に「一遍上人法話」の「或人法門を尋ね申けるに書きて示したまふ御法語」  
を探り入れてゐる。

◎東方朔 (とうぼうさく)

作者、金春禪風。初見、大永四年(能本)。應能。二場現實物。狂言、官人。ワキ、皇帝(兼武帝)。ワキツレ、侍臣二人。  
前シテ、老翁(東方朔)。前ツレ、男。狂言、仙人(オモ)。同、仙人(アド)數人。同、桃仁。後シテ、東方朔。後ツレ、西  
王母。所、支那承華殿。時、漢武帝の代七月七日。

星祭の日、東方朔、西王母の二仙人が参内して、長壽を保つといふ三千年に一度實る桃實を帝に捧げて御代を祝ふ事作  
る。「西王母」と同村のもの。「出典」『唐物語』第十六話。

◎東 北 (とうぼく) [軒端梅・軒端・東北院]

作者、世阿彌。初見、禪風習道目錄、大永四年(能本)。三番目。二場夢幻物。ワキ、東國僧。ワキツレ、同從僧二人。  
狂言、門前の者。前シテ、里女(和泉式部靈)。後シテ、和泉式部。所、京東北院。時、正月。

旅僧が東北院の軒端の梅を眺め、法華經を讀誦してゐると、夢に梅の主和泉式部の靈が現はれ、和歌の功德によつて火  
宅を免れた事など語り、舞を舞ふ事を作る。

◎木 賊 (とくさ) [木賊刈]

作者、世阿彌。初見、大永四年(能本)。四番目。一場現實物。子方、松若。ワキ、都の僧。ワキツレ、同從僧二人。シ  
テ、老翁。ツレ、里人三人。所、信濃國國原。時、秋(八月)。

人に誘はれて家出した松若が、信濃で木賊刈の老翁に逢ひ、その物語によつて訪ねる父と知り、再會の喜びの中に二人  
は我家を寺に改めて佛果を結ぶ縁とする事を作る。「出典」『新古今集』卷十一「坂上是則の「その原や」の歌を叙景的に採  
入れてゐる。

◎融 (とほる)

作者、世阿彌(能本)、觀阿彌(二百)。初見、應永廿六年(聲出)。五番目。二場夢幻物。ワキ、東國僧。前シテ、鹽波の  
翁(融の靈)。狂言、所の者。後シテ、源融。所、京六條河原院。時、秋(八月)。

旅僧が六條河原院に休んでゐると、鹽波の老翁が現はれ、融大臣が都を陸奥千賀の鹽竈に構して造つた故事や、附近の  
名所を教へて去ると、夢中に融が現はれて、月前の舞を奏する事を作る。「出典」『伊勢物語』八十一段、「古今集」卷十六  
紀貫之の「君まさて」の歌、及び「顯註密勘」における註。「参考」柳田有徳「融大臣の史實」(謠の友五ノ六)。

解説

解説

解説

解説

解説

解説

解説

◎知章 (ともあきら)

作者、世阿彌。初見、釋尊習道日録、大永四年(能本)。二番目。二場夢幻物。ワキ、西國僧。前シテ、里人(知章の靈)。狂言、所の者。後シテ、不知章。所、攝津國須磨。時、二月七日。西國僧が須磨で不知章の卒都婆に回向してゐると、知章の靈が現はれて、最期の事、父知盛の事など物語り、弔を喜ぶ事を作る。〔出典〕「平家物語」卷九「濱軍の事」、「源平盛衰記」卷三十八「知盛近戰場乗船事」。

◎朝長 (ともなが)

作者、世阿彌。初見、康正二年(歌舞)。二番目。二場夢幻物。ワキ、清涼寺僧(朝長の傳)。ワキツレ、同從者二人。狂言、所の者(長者内の者)。前シテ、青葛宿長者。前ツレ、同侍女。同(とも)、同從者。後シテ、源朝長亡靈。所、美濃國青葛。時、平家時代(正月)。

元朝長の傳であつた清涼寺の僧が、舊主追善の爲墓所に參詣して、朝長の自害した宿の長者に逢ひ、その宿に伴はれて法事をする、朝長の靈現はれて敗戦の縁を物語る事を作る。〔出典〕「平治物語」卷二「義朝青葛に落ち着く事」。

◎巴 (ともゑ)

作者、觀世小次郎(二百)。(但し「能本作者註文」には不明と記す)。初見、大永四年(能本)。二番目。二場夢幻物、ワキ、木曾の僧。前シテ、里女(巴の靈)。狂言、所の者。後シテ、巴。所、近江國栗津原。時、(正月)。栗津原で休んでゐる木曾の僧の許へ、巴の靈が甲冑姿で現はれ、義仲最期の縁を物語り、討死を共に出来なかつた怨みを訴へて弔を乞ふ事を作る。〔出典〕「平家物語」卷九「木曾の最後の事」、「源平盛衰記」卷三十五「巴關東下向事」。

◎鳥追舟 (とりおひぶね) (鳥追)

作者、金剛彌五郎(二百)。(但し「能本作者註文」には不明と記す)。初見、大永四年(能本)。四番目。二場現實物。前ツキツレ、左近尉。前シテ、日暮の妻。前子方、花若。ワキ、日暮何某。狂言、同從者。後ワキツレ、左近尉。後シテ、日暮の妻。後子方、花若。所、薩摩國日暮の里。時、秋(九月)。

日暮何某が自訴の爲に上京して十餘年、残された妻と子は傳左近尉に虐げられて鳥追をしてゐる所へ、自訴が叶つて歸國した日暮が來かゝり、傳を責めて斬らうとしたが、妻の乞てその罪を許す事を作る。

◎仲光 (なかみつ) (滿仲・滿中・美女御前)

作者、世阿彌(能本)。初見、大永四年(能本)。四番目。二場現實物。シテ、藤原仲光。前子方、美女丸。前子方、幸壽丸。ツレ、多田滿仲。狂言、同從者。ワキ、惠心僧都。後子方、美女丸。所、攝津國多田館。時、平安盛期(無季)。多田滿仲は學問を勵まぬ一子美女丸を憤つて、臣仲光に殺させようとしたが、仲光はわが子を身代りに討つてこれを助け、後その苦衷顯れて美女丸が父に許された時、心中の悲嘆をおし包んで主家の繁榮を壽ぐ事を作る。

◎難波 (なには) (難波梅)

作者、世阿彌。初見、永正十五年(二水)。隱能。二場夢幻物。ワキ、當今の臣下。ワキツレ、同從者二人。前シテ、老翁(王仁の靈)。前ツレ、男(梅の精)。狂言、梅の精。後シテ、王仁。後ツレ、木華開耶姫。所、攝津國難波。時、正月。朝臣が難波の里で王仁の靈と梅の精に逢ひ、難波の梅の故事、仁徳帝の昔話など聞き、夢中に王仁と木華開耶姫が現はれて御代を祝ふ事を作る。〔出典〕「古今集序」及びその古註、「古事記」下卷「仁徳記」。

◎奈良 (なら) (大佛供養) (だいぶつくやう) (參照)

◎錦木 (にしきぎ) (錦塚)

作者、世阿彌。初見、永享二年(談儀)。四番目。二場夢幻物。ワキ、旅僧。ワキツレ、同從者二人。前シテ、男。前ツレ、女。狂言、所の者。後ツレ、女の靈。後シテ、男の靈。所、陸奥狭布の里。時、(九月)。旅僧が陸奥狭布の里で、女の門に立てて求婚の印とする錦木と、「胸あひ難き戀」に喩へる細布とを商ふ男女に逢ひ、その謂れを聞き、戀に身を亡ぼした男の錦塚に案内されて回向すると、夢に前の男女の靈が現はれて懺悔物語をする事を作る。〔出典〕「袖中抄」。「參考」西村紫明「錦木の傳説」(謡曲界三ノ四)。

解説

解説

解説

解説

解説

解説



解説

◎錦戸 (にしきど) 作者、宮督(能本)。初見、大永四年(能本)。四番目。二場現實物。前ツキ、錦戸太郎。シテ(前後)、泉三郎。前ツレ、泉三郎妻。後ツキ、錦戸太郎。後ツレ、藤原泰衡。後ツレ(立衆)、同従兵三四人。所、陸中國泉の館。時、鎌倉初期(四月)。秀衡の子泉三郎は父の遺志を守り、兄錦戸太郎が齎した義經討伐の相談を退けたので、兄よりの討手に遭ひ、妻は自害し、三郎は捕へられる事を作る。「出典」「吾妻鏡」卷九 文治五年六月廿六日の條、「義經記」卷八「秀衡が子共判官殿に謀叛の事」。

◎鶴 (ぬえ) 「鶴・鶴・夜鳥」

作者、世阿彌(能本)、觀阿彌(二百)。初見、寛正六年(親元)。四・五番目。二場夢幻物。ツキ、旅僧。狂言、所の者。前シテ、舟人(鶴の蟹)。後シテ、鶴。所、攝津國蘆屋。時、(四月)。旅僧が蘆屋の里で鶴の亡魂に逢ひ、頼政に射殺された昔話を聞き、讀經して成佛させることを作る。「出典」「平家物語」卷四「鶴」。

◎寢覺 (ねざめ) 「三歸・三返・三返翁・寢覺の床」

作者並びに初見文献未詳。聽能。二場夢幻物。ツキ、醍醐天皇勅使。ワキツレ。同従者二人。前シテ、木橋の老翁(三歸の翁)。前ツレ、同里人。狂言、山の神。後ツレ、天女二人。後シテ、三歸の翁。後ツレ、龍神二人。所、信濃國寢覺の里。時、醍醐天皇御宇三月。壽命めたい薬を與へるといふ三歸翁の許へ下つた勅使が、信濃國寢覺床に着くと、翁が天女と共に現はれて、その薬を捧げる事を作る。

◎野宮 (ののみや) 「野の宮・野々宮」

作者、世阿彌。初見、寛正六年(親元)。三番目。二場夢幻物。ツキ、旅僧。前シテ、里女(六條御息所の靈)。狂言、所

解説

解説

解説

の者。後シテ、六條御息所。所、山城國嵯峨野。時、九月七日。

旅僧が嵯峨野野の宮の舊跡を眺めてみると、六條御息所の靈現はれて昔話をし、賀茂の祭に葵上と車争ひをした妄執の晴れる事を頼んで、車に乗つて立ち去る事を作る。「出典」「源氏物語」桐の卷。

◎野守 (のもり) 「野守鏡」

作者、世阿彌(能本)、金春禪風(二百)。初見、永正二年(粟田口)。五番目。二場夢幻物。ツキ、羽黒山伏。前シテ、野守の老翁(鬼神)。狂言、野守。後シテ、鬼神。所、大和國春日の里。時、春(正月)。羽黒山の山伏が春日の里で鬼神に逢ひ、その所持する野守の鏡の謂れや故事を聞くことを作る。「出典」「奥儀抄」、「無名抄」、「袖中抄」。「参考」岡不崩「野守鏡について」(能樂十一ノ十一)。

解説

◎放生僧 (はうかぞう) 「放家僧・放下」

作者、近江能(能本)、金春禪竹(二百)。初見、寛正五年(乳河原)。四番目。二場現實物。前ツレ、牧野小次郎。前シテ、小次郎の兄(禪僧)。ワキ、利根信俊。狂言、同従者。後シテ、小次郎の兄(放下僧)。後ツレ、牧野小次郎(放下)。所、下野國小次郎兄會下、武藏國瀬戸三島。時、(九月)。

解説

下野國牧野小次郎兄弟は、放下僧、放下に扮して親の仇を尋ねる中、武藏國瀬戸三島で仇に出會ひ、歌舞を演じて隙を窺ひ、木望を達する事を作る。「参考」吉田東伍「放下僧に就て」(能樂四ノ七)。

◎放生川 (はうじゃうがは) 「八幡放生會・放生會・八幡」

作者、世阿彌。初見、寶徳四年(春日)。應永卅年(能作「八幡」)。聽能。二場夢幻物。ツキ、鹿島神職筑波何某。ワキツレ、同従者二人。前シテ、老翁(武内神靈)。前ツレ、男。狂言、所の者。後シテ、武内の神。所、山城國男山八幡。時、八月十五日。

解説

鹿島の神職が石清水八幡の放生會に参り合せると、武内の神が現はれ、異國退治の殺生の供養のために魚を放つ謂れを語り、御代を齎ぐ事を作る。「出典」「續日本紀」及び八幡の諸縁起。

白樂天 羽衣 半菰 橋辨慶

八三〇

解説

◎白 樂 天 (はくらくてん)  
作者、世阿彌。初見、寛正五年(乱河原)。臨能。二場夢幻物。ワキ、白樂天。ワキツレ、同従者二人。前シテ、漁翁。前ツレ、漁夫。狂言、住吉末社神。後シテ、住吉明神。所、肥前國松浦湯。時、平安初期(無季)。白樂天が日本の智慧を計る爲に日本に渡り、松浦湯で漁翁に逢ひ、その才に驚いたが、後に住吉明神現はれ、その神風によつて追ひ返される事を作る。

解説

◎羽 衣 (はごろも)  
作者、世阿彌。初見、大永四年(能本)。三番目。一場現實物。ワキ、漁夫白龍。ワキツレ、漁夫二人。シテ、天女。所、駿河國三保松原。時、春(三月)。天女が漁夫に持ち歸られようとした羽衣を懇願して取り戻し、そのお禮に舞樂を奏して天上する事を作る。「出典」「近江國風土記」「帝王編年記」元正天皇七年の條所引、「丹後風土記」「玄々集」「萬葉鈔」所引、「後拾遺集」能因法師の歌、「童蒙抄」「神社考」。

解説

◎半 菰 (はじとみ) 「葉菰・半菰夕顔・夕顔上」  
作者、内藤藤左衛門。初見、大永四年(能本)。三番目。二場夢幻物。ワキ、雲林院僧。前シテ、里女(夕顔の靈)。狂言、北山の者。後シテ、夕顔。所、京雲林院・同五條。時、(九月)。立花供養をしてゐる雲林院の僧の許へ夕顔の花を捧げて立ち去つた女を怪しみ、僧が五條の邊へ尋ねて行くと、夕顔上の靈が半菰より現はれて、源氏の君との昔語をする事を作る。「出典」「源氏物語」夕顔の卷。

解説

◎橋 辨 慶 (はしべんけい)  
作者、日吉四郎次郎安清(二百)。(但し「能本作者註文」には不明と記す)。初見、大永四年(能本)。四番目。二場現實物。前シテ、武藏坊辨慶。トモ、同従者。狂言、都の者二人。後子方、牛若丸。後シテ、武藏坊辨慶。所、比叡山西塔・京五條橋。時、平家時代秋(九月)十七日。辨慶が五條の天神へ丑の時詣をしようとして、従者より五條橋に現はれる曲者の事を聞き、之と戦つて敗れ、名乗をして牛若丸と主従の縁を結ぶ事を作る。「出典」「義經記」卷三「辨慶浴中にて人の太刀を取りし事」「二義經辨慶と君臣の契約の事」「辨慶物語」。

解説

◎笛 之 卷 (ふえのまき)  
作者並びに初見文獻未詳。四番目。二場現實物。前子方、牛若丸。前ワキ、羽田秋長。前シテ、常勢御前。狂言、都の者二人。後子方、牛若丸。後シテ、武藏坊辨慶。所、京常勢邸・京五條橋。時、平家時代秋(九月)。牛若が母常勢より狼藉を叱責され、與へられた弘法大師傳來の笛の由来を聞き、寺に歸る事を誓つて、名残の一夜を五條橋へ月見に出かける事を前半として「橋辨慶」を變形したもので、舞の木「笛の卷」と密接の関係がある。

解説

◎芭 蕉 (ばせう)  
作者、金春禪竹。初見、大永四年(能本)。三番目。二場夢幻物。ワキ、楚國僧。前シテ、女(芭蕉の精)。狂言、楚國の者。後シテ、芭蕉の精(女體)。所、支那楚國小水。時、秋(八月)。法華經讀誦の僧の許へ芭蕉の精が現はれて、草木成佛の謂れを聞き、佛説を讚歎して舞を舞ふ事を作る。「出典」「湖海新聞」。

解説

◎鉢 木 (はちのき)  
作者、世阿彌(能本)。初見、太永四年(能本)。四番目。二場現實物。前ツレ、佐野常世の妻。前ワキ、旅僧(最明寺時頼)。前シテ、佐野常世。狂言(早打)、時頼の従者。後ワキ、最明寺時頼。ワキツレ、二階堂菜。狂言(太刀持)、時頼の従者。後シテ、佐野常世。所、上野國佐野・相模國鎌倉。時、鎌倉中期冬(十二月)。佐野常世は遊行回國の途宿を乞うた時頼の爲に、秘藏の鉢の木を貸してもてなしたが、後に時頼が鎌倉に軍勢を集めた時前首に違はず馳せ参じたので、時頼は之を嘉してその本領を復せしめ、鉢の木に因んで三箇庄を與へる事を作る。

第三編 鎌倉室町時代 (謡曲)

八三一

初雪 花篋 班女 飛雲

八三三

〔出典〕「増鏡」卷十一「草まくら」、「太平記」卷廿五「北野通夜物語事附青砥左衛門事」、「新古今集」卷六藤原定家の歌。  
〔参考〕小田清雄「謡曲録の木本採考」(文三ノ七)。

◎初 雪 (はつゆき)

作者、金春禪鳳(能本)。初見、大永四年(能本)。三・四番目。二場夢幻物。狂言、侍女夕霧。前シテ、神主の姫。後ツレ、上藤二三人。後シテ、雛初雪の霊。所、出雲國大社の邊。時、(無季)。

◎花 篋 (はながたみ) 〔花形見〕

作者、世阿彌(能本)、觀阿彌(二百)。初見、永享二年(談儀)。四番目。二場現實物。前ツキツレ、御使。前シテ、照日の前。子方、繼體天皇。ツキ、供奉官人。ツキツレ、供奉官人二人。同、興昇二人。後シテ、照日の前(狂女)。後ツレ、侍女。所、越前國味眞野・大和國玉穗郡。時、繼體天皇御宇九月。

繼體天皇が皇子であらせられた時、御寵愛を受けた照日の前が、狂女となつて御形見の花篋を持つて都に上つたが、行幸の御道で帝の御目にとまり、再び召使はれる事を作る。〔参考〕佐藤紅緑「花篋餘香」(能樂一ノ十)。

◎班 女 (はんぢよ)

作者、世阿彌。初見、「五音曲條々」、永享二年(談儀)。四番目。二場現實物。狂言、野上宿の長者。前シテ、花子。ツキ、吉田少將。ツキツレ、同従者二人。後シテ、花子(狂女)。所、美濃國野上宿・山城國糺の森。時、秋(七月)。

野上の花子といふ遊女が、一夜契りを結んだ吉田少將を慕ふあまり宿の長の怒りに遭ひ、追ひ出されて狂ひながら都に上り、賀茂の社で形見の扇によつて少將と邂逅の喜びを得る事を作る。〔出典〕「班媛好戀歌行」。

◎飛 雲 (ひうん)

作者並びに初見文献未詳。五番目。二場現實物。ツキ、熊野山伏。ツキツレ、同行山伏二人。前シテ、老樵夫(鬼神)。

狂言、熊野權現末社神。後シテ、鬼神。所、信濃國木曾。時、秋(九月)。

熊野山伏が木曾で鬼神に遭ひ、とり殺されようとしたが、必死の祈りによつて退散させる事を作る。

◎檜 垣 (ひがき) 〔檜垣の女・水汲〕

作者、世阿彌。初見、應永卅年(詠作)。三番目。二場夢幻物。ツキ、肥後僧。前シテ、老女(檜垣の女の霊)。狂言、所の者。後シテ、檜垣の女。所、肥後國岩戸。時、(無季)。

岩戸に山居する僧の許へ、後撰集の「年ふれば」の歌の作者檜垣の女の霊が現はれ、昔話をして弔を乞ふ事を作る。〔出典〕「後撰集」卷十八雜歌四。〔参考〕内柴榮樹「檜垣考」(能樂十二ノ四一七)。

◎雲 雀 山 (ひばりやま)

作者、世阿彌。初見、大永四年(能本)。四番目。二場現實物。子方、中將姫。ツキツレ、姫の従者。前シテ、乳母侍従。後ツキ、横佩右大臣豊成。ツキツレ、同従者二人。狂言、狩人三人。後シテ、乳母侍従(狂女)。所、大和紀伊國境雲雀山。時、奈良朝夏(四月)。

譏言によつて中將姫を殺させようとした父右大臣が雲雀山で姫を守る狂氣の乳母に逢ひ、先非を悔んで姫と共に歸る事を作る。口碑に取材したものであらう。

◎氷 室 (ひむろ)

作者、宮増。初見、大永四年(能本)。四番目。二場夢幻物。ツキ、龜山院臣下。ツキツレ、同従者二人。前シテ、氷室守の翁。前ツレ、同男。狂言、氷室の神職二人。後ツレ、天女。後シテ、氷室の神。所、丹波國氷室山。時、龜山院御宇三月。

朝臣が氷室山に行くと、氷室の神が現れて氷の供仰の謂れを語り、氷を守護しながら調へて都に送る事を作る。〔出典〕「日本書紀」仁德天皇六十二年の條。

◎百 萬 (ひやくまん) 〔嵯峨物狂・嵯峨大念佛〕

第三篇 鎌倉室町時代 (謡曲)

八三三

富士山 富士太鼓 二人靜

解説

作者、世阿彌(改作)。初見、應永卅年(能作)。四番目。一場現實物。子方、百萬の子。ワキ、大和吉野の者。狂言、門前の者。シテ、百萬。所、山城國嵯峨野。時、(三月)。子に生別して狂氣した百萬が、蟻峨の大念佛で狂ひ舞ふ中、子に再會し、佛の功德を謝して共に奈良に歸る事を作る。〔参考〕赤堀又次郎「百萬に關する事實」(齋曲界十五ノ一)。

◎富士 山 (ふじさん) 「不二山・富士」

作者、世阿彌(二百)、觀世小次郎(能本)。初見、永享二年(談儀)。臨能。二場夢幻物。ワキ、昭明王臣下。ツレ、同從者二人。前シテ、海士母(淺間大菩薩の神靈)。前ツレ、海士女二人。狂言、淺間大菩薩末社神。後ツレ、天女(かぐや姫)(淺間大菩薩)。後シテ、富士の山神(火の御子)。所、駿河國富士山。時、六月。支那昭明王の臣が、昔不死の薬を得た方士の遺跡を富士山に尋ね、淺間大菩薩、山神火の御子等に逢ひ、かの薬を授かる事を作る。〔出典〕「竹取物語」。

◎富士太鼓 (ふじだいこ)

作者、世阿彌。初見、大永四年(能本)。四番目。一場現實物。ワキ、花園天皇臣下。狂言(太刀持)、同從者。子方、富士の女。シテ、富士の妻。所、京。時、花園天皇御宇(九月)。

内裏の管絃に奉仕しようとして上洛した樂人富士が、勅によつて參内した樂人淺間に憎まれて殺されたが、之を知った富士の妻は狂氣して太鼓を敵と見做し、打つて心を慰める事を作る。〔出典〕富士淺間の名は引用の後撰の歌より採り入れたものかと思はれる。

◎二人 祇王 (ふたりぎわう) 「祇王(ぎわう) 參照。

◎二人 人 靜 (ふたりしづか) 「二人閑」

作者、世阿彌。初見、寛正五年(私河原)。三番目。二場夢幻物。ワキ、勝手の神職。ツレ(前後)、菜摘女。前シテ、女(靜御前)。後シテ、靜御前。所、大和國吉野菜摘川、同勝手社。時、正月七日。

解説

靜御前の靈より社家の人に弔を乞ふ旨の傳言を頼まれた若菜摘の女が、これを疑つたので、靈が乗りうつり、眞の靈も共に現はれて神職に昔話をし、二人で舞を舞つて弔を乞ふ事を作る。〔出典〕「吾妻鏡」卷五(文治元年十一月十七日の條)、「義經記」卷五「靜吉野山に捨て、るゝ事」。

◎藤 (ふぢ)

作者、安清(二百)。初見文獻未詳。三番目。二場夢幻物。ワキ、都方の僧。前シテ、里女(藤の花の精)。狂言、所の者。後シテ、藤の花の精。所、越中國多結の浦。時、(四月)。

都の僧が多結の浦で藤の花を眺め、藤に寄せた古歌を追憶してゐると、藤の精が現はれて歌舞を奏する事を作る。〔出典〕「萬葉集」卷十九に、大伴家持によつて藤の名所として紹介せられた越中多結の浦を舞臺としたもの。

◎藤 戸 (ふぢと) 「藤戸・藤門」

作者、世阿彌。初見、永正十一年(談儀)。四番目。二場夢幻物。ワキ、佐々木盛綱。ワキツレ、同從者二人。前シテ、漁夫の母。狂言、盛綱の從者。後シテ、漁夫の亡靈。所、備前國藤戸。時、鎌倉初期春(三月)。

盛綱は藤戸の先陣に先立つて漁夫に淺瀬を習ひ、密に之を殺したが、勝軍の後その母に逢ひ、悲嘆の縁に胸を打たれて故人の供養をすと、亡靈現はれて最後の縁を語り、成佛する事を作る。〔出典〕「吾妻鏡」卷三(元暦元年十二月七日の條)。「平家物語」卷十「藤戸の事」。

◎船 橋 (ふなばし) 「佐野船橋」

作者、世阿彌(改作)。初見、應永卅年(能作)。四番目。二場夢幻物。ワキ、熊野山伏。ワキツレ、同行山伏二人。前シテ、男。ツレ(前)、女。狂言、所の者。ツレ(後)、女の靈。後シテ、男の靈。所、上野國佐野。時、春(三月)。

熊野山伏が上野國佐野で相思の男女の靈に逢ひ、親に隔てられ、通路の橋板を取り外されて、川に落ちて死んだといふ昔話を聞き、回向して成佛させる事を作る。〔出典〕「萬葉集」卷十四(上野國歌)「かみつけぬさぬのふなばしとりはなしおやはさくれどわはさかれがへ」。

第三篇 鎌倉室町時代 (謡曲)

解説

◎船 辨 慶 (ふなべんけい)

作者、觀世小次郎。初見、大永四年(能本)。五番目。二場現實物。子方、源義經。ワキ、武藏坊辨慶。ツキツレ、義經從者三人。狂言、大物浦船頭。前シテ、靜御前。後シテ、平知盛の亡靈。所、攝津國八物浦。同海上。時、文治元年十一月。京を逃れて大物浦に來た義經は、靜と別れ、船を漕ぎ出すと、知盛の怨靈現はれて海に沈めようとしたが、辨慶の祈りによつて退散する事を作る。「出典」「吾妻鏡」卷五(文治元年十一月六日の條)、「源平盛衰記」卷四十六「義經行家出」都並義經始終有様事、「平家物語」卷十二判官都落の事、「義經記」卷四「義經都落の事」。

◎佛 原 (ほとけのはら) [佛御前]

作者、世阿彌。初見、寶徳四年(春日)。三番目。二場夢幻物。ワキ、都方の僧。ツキツレ、從僧二人。前シテ、里女(佛御前の靈)。狂言、所の者。後シテ、佛御前。所、加賀國佛の原。時、秋(九月)。

加賀佛原で旅僧の許へ佛御前の靈現はれ、祇王の後を追うて出家した次第を語り、弔を乞ふ事を作る。「出典」「平家物語」卷二「祇王の事」、「源平盛衰記」卷十七「祇王祇女佛御前事」。

◎卷 絹 (まさぎぬ) [卷衣]

作者、觀阿彌(二百)。初見文獻未詳。四番目。一場現實物。ワキ、當今勅使。狂言、同從者。ツレ、都の男。シテ、神子。所、紀伊國熊野。時、十二月。

三熊野に奉納の爲帝が諸國より卷絹を召された時、途中香無天神に參詣して歌を手向けて來た男が、暈夢を責められて縛られたが、天神の神靈がのり移つてこれを救ふ事を作る。「出典」「手向の歌は「沙石集」卷五に見えてゐる。

◎枕 慈 童 (まくらじどう) [菊慈童]

作者並びに初見文獻未詳。四番目。一場現實物。ワキ、漢皇帝勅使。ワキツレ、同從者二人。シテ、慈童。所、支那鄒縣山。時、漢代秋(九月)。

解説

◎松 風 (まつかぜ) [松風村雨]

作者、世阿彌(改作)。初見、應永卅年(能作)。三番目。一場夢幻物。ワキ、旅僧。狂言、所の者。シテ、海士女(松風の靈)。ツレ、海士女(村雨の靈)。所、攝津國須磨浦。時、秋(九月)。

旅僧が須磨浦で松風村雨の跡を弔ふと、夢に二人の靈が現はれて、行平の寵を受けた昔語をし、形見の袴衣をつけて舞を舞ひ、弔を乞ふ事を作る。「出典」「古今集」雜下在原行平朝臣の歌、「撰集抄」第八「公任進位并行平遷流事」、「源氏物語」須磨の卷。

◎松 尾 (まつのお)

作者、世阿彌(能本)。觀阿彌(二百)。初見、文明十五年(親元)。鳥籠。二場夢幻物。ワキ、當今臣下。ツキツレ、同從者二人。前シテ、老翁(松尾明神々靈)。前ツレ、男。狂言、所の者。後シテ、松尾明神。所、山城國松尾。時、九月。朝臣が松尾明神に參詣すると、明神の神靈現はれて、その謂れを語り、神樂を奏して御代を壽ぐ事を作る。

◎松 蟲 (まつむし)

作者、世阿彌。初見、永正十一年(談儀)。四番目。二場夢幻物。ワキ、阿倍野市人。前シテ、男(男の靈)。前ツレ、女の男三人。狂言、天王寺の者。後シテ、男の靈。所、攝津國阿倍野。時、九月。女と二人で歩いてゐる中、松蟲の音に興じて叢の中へ分け入つたまゝ死んでしまつた男の靈が、酒賣の市人の前に現はれて、酒友の情を語り、蟲の音に興じて舞を舞ふ事を作る。「出典」「古今集」序。

◎松 山 鏡 (まつやまかがみ) [松の山鏡]

作者未詳。初見、大永四年(能本)。五番目。二場夢幻物。子方、姫。ワキ、越後の者(父)。ツレ、母の靈。シテ、俱生

解説

解説

解説

神。所、越後國松の山家。時、(無季)。鏡に映る我が姿を母と思つて追慕してゐる娘の許へ、亡母の靈が現はれたが、俱生神はこれを地獄に連れ歸らうとして母が鏡の中に娘の孝心の功德によつて菩薩と變じてゐるのを見出し、一人て地獄に歸る事を作る。

◎松山天狗 (まつやまてんぐ) [松山・讀岐院・新院]

作者並びに初見文献未詳。五番目。二場夢幻物。ワキ、西行法師。前シテ、老翁。狂言、木葉天狗。後シテ、崇徳上皇。後ツレ、相模坊。同、小天狗二人又は四人。所、讀岐國松山。時、鎌倉初期春(三月)。

西行法師が松山に崇徳院の御廟を弔ひ、一首の詠歌を奉ると、上皇が御出現になつて、昔の御不幸を御怒りになるのを、天狗共が現はれてお慰めする事を作る。[出典]「山家集」、「撰集抄」卷二「新院御嘉讚州白峯有之事」。[参考]飯田豊「上田秋成の白峯と讀曲松山天狗」(讀曲界十五ノ六)。

◎滿 仲 (まんぢゆう) 「仲光」(なかみつ) 参照。

◎通 盛 (みちもり) [道盛・陸盛]

作者、井阿彌。初見、應永卅年(能作)。二番目。二場夢幻物。ワキ、僧。ワキツレ、從僧。前シテ、漁翁(通盛の靈)。ツレ(前後)、海士女(小宰相局)。狂言、所の者。後シテ、平通盛。所、阿波國嶋門。時、夏(七月)。

磯山で平家一門の爲に讀經してゐる僧の許へ、通盛と、その後を追うて入水した宰相局との靈が現はれ、一の谷合戦の様を語り、弔を喜ぶ事を作る。[出典]「平家物語」卷九「落足之事」;「小宰相」;「源平盛衰記」卷三十七「忠度通盛等最後事」;卷卅八「小宰相局附憤夫人事」。

◎三 山 (みつやま) [桂子]

作者、世阿彌。初見、寛正六年(親元)。四番目。二場夢幻物。ワキ、良忍上人。狂言、所の者。前シテ、里女(桂子の靈)。後ツレ、櫻子の靈。後シテ、桂子の靈。所、大和國耳成山。時、春(三月)。耳成山の桂子と畝傍山の櫻子とに二道かけて通つてゐた香久山の男が、櫻子の方に心を移したので、桂子は恨んで池に

身を沈めたといふ三山の謂れを聞いて、良忍上人がその後を弔ふと、二人の靈が現はれて争つたが、やがて共に成佛を祈る事を作る。[出典]「萬葉集」卷一天智天皇御製・同卷十六「有由緒歌」。

◎水 無 瀬 (みなせ) [爲世]

作者並びに初見文献未詳。四番目。二場夢幻物。ワキ、僧(爲世)。子方、爲世の子(姉)。同、同(弟)。シテ、爲世の妻の靈。所、攝津國水無瀬。時、鎌倉中期秋(九月)。

出家した爲世朝が、故郷水無瀬に来て、後に残した二兄に逢ひ、これを父とは知らぬ姉弟の乞にまかせて、亡妻の回向をしてゐると、妻の靈現はれて、子に名乗りをせぬ夫の無情を恨み、親子を引き合せて成佛する事を作る。

◎水 無 月 祓 (みなづきばらひ) [六月祓・名越・みそぎ川]

作者、世阿彌(能本)、日吉安清(二百)。初見、五音曲條々。四番目。一場現實物。ワキ、下京の男。狂言、所の者。シテ、室君(狂女)。所、山城國賀茂。時、六月晦日。

夏越の祓に賀茂明神に参詣して、室の津で契つた女との再會を祈つてゐる男の許へ、狂女が現はれて、夏越の謂れを説いたが、これが尋ねる女であつたので、二人は神の御恵を謝して共に歸る事を作る。

◎身 延 (みのぶ) [身延山]

作者並びに初見文献未詳。三番目。二場夢幻物。ワキ、日蓮上人。シテ、女の亡靈。所、甲斐國身延山。時、鎌倉中期秋(九月)。

身延山で法華經を讀誦してゐる日蓮上人の許へ、日毎に参詣して成佛得脱の身となり得た女の亡靈が、上人に謝して舞ふ事を作る。

◎御 裳 濯 (みもすそ) [御裳・御裳濯川・石鏡・鏡御裳濯]

作者、世阿彌。初見、大永四年(能本)。脇能。二場夢幻物。ワキ、當今臣下。ワキツレ、同従者二人。前シテ、老翁(興

玉神。前ツレ、男。狂言、所の者。後シテ、異玉の神。所、伊勢國石の鏡。時、五月。伊勢參宮の朝臣が、二見浦石鏡で異玉神の神靈に逢ひ、倭姫が御裳を濯がれたといふ御裳濯川の謂れを聞く事を作る。〔出典〕「倭姫命世紀」、「神皇正統記」卷二。

◎三 輪 (みわ) 〔三輪小手卷・三輪緒環〕

作者、世阿彌。初見、寛正六年(親元)。四番目。二場夢幻物。ワキ、玄賓僧都。前シテ、里女(三輪神靈)。狂言、所の者。後シテ、三輪明神。所、大和國三輪。時、秋(九月)。

玄賓僧都の許へ三輪明神が女人に化して現はれ、衣一重を乞うて三輪の神杉に掛けて置いたが、これを聞いた僧都が神杉の許に行くと、神靈現はれて、三輪の神婚物語や神代の始めの物語をする事を作る。〔出典〕「無名抄」、「江談抄」第一「玄賓律師大僧都辭退事」。〔参考〕岡不崩「三輪の題材について」(能楽十二ノ一—三)。

◎三 井 寺 (みいでら)

作者、世阿彌。初見、康正二年(歌舞)。四番目。二場現實物。前シテ、千満の母。狂言、夢卜者。子方、千満。ワキ、三井寺住僧。ワキツレ、同従者二人。狂言、能力。後シテ、千満の母(狂女)。所、京清水寺、近江國三井寺。時、八月。人買の手に渡つたわが子千満の行方を尋ねて、靈夢のまゝに三井寺に來た女が、狂ひながら鐘を撞き、寺僧に告められたのが縁となり、この寺に來てゐた千満と再會して共に故郷に歸る事を作る。

◎六 浦 (むつら) 〔六浦楓〕

作者、金春禪竹(能本)。日吉安清(二百)。初見、大永四年(能本)。三番目。二場夢幻物。ワキ、都僧。ワキツレ、従者二人。前シテ、里女(風の精)。狂言、所の者。後シテ、風の精(女體)。所、相模國(武藏)六浦。時、秋(九月)。旅僧が六浦の稱名寺に一本だけ紅葉してゐない楓に不審を抱くと、風の精現はれて、昔爲相輔が先立つて紅葉したこの木に歌を寄せて以來、身を退いて紅葉せぬ謂れを語る事を作る。〔出典〕「藤谷集」の「いかにしてこの一本に」の歌。

解説

◎室 君 (むろぎみ)

作者並びに初見文献未詳。四番目。二場夢幻物。ワキ、室の神職。狂言、同従者。ツレ、室君三人。シテ、草提希夫人。所、播磨國室。時、二月。遊女を舟に乗せて雛子物をさせる室明神の神事に、明神の本地草提希夫人も現はれて、歌舞を奏する事を作る。

◎和 布 刈 (めかり) 〔海藻刈〕

作者未詳。初見、大永四年(能本)。鳥籠。二場夢幻物。ワキ、早瀬の神職。ワキツレ、同従者二人。前シテ、漁翁(龍神)。前ツレ、海士女(天女)。狂言、海草の精。後ツレ、龍女。後シテ、龍神。所、長門國(豊前國)早瀬明神。時、十二月晦日。早瀬明神で海底の和布を刈り、神前に供へる行事が行はれた時、龍神と龍女が現はれて、豊玉姫の時以來海陸の交通の絶えた事を説き、海底を平穩にして去る事を作る。〔出典〕「李都王記」、「古事記」、「日本書紀」、「神皇正統記」卷一。

◎望 月 (もちづき)

作者並びに初見文献未詳。四・五番目。二場現實物。前シテ、小澤刑部友房。ツレ、安田友治の妻。子方、花若。ワキ、望月秋長。狂言、同従者。後シテ、小澤刑部友房。所、近江國守山。時、(正月)。望月秋長に殺害された安田友治の妻子は、流浪の旅の果、旅宿甲屋に辿り着いたが、亭主は元家臣の小澤友房であつたので、共に力を合せて折柄宿り合せた望月を討ち果す事を作る。

◎求 塚 (もとめづか) 〔若菜・處女塚〕

作者、世阿彌(能本)、觀阿彌(二百)。初見、永享二年(談儀)。四番目。二場夢幻物。ワキ、西國僧。ワキツレ、従者二人。前シテ、里女(菟名日處女の靈)。前ツレ、里女二三人。狂言、所の者。後シテ、菟名日處女の靈。所、攝津國生田。時、後堀河院御宇春(二月)。

解説

解説

解説

解説

解説

解説

解説

紅葉狩 盛久 楊貴妃

八四二

生田の里に求塚を尋ねた僧が、菟名日處女の靈に逢ひ、昔處女が二人の男に戀せられ、覺奮を的にかけた勝負もつかないのて、生田川に入水したといふ話を聞き、夢に地獄に於ける處女の苦患の様を見る事を作る。〔出典〕「萬葉集」卷九「見菟原處女墓歌一首並短歌」、「大和物語」。

◎紅葉狩 (もみぢがり) 〔維茂・是持〕

作者、觀世小次郎(二百)。初見、天文十四年(言)。五番目。二場現實物。前シテ、貴女(鬼女)。前ツレ、侍女三人又は五人。狂言、侍女。ワキ、平維茂。ワキツレ、從者多勢。狂言、男山八幡末社神。後シテ、鬼女。所、信濃國戸隠山。時、平安朝九月下旬。

平維茂が戸隠山中で紅葉狩の美女達に逢ひ、饗應の酒に酔ひ倒れてみると、夢に八幡大菩薩の神勅があつたので、鬼女である事を知り、これを退治する事を作る。〔參考〕西村繁明「維茂と紅葉狩の傳説」(謡曲界十三ノ四)。

◎盛久 (もりひさ) 〔守久〕

作者、世阿彌(能本)、元雅(二百)。初見、永正十一年(談儀)。四番目。一場現實物。シテ、平盛久。ワキ、土屋三郎。ワキツレ、與昇二人。ワキツレ、太刀取。狂言、土屋の從者。所、相模國鎌倉。時、鎌倉初期春(三月)。

源氏に生捕られた盛久が、日夜讀誦した觀音經の利益により、刑場で斬られようとした時に太刀取の刀が折れ、又頼朝と同夢の奇特があつたので、遂に死を許される事を作る。〔出典〕「平家物語」長門本卷二十。〔參考〕西村繁明「生捕盛久」(謡曲界十二ノ六)。

◎楊貴妃 (やうきひ)

作者、金春禪竹。初見、長享二年(親長)。三番目。一場現實物。ワキ、方士。狂言、所の者。シテ、楊貴妃。所、當世國產樂宮。時、唐玄宗の代(八月)。

玄宗皇帝の勅によつて、楊貴妃の魂魄を蓬萊宮に尋ねた方士が、形見に玉の釵を受け、比翼連理の契りの言葉帝への證に聞いて立ち歸る事を作る。〔出典〕「長恨歌」。

◎養老 (やうらう) 〔養老瀧〕

作者、世阿彌。初見、應永卅年(能作)。臨能。二場夢幻物。ワキ、雄略天皇勅使。ワキツレ、從者二人。シテ、孝子の父(樵翁)。ツレ、孝子樵夫。狂言、本巢郡の者。後シテ、養老山神。所、美濃國養老瀧。時、雄略天皇御宇(四月)。

雄略帝の勅使が美濃國養老瀧に下り、孝子とその父に逢ひ、瀧の名の謂れを聞き、父子の抹げた薬水を携へて歸らうとすると、山神が現はれて御代を祝ふ事を作る。〔出典〕「續日本紀」卷七(元正天皇の詔)、「十訓抄」第六、「古今著聞集」卷六。〔參考〕森治藏「養老の傳説」(能樂四ノ一)、柳田國男「孝子泉の話」(謡曲界十三ノ一・二)。

◎八島 (やしま) 〔屋島・八島判官・屋島判官〕

作者、世阿彌。初見、永享二年(談儀)。二番目。二場夢幻物。ワキ、都僧。ワキツレ、從僧二人。前シテ、漁翁(義經の靈)。ツレ、漁夫。狂言、所の者。後シテ、源義經。所、讃岐國八島。時、春(三月)。

都の僧が屋島で源平合戦に精通してゐる漁翁に逢ひ、昔話を聞く中、義經の姿を現はして、名譽のため流れ行く弓を拾ひ上げた故事など語り、修羅に於ける奮戦の様を示す事を作る。〔出典〕「平家物語」卷十一「大阪越の事」。「嗣信最後の事」。「弓流の事」。

◎山姥 (やまうば) 〔山姥・山祖母・山姥〕

作者、世阿彌(能本)、金春禪竹(二百)。初見、應永卅年(能作)。五番目。二場現實物。ツレ、遊女山姥。ワキ、從者。ワキツレ、同從者二・三人。狂言、境川の者。前シテ、里女(山姥)。後シテ、山姥。所、越後國上路山。時、(無季)。

山姥の曲舞を作つて名をひやくま山姥と呼ばれた遊女が、越後上路山で鬼女山姥に逢ひ、曲舞や山廻りの様を見る事を作る。

◎雪 (ゆき)

作者並びに初見文獻未詳。三番目。一場夢幻物。ワキ、旅僧。シテ、雪の精(女體)。所、攝津國野田渡。時、冬(十二月)。

第三篇 鎌倉室町時代 (謡曲)

八四三

解説

解説

解説

解説

解説

解説

解説



遊行柳 夕顔 弓八幡 熊野

八四四

攝津國野田渡で雪の晴れ間を持つてゐる僧の許へ、雪の精が現はれて、識經を請ひ、廻雪の舞を舞ふ事を作る。

◎遊 行 柳 (ゆきやうやなぎ)

作者、親世小次郎。初見、大永四年(能本)。三番目。二場夢幻物。ワキ、遊行上人。ツキツレ、從者二人。前シテ、老翁(柳の精)。狂言、所の者。後シテ、朽木柳の精(老體)。所、岩代國白河邊。時、秋(九月)。遊行上人が白河の邊で老翁に逢ひ、西行が歌を寄せたといふ謂れを聞き、念佛してゐると、柳の精が現はれて故事を語り、事を作事を作る。「出典」新古今集「卷三(題知らず、西行法師)」、「藤澤智實覺書」。

◎夕 顔 (ゆふがほ) [源氏夕顔]

作者、世阿彌(能本)。初見、寛正六年(親元)。三番目。二場夢幻物。ワキ、豊後の僧。ワキツレ、同從者二人。前シテ、里女(夕顔上の靈)。狂言、所の者。後シテ、夕顔上。所、京五條。時、秋(九月)。旅僧が五條の邊で夕顔上の靈に逢ひ、河原院へ源氏と来て、物の怪に取り殺された昔話を聞き、回向して成佛させることを作る。「出典」源氏物語「夕顔の巻」。

◎弓 八 幡 (ゆみやはた) [弓矢八幡]

作者、世阿彌。初見、永享二年(談儀)。臨能。二場夢幻物。ワキ、後宇多院臣下(陪從)。ワキツレ、從者二人。前シテ、老翁(高良の神靈)。前ツレ、男。狂言、山下の者。後シテ、高良の神。所、山城國男山。時、後宇多院御宇二月初期。後宇多院の勅使が男山八幡に参詣して、君に桑の弓を捧げようとして待つてゐる高良明神の神靈に逢ひ、神功皇后の三韓征伐や八幡宮の由来などを聞く事を作る。

◎熊 野 (ゆや) (遊屋・湯谷)

作者、世阿彌。初見、康正二年(歌舞)。三番目。一場現實物。ワキ、平宗盛。ワキツレ、同從者。ツレ、朝顔。シテ、熊野。所、京平宗盛館・同清水觀音。時、平家時代春(三月)。

宗盛の妾熊野は、故郷の母重病の報を侍女が齎したので、暇を乞うたが許されず、強ひて連れ出された花見の宴に、母を思ふ歌を詠み、遂に宗盛の許を後て歸國する事を作る。「出典」平家物語「卷十「海道下り」」。

◎夜 討 會 我 (ようちそが) [富士卷狩・狩場會我・打入會我]

作者未詳。初見、寛正六年(蔭涼、打入會我)。四番目。二場現實物。前ツレ、會我十郎。前シテ、會我五郎。前ツレ、關三郎。同、鬼王。狂言、大藤内。同、狩場の者。後ツレ、古屋五郎。同、御所五郎丸。同(立案)、軍兵二人。後シテ、會我五郎。所、駿河國富士裾野。時、建久四年五月。會我兄弟が富士の裾野の狩場に機を得て、敵所經を討たうとし、供を願ふ關三郎鬼王兄弟を説いて、故郷の母に形見を届けさせ、本望成就の後、十郎は討死し、五郎は御所五郎丸に捉へられることを作る。「出典」會我物語「卷九「鬼王道三郎會我へ歸りし事」」「五郎召捕らるゝ事」、「吾妻鏡」卷十三(建久四年五月廿八日の條)。

◎吉 野 靜 (よしのしづか) [芳野閑]

作者、世阿彌(能本)、親阿彌(二百)。初見、應永九年(花傳「靜」)。三番目。二場現實物。ワキ、佐藤忠信。狂言、衆徒二人。シテ、靜御前。所、大和國吉野山。時、鎌倉初期(三月)。義經が吉野を落ちた時、忠信は靜と謀つて僧兵の追討を防ぐため、都道者となつて頼朝義經の和解を説いて歎き、靜は法樂の舞を舞ひ、衆徒に心を許させる事を作る。「出典」靜の吉野に於ける舞の記事は、別の趣向で「義經記」卷五「靜吉野山に捨てらるゝ事」に見え、忠信の事も同書に出てゐるが(忠信参照)、兩者を結びつけた仕組の典拠は詳かでない。

◎吉 野 天 人 (よしのてんにん)

作者、親世小次郎(能本)、日吉安清(二百)。初見、大永四年(能本)。三番目。二場夢幻物。ワキ、都の者。ワキツレ、都の者二人。前シテ、女(天人)。狂言、里人(吉里山神)。後シテ、天人。所、大和國吉野山。時、春(三月)。都の者が吉野の花見に出掛けて天人に逢ひ、昔天子の寶鏡を得たといふ五節の舞を見ることが作る。

解説

◎頼 政 (よりまさ) [源三位・宇治頼政]

作者、世阿彌。初見、應永卅年(能作)。二番目。二場夢幻物。ワキ、旅僧。前シテ、老翁(源頼政の靈)。狂言、所の者。後シテ、源頼政。所、山城國宇治平等院。時、五月廿六日。宇治平等院で源三位頼政の靈が旅僧の前に現はれ、平家倒滅の謀願はれて、合戦の末力盡き、扇の芝で一首の辭世を遺して自害した昔語をし、弔を乞ふ事を作る。「出典」『平家物語』卷四「橋合戦の事」・「宮の御最後の事」。

◎弱 法 師 (よろぼふし) [麻法師・よろぼし]

作者、世阿彌。初見、永享二年(談儀)。四番目。一場現實物。ワキ、高安通俊。狂言、同從者。シテ、一子俊徳丸。所、攝津國天王寺。時、二月。人の讒によつて我子俊徳丸を追ひ出した高安通俊が、流石子の不便さに天王寺で修行をしてゐると、悲嘆に盲目となり、弱法師と綿名せられて乞食に落ちぶれた我が子に廻り合ひ、夜に紛れて故郷に連れ歸る事を作る。「出典」『弱法師の事は「太平記」卷五「相模入道弄田樂並開犬事」に「天王寺のやうればし」とある。「参考」西村紫明「弱法師と傳説二つ」(謡曲界 十四ノ二)。

◎雷 電 (らいでん) [來殿・妻戸]

作者並びに初見文献未詳。五番目。二場現實物。ワキ、法性坊。前シテ、菅公の靈。狂言、法性坊從者。後シテ。雷神(菅公の怨靈)。所、近江國比叡山・京御所。時、平安初期(八月)。菅公の怨靈が雷となつて内裏に飛び入らうとして、祈禱の妨げを恐れ、まづ法性坊僧正を訪ねてこの事を訴へたが、意に任せず、後内裏に現はれた時、僧正に祈られて力衰へた上、帝より贈官を賜はつたので、心解けて昇天する事を作る。「出典」『太平記』卷十二「大内裏造替事附聖廟御事」。

◎羅 生 門 (らしやうもん) [羅城門・綱]

解説

作者、観世小次郎。初見、大永四年(能本)。五番目。二場現實物。前ワキツレ、源頼光。前ワキツレ、保昌、貞光、季武、公時。前ワキ、渡邊綱。狂言、綱の從者。後ワキ、渡邊綱。後シテ、鬼神。所、京頼光館・同羅生門。時、平安盛期春(二月)。

頼光の許に集まつた武士達が徒然の話の中、羅生門に鬼神が現はれるといふ噂が出たので、綱が眞偽を檢分に行つて鬼神に逢ひ、これと戦つて片腕を斬る事を作る。「出典」『平家物語』劍の巻。

◎龍 虎 (りようこ)

作者、観世小次郎。初見、大永四年(能本)。五番目。二場夢幻物。ワキ、入唐僧。ワキツレ、從僧二人。前シテ、樵翁(虎)。前ツレ、樵夫。狂言、仙人。後ツレ、龍。後シテ、虎。所、支那。時、春(無季)。日本を廻り盡した僧が、入唐して、竹林に龍虎相搏つ争ひを見ることを作る。「出典」龍虎相搏つ古圖に想を得たものかと思はれる。

◎輪 藏 (りんざう)

作者、観世彌次郎。初見、大永四年(能本)。脇能。二場夢幻物。ワキ、太宰府僧。ワキツレ、從僧二人。狂言、門前の者。前ツレ、老翁(火天)。狂言、末社福部の神。後シテ、傳大士。子方、普建。子方、普成。後ツレ、火天。所、京北野天神。時、(無季)。北野天神に參詣した筑前太宰府の僧が、二童子を作つた傳大士から、釋迦一代説法の經箱を與へられ、守護神火天に逢ひ、輪藏の謂れを聞き、乞らて五十餘卷の經文を一夜の中に披見する事を作る。

◎籠 太 鼓 (らうだいこ) [弄太鼓]

作者、世阿彌。初見、寛正七年(飯尾)。四番目。一場現實物。ワキ、松浦何某。狂言、同從者。シテ、關清次の妻。所、肥後國松浦。時、(無季)。脱獄した人殺しの夫の身代りに入牢させられた女が、主人松浦何某に夫の行方を糺されたが、實を告げず、牢に掛けら

解説

解説

解説

解説

れた鼓を打つて、夫を惹き舞ひ狂つたので、遂に夫婦共に許される事を作る。

◎井筒 (わづつ) [井筒女]

作者、世阿彌。初見、永享二年(護國)。三番目。二場夢幻物。ワキ、旅僧。前シテ、里女(有常の女の霊)。狂言、標本の者。後シテ、紀有常の女。所、大和國石上在原寺。時、秋(九月)。

旅僧が石上の在原寺で、情井筒の女といはれた紀有常の女の霊に逢ひ、榮平と取り交した歌物語を聞き、夢に女が再び直衣姿となつて現はれ、井戸水に映る我が姿に榮平を惚ぶ様を見る事を作る。[出典]「伊勢物語」二十三段、「古今集」。

◎烏帽子折 (ゑぼしをり) [現在熊坂]

作者、宮城(二百)。初見、永享四年(看聞御記「九郎判官東下向」)。四・五番目。二場現實物。ワキ、三條吉次。ワキツレ、弟吉六。子方、牛若丸。狂言、早打。前シテ、烏帽子屋亭主。前ツレ、同妻(鎌田正清妹)。狂言、宿屋亭主。狂言、熊坂輩下の者三人。後シテ、熊坂長範。後ツレ、熊坂輩下の者多勢。所、近江國鏡の宿・美濃國赤坂。時、平家時代(九月)。牛若が三條吉次等の一行に加はつて奥州に下る途中、鏡の宿で都よりの詮議の聲しさに、姿を變へようとして、烏帽子を折らせたのが縁で舊臣の妹に逢ひ、又赤坂で熊坂長範を斬る事を作る。[出典]「平治物語」卷三「牛若奥州下向の事」、「義經記」卷二「鏡の宿に強盗入る事」、「造那王殿元服の事」。

◎繕馬 (ゑま)

作者並びに初見文献未詳。昌能。二場夢幻物。ワキ、當今勅使。ワキツレ、同従者二人。前シテ、老翁(天照大神)。前ツレ、姥(月讀尊)。狂言、蓬萊島の鬼二・三人。後シテ、天照大神。後ツレ、天鈿女命。後ツレ、手力雄命。所、伊勢國齋宮。時、節分。

勅使が伊勢齋宮で、老夫婦と化して現はれた二柱の神に逢ひ、雨と日照りを示す黒白の繪馬を掛け並べ。様を見、夜になつて神々が天岩戸の故事を現出されるのに逢ふ事を作る。[出典]「勢陽雜記」、「伊勢參宮名所圖會」、「碧山日録」。

◎小鹽 (をしほ)

作者、金春禪竹。初見、寛正六年(薩涼)。三・四番目。二場夢幻物。ワキ、下京の男。ワキツレ、同二人。前シテ、老翁(在原業平霊)。狂言、所の者。後シテ、在原業平。所、山城國大原野。時、春(三月)。

都の人々が大原野へ櫻狩に行くと、業平の霊老翁に化して現はれ、「大原や小鹽の山も今日こそは」の歌の謂れを語り、後眞の姿を現はして舞を舞ふ事を作る。[出典]「伊勢物語」第七十六段。

◎姨捨 (をばすて) [姨棄・伯母棄・伯母捨・姨捨山]

作者、世阿彌。初見、永正十一年(護國)。三番目。二場夢幻物。ワキ、都の男。ワキツレ、都の男二人。前シテ、里女(老女の霊)。狂言、山下の者。後シテ、老女。所、信濃國姉捨山。時、八月十五夜。

都の男が中秋名月の夜姉捨山に登ると、昔この山に捨てられて、「我が心慰めかねつ」と詠んだ老女の霊が現はれて、昔語をすることを作る。[出典]「古今集」雜上、「大和物語」、「今昔物語」卷三十「信濃國姨母山語」、「無名抄」。

◎女郎花 (をみなめし) [頼風]

作者、世阿彌(能本)、龜阿彌(二百)。初見、永正二年(粟田口)。四番目。二場夢幻物。ワキ、松浦僧。前シテ、老翁(小野頼風の霊)。狂言、山下の者。後シテ、小野頼風。後ツレ、頼風の妻。所、山城國男山。時、秋(八月)。

男山の女郎花を折り取らうとした僧の許へ、男塚の主小野頼風が現はれて、男塚女塚の謂れを語り、後女塚の妻と共に現はれて、女の魂が女郎花となつた事を語つて、形を乞ふ事を作る。[出典]「古今集」序。

◎大蛇 (をろち)

作者、觀世小次郎。初見、寛正六年(薩涼)。四・五番目。二場現實物。ワキ、素戔鳴尊。ワキツレ、従者二人。前シテ、手摩乳。前ツレ、脚摩乳。子方、奇稻田飯。狂言、木葉の精。ワキツレ、與見二人。後シテ、八岐大蛇。所、出雲國手摩乳の家、同鏡の川上。時、神代(無季)。

第三篇 鎌倉室町時代 (謡曲)

解説

解説

解説

解説

解説

解説

解説

謡曲諸本

素戔鳴尊が、大蛇の犠牲にならうとした奇稻田姫を救ひ、酒におびきよせて大蛇を退治し、叢雲の劍を得られたことを作る。「出典」「古事記」「日本書紀」。

譜本

古寫本

謡曲の筆寫は室町時代以來盛に行はれたらしく、古寫本の現存するものも少くないが、次に掲げるのはその中の主要なものである。

○世阿彌自筆本

觀世宗家に「松浦の能」「阿古耶松」の二篇、京都片山家に「布留の能」一篇が傳はつてゐる。現存の謡曲古寫本中最古のものであらう。

○觀世小次郎筆本 百冊 伊達伯爵家藏

○飯田氏藏本 (喜多流謡曲三百餘篇の古寫本)

古版譜本

謡曲の節附版本即ち譜本はいはゆる光悅本をはじめとして數百種の多きに上つてゐるが、そのうち明治以前刊行の主要なものを選んで次に掲げる。

○光悅本 百番百冊

慶長年間に角倉素庵の刊行したもので、本阿彌光悅が版下を書いたとの傳へによつて、光悅本と呼ばれてゐるが、木活字本で數種の異版があつて、所収の番組に多少の出入がある。圖書寮本百番は日本古典全集第二期本中に、齋藤香村氏藏本五十番は謡曲文庫中に複寫されて出でゐる。

○元和木活字本 内百番百冊

○元和卯月本 百冊・二十冊

粘葉綴で、一番宛百冊のものと、五番宛二十冊のものとがあり、毎冊の終に、元和六年卯月、觀世左近太夫暮閑の奥書がある。

○明曆三年本 外百番二十冊 野田彌兵衛尉刊行

○萬治二年山本本 内百番二十冊

觀世流内百番の番組の基礎になつたもの。毎曲上欄に辭句の註解を掲げてゐるのが特色である。山本長兵衛刊行。なほ同年に安田十兵衛の刊行したものもある。

○天和二年本 外百番二十冊

小徳傳兵衛版・小佐治半左衛門版・野田彌兵衛版の三種あり、何れも明曆三年本にそれぞれ訂正を加へたものである。

○貞享二百番之外百番本 二十冊

貞享三年林和泉掾刊行。奥附に「此百番者世間流布之板行二百番之外百番也」云々とあり、番外曲最初の出版である。國民文庫「謡曲全集下巻」に複刻。

○元祿三百番之外百番本 二十冊

元祿二年林和泉掾が貞享番外本の續篇として刊行したもの。國民文庫「謡曲全集下巻」に複刻。

○元祿四百番之外百番本 二十冊

第三篇 鎌倉室町時代 (謡曲)

元禄十一年江戸田方屋伊右衛門刊行。前々項及び前項の番外本の續編と見るべきものであるが、前二書の刊行者たる林和泉掾の刊行に係る本書と内容の本が、正徳六年にも出てゐる由で、或は林が本書と正徳本との前に、同内容のものを出したことがあるのではないかと疑がある。國書刊行會第三期本中「謡曲末百番」(宴曲集と合冊)は本書の複製である。

○明和二年改正本 六十一冊・二百一十一冊

十五代觀世太夫元章が、従来の曲の詞章並びに節附を改訂して、江戸出雲寺和泉掾に刊せしめたもの。二百十番謡目録・九祝舞・内外二百番・習謡十番・獨吟(蘭曲)を併せて、六十一冊のものと二百一十一冊のものがある。この改正本は元章一代で間もなく廢せられたが、詞章辭句の改訂には賀茂眞淵・加藤枝直らが參與したらしく、古學復興の潮流と關聯して注意すべきものである。

○天保十一年山本本 四十一冊

山本長兵衛刊行。内百十番(二十二冊)・外六十二番(十三冊)・別能二十八番(六冊)から成り、現行觀世流謡本の底本となつたものである。

新版謡本

謡本(節附本)は明治以後に刊行されたものも極めて多いが、ここには、各流に亘つて、最も信憑すべきもの數種を舉げておく。

○大正 觀世流謡本 觀世元滋訂正 大正九年

内百番・外六十二番・別能二十八番番外九番及び蘭曲を収め、各曲の梗概及び裝束附を記載してゐる。

○觀世流改訂謡本 丸岡桂訂正・觀世清之節付 大正十三・十四年

内百十番・外六十二番・別能二十八番・番外八番及び蘭曲を収め、各曲の解題・謡ひ方梗概・辭解・裝束附を記載してゐる。全部四十五冊。

○大正 寶生流謡本 寶生重英改訂 大正十二年

内百番・外八十番及び翁・蘭曲を収め、都合三十七冊。各曲に梗概及び裝束附がついてゐる。

○大正 金春流謡本 金春光太郎編 大正十四年

三十冊に百五十番を収め、梗概及び裝束附がついてゐる。

○金剛流謡曲正本 金剛右京訂正 昭和四年

明治三十一年刊行の「金剛流謡本」内外二百番中の曲目を抜きさしして、百八十番と番外二十番とを四十冊に収む。

○大正 喜多流謡本 喜多六平太編 大正十二年

内百五十番・外五十三番を四十一冊に収め、梗概及び裝束附を載す。

○昭和 喜多流謡本 喜多六平太編 昭和三年

従来の曲目中二十三番を廢し、内外の別をやめ、曲舞を附載して、三十七冊としたものである。

活版本

- 國民文庫「謡曲全集」
- 新謡曲全集
- 新謡曲百番
- 校謡曲叢書

- 新名著文庫「謡曲五十番」
  - 四流謡曲二百番
  - 有朋堂文庫「謡曲集」
  - 日本文學大系「謡曲集」
  - 日本古典全集「謡曲百番」
  - 日本名著全集「謡曲三百五十番」
  - 謡曲文庫
- 右のうち「新謡曲百番」は英人チャンバレン著の寫本を佐佐木信綱博士が校訂して刊行したもので、從來流布してゐないものが大部分を占めて居り、「四流對照謡曲二百番」は芳賀矢一博士の編著で、觀世・寶生・喜多・金剛四流の謡曲を對照して掲げ、各流詞章の比較研究に便したものである。また「校註謡曲叢書」は芳賀矢一・佐佐木信綱博士の校註で、所收曲數五百數十番、現存する謡曲の殆ど全部を網羅して居り、日本文學大系本には尾上八郎博士の、日本名著文庫本には野々村戒三氏の、それぞれ詳しい解説がついてゐる。なほ日本古典全集本・國民文庫本・謡曲文庫本に關しては古版謡本「光悅本」の條參照。

参考書

註釋書

- 謡 鈔 二十卷

文祿四年成

一に「謡曲古鈔」ともいふ。豊臣秀次が五山の僧衆に命じて作らせた金春流謡本百番の註釋で、謡曲の註書中最古のもの。異版が十數種あつて、曲目に僅少の出入がある。何れも刊年未詳であるが、「言經卿記」によれば、文祿四年成立の當時、既に最初の版が出たらしい。なほ本書に關しては、寛五百里氏の「謡鈔に於ける新・古二鈔の存在と林羅山撰述説とを疑ふ」(國語と國文學昭和三ノ十二)、同「謡鈔の撰者に關する異説について」(國語と國文學昭和四ノ十二)、及び齋藤香村氏の「謡鈔雜考」(國語と國文學昭和四ノ一)に詳しい考證がなされてゐる。

- 諷 増 抄 十二卷 加藤 盤 齋 寛文元年成

「謡鈔」を増補する意味で「高砂」以下十五曲を註釋したもの。

- 法 音 抄 五卷 僧 惠 空 正徳四年

東山正立寺の惠空僧都が、謡曲中の佛語を解説したものを、弟子たちが編輯した書。

- 謡曲拾葉抄 二十卷 犬山貞恕・忍銚 明和九年

犬井貞恕の原撰に、門人忍銚が加筆増補して成つたもので、觀世流謡曲百一番の辭句出典を註解し、謡曲の註書中最も詳細なもの。國文註釋全書に複製があり、丸岡桂枝訂の謡曲叢書には排列を曲名の五十番順に改めて収めてゐる。

- 謡言粗志 寫四十二卷 前田侯爵家藏

寶生流謡曲一百番を金澤の藩儒が註釋したもので、「拾葉抄」と並ぶ詳しい註書である。昭和三年和田萬吉博士の校訂で謡曲文庫中にその一部を版にした。

以上は明治以前の註書中の主要なものであるが、他に一曲のみを詳しく註解した「高砂増々抄」(元文元年)、「江口謡私考」(享保六年)、「山姥謡抄」(寛政四年)などがあり、謡曲用語の簡単な解説書の類も多く出てゐる。

- 謡文評釋 中 根 淑 (帝國文庫「日本歌謡類聚」下卷)

「鈴の木」以下十二曲の評釋で、はじめ雑誌「都の花」第一號(明治二十一年十月)より第三十號(明治二十三年一月)に亘つて連載したものである。

- 謡曲新評 二卷 増田 于 信 明治二十四年

上卷に「羽衣」以下十曲、下卷に「海士」以下十曲、都合二十曲を評註したもの。

- 謡曲通解 八卷 大和田建樹 明治二十五年

第三篇 鎌倉室町時代 (謡曲)

二百四十八曲の本文を掲げて、上欄に辭句を註解し、卷首に總論を附す。明治時代最初のまとまった註釋書。明治二十九年に、曲數二十を増して、洋裝一冊の「増補謡曲通解」を出してゐる。

○謡曲評釋 九冊 大和田建樹 明治四十年

前書を増補改訂し、曲の持列をいろは順に改めたものである。

○謡曲選釋 一冊 長連恒

○謡曲文解 二冊 勝野壁水 明治四十年

○謡曲講義 一冊 鈴木暢幸 大正五年

○謡曲新釋 一冊 豊田八十代 大正七年

○謡曲講座 十二冊 齋藤香村編 大正十五年

○謡曲講義 能勢朝次 (國文學講義)

○名謡曲新釋 一冊 野本米吉 昭和五年

右の諸書は教曲乃至數十曲の選擇である。

○謡曲大鑑 二冊 齋藤香村 大正十二年

○觀世流改訂謡本辭解 丸岡桂 大正十三・十四年

新版謡本の條にあげた「觀世流改訂謡本」附載の辭解で、舊説の誤謬を訂正したところが多い。

○謡曲大觀 七冊 佐成謙太郎 昭和五・六年

註解五冊、首卷・別卷各一冊より成り、首卷には、能樂畫譜・能樂總説・謡曲細説を載せ、註解は、主として觀世流の本文を探り、現行曲二百三十五番を曲名の五十音順に排列して、各曲につき、解説・本文・語釋・口語譯・考異を掲げ、別卷には關曲舞集と謡曲語句總覽とを収めてゐる。これまで出た註釋・研究書中最も完備したものである。

能樂關係書

○世阿彌十六部集 (九〇七頁別項参照)

○能樂禪竹集 一冊 吉田東伍編 大正四年

金春禪竹著の「五音次第」歌舞體圖記「六輪一露」拾玉得花「五音三曲集」至道要抄「禪竹文正應仁記」圓滿井座法式に、「一休憩頌」「桃華老人申樂後證記」「粟田口尊應准後猿記」及び禪竹の孫禪鳳著の「毛鷄私珍抄」「禪鳳習道目錄」と吉田兼持著の「能本作者註文」とを合せ、吉田博士が校註を施して刊行したもので、「世阿彌十六部集」について、貴重な研究資料である。

○音曲玉淵集 五卷 著者未詳 享保頃成

能樂の實演に關することを詳しく説いたもの。享保頃から數種の版本が出てゐる。複製本には、明治三十二年、大和田建樹校訂のものがあり、丸岡桂校訂の謡曲叢書中にも収められてゐる。

○能樂蘊奧集 六冊 木下敬賢 明治二十三年

主として能樂の裝束型附等に關することを説いたもの。大正二年にも刊行されてゐる。

○能の栞 六冊 大和田建樹 明治三十六年

第三篇 鎌倉室町時代 (謡曲)

謡曲参考書

- 能の見方謡の聞き方 一冊 池内信嘉 大正六年
  - 能樂全史 一冊 横井鶴城 大正六年・昭和五年
  - 能面大鑑 四冊 齋藤香村 大正九年
  - 能畫大鑑 四冊 月岡耕漁 大正十二年
  - 能樂盛衰記 二冊 池内信嘉 大正十四年
  - 能樂・史 佐成謙太郎 (日本風俗史講座)
  - 能の舞臺的特質 野上豊一郎 (岩波講座「日本文學」)
  - 能と曲舞との關係について 小場瀬新一 (國語と國文學昭和八ノ二)
  - 能樂の自由 能勢朝次 (文學昭和八ノ七)
  - 能樂源流表彰會展覽會出品目録 寫一冊 (早稻田大學で催した展覽會の出品目録である。)
  - 能樂圖書陳列品目録 一冊 東京音樂學校編 大正三年
  - 非専門の雜誌に載つた能樂記事 丁々書樓主人 (謡曲界十四ノ二)
  - 明治大正出版能樂書目 横山 柚人 (謡曲界三十一ノ一以下)
- 能樂關係の文獻は以上掲げたものの外にも「猿樂傳記」(燕石十種・温知叢書)、「申樂圖書」(續群書類從)、「猿樂沿革考」(燕石十種・温知叢書)その他頗る多く、一々枚舉するに違がないが、明治以後のものでは、小中村清延「歌舞音樂略史」(明治二十九年)、高野辰之氏「歌舞音曲考説」(大正四年)同「日本歌謡史」(大正十五年)などは閑却し得ないものである。なほ能樂の根本的研究資料としては、緒言解説中に挙げた諸書をも参照せられたい。

雜誌・講座

- 能樂畫報 (明治四十三年三月創刊) ○能樂 (明治三十五年七月創刊)
  - 謡曲界 (大正三年七月創刊) ○大觀世 (大正十二年一月創刊)
  - 謡曲講座 正續二十七冊(大正十五年六月創刊)
  - 古今謡曲解題 一冊 丸岡 桂 大正八年
- 丸岡氏の遺稿を安藤東庵氏が整理して出版したもの。古今の謡曲の知られる限りを網羅して、これを類別し、一々番號を附して、梗概・作者・演能古記録等を掲げ、詳細な索引を附してゐる。附録に添へた「謡本出版年譜」も頗る周到給密なものである。
- 能樂大辭典 一冊 正田章次郎・雨谷幹一 明治四十一年
  - 同 附圖 一冊 谷 洗 馬 明治四十一年
  - 謡曲ことば鑑 一冊 羽室蒼治・森本常吉 大正七年
  - 謡曲辭典 一冊 蜂谷時順 大正十二年

第三篇 鎌倉室町時代 (謡曲)



評論・研究

- 奈良土産 三卷 著者未詳 貞享四年・複製明治三十五年
- 奈良土産返答(前者の反駁書) 著者未詳 複製明治三十六年
- 謡曲物語 二冊・一冊 和田萬吉 明治四十五年・大正十二年
- 謡曲の研究 一冊 瀬尾武次郎 大正三年
- 謡曲と佛教 一冊 英 雲 外 大正六年
- 謡曲と元曲 一冊 七里重惠 大正十五年
- 謡曲と川柳 一冊 安藤支怪坊・岡田三面子 昭和五年
- B. H. Chamberlain, The Classical Poetry of the Japanese. 1880.
- K. Florenz, Geschichte der Japanischen Literatur. 1906.
- N. Péri, Etude sur le drame lyrique Japonais. 1909—1913.
- M. Stopes, Plays of Old Japan. 1913.
- E. Fenollosa and E. Pound, Noh or Accomplishment. 1916.
- A. Waley, The No Plays of Japan. 1921.
- 謡曲文の脚色について 佐々醒雪 (帝國文學十四ノ一)

- 謡曲に現れたる印度説話 鈴木暢幸 (帝國文學十四ノ四)
- 謡曲研究 野々村戒三 (日本文學講座)
- 謡曲詞章鑑賞 能勢朝次 (日本文學講座)
- 謡曲詞章研究 市川寛・能勢朝次 (國語國文の研究一以下)
- 謡曲と女性 佐成謙太郎 (國語と國文學二ノ四)
- 謡曲・狂言の本質 佐成謙太郎 (國語と國文學四ノ四)
- 謡曲文の戲曲的解釋 佐成謙太郎 (國語教育六ノ四)
- 謡曲の研究法 佐成謙太郎 (國語と國文學六ノ六)
- 謡曲の文章 佐成謙太郎 (國語と國文學七ノ四)
- 謡曲 佐成謙太郎 (岩波講座「日本文學」)
- 喜多流古寫謡本について 飯田 豊 (國語と國文學六ノ一)
- 謡曲作者考 野々村戒三 (月刊日本文學昭和六ノ六)
- 謡曲平家ものの成立史觀 三品頼直 (月刊日本文學昭和六ノ六、昭和七ノ二)
- 謡曲狂言と室町時代 安藤常次郎 (月刊日本文學昭和七ノ六)
- 謡曲の解釋に就いて 富田 旦 (國漢研究昭和七ノ十二)

○ 謡曲の夢

谷 亮 平 (歴史と國文學昭和八ノ一)

○ 謡曲作者に對する疑義

野々村 戒 三 (觀世昭和八ノ三)

○ 謡曲にあらはれた草木成佛

阪 口 玄 章 (國語と國文學昭和八ノ五)

以上列舉したものの外、「能樂」謡曲界「謡の友」などの専門雜誌には、謡曲の各方面に關する諸家の研究が毎號掲載されてゐる。なほ「謡曲界」第十四卷第二號には、大正十年頃までの非専門の諸雜誌に載つた謡曲關係の文獻目録が掲げられてゐる。

第十二 狂 言

狂言は能樂に伴なつて發達した舞臺藝術、すなはち演劇の一種で、滑稽可笑を旨としたものであるが、演劇としての狂言について記すことは本書の職とするところでないから、その起源・發達・變遷などは一切省略して、こゝにはただ文學としての狂言、すなはち狂言の詞章を解説するにとどめる。

狂言には、前後二場から成る能樂の間に挟んで演ぜられる能間、一名間狂言と、能樂の一曲の後に演ぜられるものがあるが、前者はそれぞれの能樂の附屬物に過ぎないから、ここに狂言として取扱ふのは、後者すなはちそれ自身で一つのまとまりを持つた狂言である。

能樂の詞章は謡曲といはれるが、狂言の詞章には一定の名稱がない。それぞれの家元では、漠然と傳書または六義などと稱し、江戸時代に版本が出るに及んで、狂言記と名づけたが、今日「狂言」といふ語には、

演劇としての狂言と、文學としての狂言との兩義が含まれてゐる。文學としての狂言すなはち狂言の詞章は、その性質からいへば、狂言の臺本とか、狂言の脚本とかいふべきものである。

狂言の作者については、享保六年七月大藏彌太郎虎純が、幕府へ差出した書上に、「末廣がり」以下「釣狐」に至る五十九番は玄惠法印の作、「あそふ」(麻生)以下「さつくは」(咲嘩)に至る七十八番は金春四郎次郎・宇治彌太郎二代の間の作と申傳へる由をいひ、「目近」以下「竹の子」に至る二十五番は作者不明の由をいつてゐるが、たしかな根據がなく、今日は一般に信すべからざるものとされてゐる。

狂言の詞章の古寫本は、江戸時代以前に遡るものがまだ發見されない。今日知られる限りでは、狂言の詞章がまとめて書きとめられたのは、寛永十九年に大藏流の家元、大藏彌太郎虎明が二百三番を筆録したのが最初であつて、それ以前は専ら師弟の間に口頭で傳承されたものらしい。随つてその詞章ははじめから固定してゐたものではなく、流動變化しつゝ傳はつたものと思はれる。狂言の家元は江戸時代に至つて、大藏・彌・和泉三流の對立を見るに至つたが、各流によつて詞章に可なりの差異があるのを見ても、その流動性は察せられるのである。要するに狂言の詞章は、主として狂言師の所作であらうと思はれるが、個々の作者は不明であり、また各々の原作が如何なる程度の改變を経て來たものであるかも、今日のところではこれを明かにする手がかりがないのである。

狂言の詞章がはじめて刊行されたのは、萬治三年の「繪入狂言記」(大本五冊)で、寛文二年にその再版が出、ついで寛文五年の「繪入狂言記」(半紙本二冊)、元祿十三年の「新版繪入狂言記外五十番」(半紙本五冊)が出た

が、最も廣く流布したのは元祿十二年・十三年の「繪入狂言記」(横本五冊)・「繪入續狂言記」(横本五冊)及び享保十五年の「繪入狂言記拾遺」(横本五冊)で、各五十番づつを收め、これに「外五十番」を合せて、二百番が世に行はれた。これらは普通和泉流の詞章といはれるが、實は比較的和泉流のに近いといふだけで、何れの流派のものとも異なる杜撰なものである。しかし「狂言記」以外のものは従来一般には知られて居らず、後の文藝に影響を與へたものは、主として「狂言記」のそれであるから、その點では閑却し得ないものである。

狂言の詞章は登場人物の詞を主として、往々律文を含んでゐる。詞には對話と獨白とがあつて、概ね當時の口語から成り、律文には節付のない和歌・連歌・朗詠の類から、節付のある小歌や謡曲の一節などが取られてゐる。而してそれらは皆、登場人物によつて語られ、または語られるもので、叙事的な地の文は持つてゐない。その點で狂言の詞章は純粹の脚本形式に近いものであるといへる。

狂言の材料は概ね當時の社會から取つて、童話的な性質のものが多く、その人物も謡曲におけるが如く史上に實在した人物や、傳說的に有名であつた人物よりも、誰を指すともない、無學の大名、破戒強慾の僧侶、いかもの修驗者、滑稽化された鬼畜の類を用ひることが多く、これらに配するに太郎冠者その他の相手役を以てし、専ら滑稽可笑の事件を取扱つてゐる。狂言における滑稽の種類・性質などについてもここには説かない。

狂言の構造は單純素樸で、何れも一場から成り、簡単な可笑的葛藤の後、平和圓滿に解決をつけるか、不和破綻に終るものが多く、前者は舞を舞ひ囃子を以て笑ひ納め、後者は「やるまいぞ、やるまいぞ」とか、

「すさりをらう」とかいふ臺詞で物別れになるのであるが、なほこれらの外に、落語のやうに秀句で落ちをつけたもの、可笑的な臺詞や仕草で結ぶものなどもある。

狂言の人物は主役をシテまたはオモ、相手役をアドといひ、アドが二人以上の場合には、小アド、三のアドなどの名稱を用ひるが、なほ多勢ある場合(五人・七人など奇數に限る)には立衆と呼ばれる。しかし人物の總數は多くも十人を出でず、一般に主要な役割をなすものはシテと一二のアドで、他は點景的なもの過ぎないのである。

次に「狂言記」によつて世上に知られてゐる二百番の狂言を、五十音順に掲げて、その各々の人物を記し題材となつた事件を簡單に解説し、後に狂言の諸本と参考書とをまとめて擧げることとする。

題名の下「」中に掲げるものは別名である。

◎ 餅 (あかがり) シテ、殿。アド、太郎冠者。

殿が振舞の招待を受け、太郎冠者を併に連れて行く途中、川を渡るのに、冠者はあかぎれのために水に入れぬといふ。主人冠者を負ひて渡り、冠者を水中に落すことを作る。

◎ 芥 川 (あくたがは) 「脛蓋」(すねはじかみ)参照。

◎ 惡 太 郎 (あくたらう) シテ、惡太郎。アド、伯父。小アド、僧。

酒すきの惡太郎が、酔ひつづれた間に、伯父に坊主にされ、來合はせた僧の弟子になることを作る。

◎ 惡 坊 (あくぼう) アド、僧。シテ、惡坊。

第三篇 鎌倉室町時代 (狂言)

僧が悪坊に出逢つて苦しめられたが、悪坊の寝入つた間に、その持物を取替へ、悪坊發心することを作る。

◎朝比奈 (あさひな) シテ、朝比奈三郎。アド、閻魔大王。

朝比奈が冥土へ行つて閻魔に會ひ、和田會戰の物語をし、閻魔に武器を持たせて、淨土へ案内させることを作る。

◎麻生 (あさぶ) 「烏帽子折」 シテ、麻生某。アド、藤六。小アド、源六。

麻生某が元旦の出仕に、誂へておいた烏帽子を取りにやると、使の藤六・源六は主人の宿所を忘れ、囃事をして通ることを作る。

◎合柿 (あはせがき) シテ、柿賣。アド、參詣人。立衆、參詣人。

都から宇治へ參詣に出掛けた連中が、宇治の柿賣から柿を買つて喰ひ、誂柿だといつて柿賣をいぢめることを作る。

◎粟田口 (あはだぐち) シテ、大名。アド、太郎冠者。小アド、都の者。

大名が寶篋へに出すために、粟田口の刀を冠者に求めさせると、欺偽者が出て、粟田口とは自分のことだといひ、冠者と共に大名方へ行くことを作る。

◎相合袴 (あひやひばかま) シテ、掣。アド、媒人。小アド、男。三のアド、冠者。

掣入する男が袴がなく、媒人の袴を二人ではいて、男に會ふ。男も太郎冠者と相合袴で迎へ、それぞれ連れ舞を舞ふことを作る。

◎祐善 (いうぜん) シテ、祐善の幽靈。ワキ、旅僧。アヒ、處の者。

藤曲まがひの狂言で、若狭國磯輪谷の僧が、都に上つて傘張りの祐善の幽靈を弔ふことを作る。

◎生捕鈴木 (いけどりすずき) シテ、男。

梶原平三景時に生捕られた鈴木三郎重家が、頼朝の面前で、義經の異心なきことを申開きし、頼朝に奉公せしめられることを、男一人て物語る體に作る。

◎石神 (いしがみ) シテ、夫。アド、仲人。小アド、妻。

妻が大酒呑の夫に別れようとして石神に祈つたが、夫は仲人の勸めて石神に化け、妻の離縁の望みを思ひ止まらせることを作る。

◎暇の袋 (いとまのふくろ) シテ、夫。アド、太郎冠者。小アド、妻。

夫は大酒呑の女房を去らうと思ひ、里へ行つてゐる間に、暇の袋を冠者に持たせてやると、女房は大に怒り、歸つて来て夫の頭を袋に入れることを作る。

◎因幡堂 (いなばだう) シテ、夫。アド、妻。

夫が大酒呑の女房を去り、新たに御夢想の妻を娶らうと思ひ、因幡堂に參詣して、女を得て歸り、かつぎをとらせると前の女房が現はれることを作る。

◎犬山伏 (いぬやまぶし) シテ、山伏。アド、僧。小アド、茶屋。

僧と山伏とが茶屋で出會ひ、口輪の末、互に茶屋の犬を祈り、山伏が犬に吠えつかれることを作る。

【参考】野村袋川「狂言犬山伏」(謡曲界十六ノ一)。

◎今參 (いままわり) シテ、大名。アド、太郎冠者。小アド、今參り。

大名が新参者を抱へようとして、いろいろの秀句を聞き、新参者がとんちんかんの答をすることを作る。

◎伊 文 字 (いもじ) シテ、通行の者。アド、主人。小アド、太郎冠者。女。

主人が冠者と清水觀音に通夜して妻を祈り、女に遇つたが、その住所を問うて歌で答へられ、歌を忘れて通行人に尋ねることを作る。

◎入 間 川 (いるまがは) シテ、大名。アド、太郎冠者。小アド、入間の某。

永々在京した大名が、冠者をつれて歸國の途中、入間川の邊で、入間の逆言葉を開くことを作る。

◎以 呂 波 (いろは) シテ、子。アド、父。

親が悴に手習をさせようとし、走り智恵の悴が視の口眞似することを作る。

◎鶯 (うぐひす) シテ、梅若殿の家來。アド、所の者。

梅若殿の所望で、家作が鶯をさしにゆき所の者の飼鶯をささうとして、さしそこない、太刀、刀を取られることを作る。

◎右 近 左 近 (うこんさこん) 「内沙汰(うちさた) 参照。

◎歌 相 撲 (うたすまふ) 「歌争」 シテ、平八。アド、孫一。

平八と孫一が遊山に出かけ、歌についていひ争ひ、相撲を取つて勝負をつけることを作る。

◎内 沙 汰 (うちさた) 「右近左近」 シテ、百姓右近。アド、女房。

右近は左近の牛が田の稻を食つたのを怒り、公事にしようとしたが、女房の諫で内沙汰にすることを作る。

◎鞠 猿 (うつぼざる) シテ、大名。アド、太郎冠者。小アド、猿引。子方、猿。

大名が猿引の猿を籠にかけようとしたが、猿の可憐なさまを見て許し、猿が舞を舞うて、引出物を買ふことを作る。

〔参考〕 野村袋川「猿籠に就いて」(講曲界十二ノ一)。

◎瓜 盜 人 (うりぬすびと) シテ、瓜盜人。アド、瓜畑の持主。

瓜盜人が最初案山子を見て人と思つたが、後に瓜畑の主の案山子案したのを、まことの案山子と思ひ、瓜を盗まうとして失敗することを作る。

◎魚 説 法 (うをぜつぽふ) シテ、僧。アド、旦那。

新發意の僧が旦那の供養に来て、魚の名を並べたてて説法をごまかすことを作る。

◎夷 大 黒 (えびすだいこく) シテ、大黒。アド、男。小アド、蛭子。

或男が西の宮の蛭子と比叡山の火黒とを勸請し、蛭子と大黒が一諸に来て、各由來を述べ、釣針、小槌を與へることを作る。

◎御 茶 の 水 (おちやのみづ) 「水波新發意」(みづくみしぼち) 参照。

◎鬼 瓦 (おにがはら) シテ、殿。アド、太郎冠者。

都で訴訟が叶ひ、歸國しようとした殿が、因幡堂の鬼瓦を見て、さながら國元の女房の顔ちゃといつて泣くことを作る。

◎鬼 清 水 (おにしみづ) 「清水」 シテ、太郎冠者。アド、殿。

茶の湯に用ひる清水を汲みに遣はされた冠者が、鬼が居るとして大事の手桶を捨てて歸る。主人は手桶を取りにゆくと、冠者が鬼の眞似をし、終に見顯はされることを作る。

◎鬼の繼子 (おにのままこ) 「鬼の養子」 シテ、鬼。アド、女。

子を抱いて山の彼方の親里へ行く女が、途中で鬼に遇ひ、食はれやうとしたが、鬼を欺いて、逃れることを作る。

◎鬼の養子 (おにのやうし) 前項参照。

◎音曲 聳 (おんぎよくむこ) 「吟聲」 シテ、聳。アド、男。小アド、太郎冠者。六郎兵衛。

舞入の男が六郎兵衛に弄ばれて、男への挨拶に、ふやらのふやらのふんといふ詞をつける滑稽を作る。

◎柑子 (かうじ) シテ、太郎冠者。アド、大名。

冠者が三つ生りの柑子を、一つは臍落したとて食ひ、一つは角鈎に潰れたとて啜り、残る一つも食つてしまったことが知れ、大名に叱られることを作る。

◎柑子 俵 (かうじだはら) シテ、柑子買。アド、山家の者。小アド、山家の者の子。

柑子買の買つた柑子を、賣つた家の子が惜んで、一つ食ひ、二つ食ひ、皆食つしまひ、自らその俵の中に入り、途中柑子買をおどすことを作る。

◎膏藥 煉 (かうやくねり) シテ、都の膏藥煉。アド、鎌倉の膏藥煉。

鎌倉の膏藥煉と都の膏藥煉とが道で出會ひ、腕くらべをすることを作る。

◎柿賣 (かきうり) シテ、目代。アド、柿賣。

丹波國へぐり谷の柿賣が、都の新市に一の棚を飾らうとして目代に會ひ、濃柿で失敗することを作る。

◎柿山伏 (かきやまぶし) シテ、山伏。アド、柿主。

大峯葛城をかけて下向の山伏が、柿を盗食ひし、柿主にいろいろなぶられ、祈をすることを作る。

◎隠狸 (かくしだぬき) シテ、太郎冠者。アド、主人。

狸を取つた冠者が主人にかくして、市へ行つて賣らうとし、主人は途上で酒を買つて飲ませ、舞を舞はせて狸を發見することを作る。

◎角水 (かくすゐ) 「角水聲」 シテ、聳。アド、男。小アド、太郎冠者。聳二人。娘。

ひとり娘に聲を求めると、三人の男が來、歌を詠ませられて、一人の男が合格し、娘の被衣を取らせて、その醜さに驚くことを作る。

◎隠れ笠 (かくれがさ) 「賣の笠」参照。

◎笠の下 (かさのした) 「地藏舞」 シテ、旅僧。アド、亭主。

旅僧が宿を求めたのを、亭主は所の控へて許さないのので、笠だけを預りくれと頼み、僧はその下に泊つたが、やがて僧と亭主と酒を飲み、僧が地藏舞を舞ふことを作る。

◎羯鼓 炮 礮 (かつかはうろく) 「鍋八撥」 シテ、鍋賣。アド、目代。小アド、羯鼓賣。

炮礮賣と羯鼓賣とが新市の棚を占めようとして争ふのを、目代が取做して勝負させることを作る。

◎金津地蔵 (かなつちざう) 「金津」 シテ、子。アド、田舎者。小アド、親。立衆、所の者。

田舎者が佛をもとめに都へ上ると、すつばの親が倅を地藏に仕立てて賣り、地藏が饑頭を食ひ、酒を飲んで踊ることを作る。

○金 岡 (かなをか) シテ、金岡。女、妻。

繪師の金岡が美しい上臈に思ひを懸けて浮かれ歩くのを、女房に探し出され連れ歸られ、女房の顔に彩色したが、上臈に似もやらず、愛想をつかすことを作る。

○蟹 山 伏 (かにやまぶし) シテ、山伏。アド、強力。小アド、蟹。

羽黒山の山伏が、大峯葛城かけて歸國の途中、連れの強力が蟹にはさまれて苦しむのを斬りのけることを作る。

○鐘 の 音 (かねのね) シテ、太郎冠者。アド、主人。

主人にかねのね(金の値)を聞いて来いと命ぜられた冠者が、鐘の音を聞いて歸ることを作る。

○川 上 地 藏 (かはかみちざう) シテ、盲人。アド、妻。

盲になった男が川上の地藏に願をかけ、目あきになつて歸つたのを、吝氣深い女房が苦しめることを作る。

○河 原 新 市 (かはらしんいち) シテ、男。アド、妻。立衆、所の者三人。

河原の新市に女房が酒賣りに出ると、酒呑の夫が客の邪魔をして喧嘩することを作る。

○鎌 腹 (かまばら) シテ、男。アド、隣の者。女、男の妻。

男が女房に打殺すと罵られ、山へ行つて鎌で腹を切らうとすると、女房が悲しんで詫ひ、男を背負つて歸ることを作る。

○神 鳴 (かみなり) 「針立雷」(はりたていかづち)参照。

○傘 (からかさ) 「秀句大名」(しうくだいみやう)参照。

○雁 争 (がんあらしひ) シテ、大名。アド、男。小アド、所の者。

男がつぶてて捕つた雁を、大名が射落したといつて横取しようとし、所の者の仲裁で、大名が更めてその雁を射たが、射損ずることを作る。

○雁 かりがね シテ、大和の百姓。アド、河内の百姓。小アド、奏者。

大和と河内の百姓が、領主の館に初雁の年貢を納めにゆき、雁とかりがねについて言ひ争ふことを作る。

○雁 大 名 (がんだいみやう) シテ、大名。アド、太郎冠者。小アド、鳥屋。

永々在京した大名が、歸國に當り、振舞の者に雁を得ようとして、冠者と謀り、鳥屋から鳥を盗むことを作る。

○牛 馬 (ぎうば) シテ、牛博勞。アド、目代。小アド、馬博勞。

牛馬の新市に、牛博勞と馬博勞とが一の杭を争ひ、目代が各の系圖を語らせ、牛馬の競争をさせることを作る。

○祇 圖 (ぎおん) シテ、太郎冠者。アド、男。小アド、冠者の女房。立衆、五人。

祇園會の當番に當つた男が山鉦の役人を定め、太郎冠者が太鼓持の役を當てられたのを、女房がなげくことを作る。

○不 開 座 頭 (きかずざとう) 「舞座頭」(つんぼざとう)参照。

○菊 の 花 (きくのはな) 「北野参・ぼうぼう頭」シテ、太郎冠者。アド、主人。

無断で京内詣をした冠者が、主人に、都上臈との菊花の歌の贈答、金剛草履窃盜の失敗などを物語ることを作る。

○北 野 参 (きたのまゐり) 前項参照。

○狐 塚 (きつねづか) シテ、太郎冠者。アド、主人。小アド、次郎冠者。

山田の番に遣はされた太郎冠者が、狐と思つて次郎冠者と主人を縛り、後二人に翻上げされることを作る。

○兄 弟 諱 (きやうだいいさかひ) 「舍弟」 シテ、弟。與兵衛。小アド、兄。舍弟といふのは盗人の唐名だとだまされた弟が、兄に舍弟と呼ばれて喧嘩することを作る。

○狐 釣 (きつねつり) 「こんくわい」参照。

○吟 聲 (ぎんじむこ) 「音曲聲」(おんぎよくむこ) 参照。

○禁 野 (きんや) シテ、大名。アド、所の者二人。

殺生禁制の野に毎日殺生に来る大名を、所の者二人がだまして、その弓矢を取上げ、刀、袴、小袖まで脱がせることを作る。

○茸 山 伏 (くさびらやまぶし) シテ、山伏。アド、所の者。立衆、茸。

所の者が取つても取つても生える茸に閉口して、山伏に祈禱を頼み、山伏が茸に耳を引かれ、鼻をつままれて逃げることを作る。

○鬮 罪 人 (くじさいにん) シテ、太郎冠者。アド、主人。小アド、立衆頭、立衆四人。

祇園會の當番が山の相談をし、冠者差出口をきき、主人にたしなめられ、稽古にかかつて、冠者鬼の役をし、罪人となつた主人を打擲することを作る。

○口 眞 似 聲 (くちまねむこ) シテ、聲。アド、男。小アド、太郎冠者、權六。

聲入の男が權六に欺かれて、鼻の口眞似ばかりすることを作る。

○杭 か 人 か (くひかひとか) 「人か杭か」 シテ、太郎冠者。アド、主人。

主人が臆病者の冠者に留守をいひつけ、杭の眞似して、夜廻りの冠者を騙すことを作る。

○首 引 (くびひき) シテ、鬼。アド、鎮西八郎。鬼の娘。立衆、小鬼五人。

鎮西八郎爲朝が鬼が島へ渡り、寶物をとらうとし、鬼の娘と腕押しし、腕押し、首引などすることを作る。

○鞍 馬 參 (くらままゐり) 「福渡」(ふくわたし) 参照。

○難 立 の 江 (けいりふのえ) シテ、太郎冠者。アド、主人。

主人は「難がうたふ」といひ、冠者は「難がなく」といひ、互に詩歌を引いて言ひあらしふことを作る。

○見物左衛門 (けんぶつざゑもん) シテ、見物左衛門。

見物左衛門が、加茂の鞍馬、深草祭の見物に出て、九條の古御所を見、相撲見物をするさまを一人て物語る體に作る。

○腰 祈 (このしいり) シテ、山伏。アド、祖父。小アド、冠者。

山伏が祖父の屈んだ腰を祈り直し、直しすぎて、また祈り直すことを作る。

○子 盗 人 (こぬすびと) シテ、盗人。アド、乳母。小アド、主人。

盗人が忍び込んで、財を取らうとし、乳母がひとりねかしておいた子を見つけて抱き上げ、あやすらちに見つけられることを作る。

○こんくわい (狐釣・釣狐) シテ、狐。アド、獵師。

古狐が獵師の伯父坊主白藏主に化け、狐を釣らぬやうに戒めたが、後で獵師がまた畏をかけ、狐がかかることを作る。  
〔参考〕 森田孫「釣狐の故事」(能樂四ノ八)



○昆布 賣 (こんぶうり) シテ、昆布賣。アド、男。

北野の御手水の夜、参詣の男が若狭小濱の昆布賣に遇つて、己の太刀を持たせ、昆布を賣らせられることを作る。

○昆布 柿 (こんぶがき) シテ、丹波の百姓。アド、淡路の百姓。小アド、奏者。

丹波の百姓と淡路の百姓とが、柿と昆布とを年貢に持参し、名を問はれて、兩人珍妙な長い名を申すことを作る。

○昆布 布施 (こんぶふせ) シテ、男。アド、女房。小アド、施主。長老。

年の瀬を越しかねた夫婦が寺へゆき、住職の教で僧坊主になり、三人で施主の家に行つてお布施を貰ふと、金ではなくて昆布であつたことを作る。

○賽の目 (さいのめ) 「算勘掣」(さんかんむこ) 参照。

○櫻 争 (さくらあらし) 「花争」 シテ、太郎冠者。アド、主人。

主人と冠者とが、「さくら」と「はな」とについていひ争ふことを作る。

○緋 繩 (さしなは) 「繩綱」(なはな) シテ、太郎冠者。アド、庄太夫。小アド、刑部三郎。

庄太夫が勝負事の質に冠者を刑部三郎の許へ遣はし、冠者は假病をつかつて庄太夫にかへされ、三郎の悪口をいふことを作る。

○座 禪 衾 (ざぜんぶすま) 「花子」(はなこ) 参照。

○さつくわ シテ、太郎冠者。アド、主人。小アド、さつくわ。

主人連歌の宗匠に都の伯父を頼まうとして、冠者を都に上らせると、さつくわが伯父を偽り、冠者に連れられ下つたが、

主人はさつくわを見知つてゐたのでばれることを作る。書中に「さつくわとは盗人の唐名ちや」とあり、従来「察化」(「察」は「擦過」)などの字を當ててゐるが、なほ明かでない。

○薩摩 守 (さつまのかみ) シテ、僧。アド、茶屋。小アド、船頭。

關東の僧が大阪天王寺へゆく途中、茶店で茶をただ飲みし、茶屋の主人に秀句を教はり、神崎の渡船をただのりしたが、薩摩守の事を忘れて、青海苔の引干といふことを作る。

○佐度 狐 (さどぎつね) シテ、佐渡の百姓。アド、越後の百姓。小アド、奏者。

越後の百姓と佐渡の百姓とが、地頭へ年貢を納めに行き、その歸り道に、佐渡に狐の有無について争ふことを作る。

○猿 替 勾 當 (さるかへこうたう) 「猿座頭」 シテ、座頭。アド、妻。小アド、猿曳 猿。

座頭が女房をつれて花見にゆき、酒を飲んでゐるところへ、猿曳が来て女房を誘惑し、座頭の帯に女房の代に猿をくつて置くことを作る。

○猿 座 頭 (さるざとう) 前項参照。

○算 勘 掣 (さんかんむこ) 「賽の目」 シテ、掣。アド、男。小アド、太郎冠者。掣二人。娘。

五百俱(千箇)の賽の目の数をそらで數へるものを掣に求めたのに、三人の候補者が現はれ、三人目の男が合格したが、娘の醜さに驚いて逃げるけとを作る。

○三人 片 輪 (さんにんかたは) シテ、啞。アド、主人。小アド、座頭、躰。

片輪者を抱へる者の許へ、三人のわる者が座頭・躰・啞の眞似して推かけ、主人の留守に酒を飲んで舞ひ騒ぐことを作る。

◎三人百姓 (さんになひやくしやう) 「三人夫」 シテ、美濃の百姓。アド、淡路の百姓。小アド、尾張の百姓。奏者。

淡路と尾張と美濃の百姓三人が、領主に年貢を納めにゆき、三人掛合の歌を詠み、褒美の酒をいただいて歸ることを作る。

◎三人 夫 (さんになぶ) 前項参照。

◎三本 柱 (さんぼんのしら) シテ、主人。アド、太郎冠者・次郎冠者・三郎冠者。

主人が金藏を立てるため、山から材木を運ぶのに、三人の冠者にいひつけて、三本の柱を一人で二本づつ運ばせることを作る。

◎秀句 大名 (しうくだいみやう) 「秀句傘」 シテ、大名。アド、太郎冠者。小アド、遠國の男。

大名が秀句を知った男を抱へようとして、太郎冠者を探しにやる。冠者遠國の男をつれて來り、その男傘について秀句をいひ、大名は袴や小袖をぬぎ與へて、傘の小歌を唄ひ、秀句といふものは寒いものぢやといふのを落にしてゐる。

◎秀句 傘 (しうくがらかさ) 前項参照。

◎鹿 狩 (ししがり) シテ、左近の三郎。アド、僧。

左近の三郎といふ狩人が僧と問答してやり込めることを作る。

◎磁石 (じしゃく) シテ、遠江の者。アド、人賣。小アド、宿主。

遠江の者が近江坂本の市で人賣と相宿をし、人賣と亭主との話を聞いて、逃げ出したのを、人賣に追付かれ、磁石の精

だと名乗つて厄をのがれることを作る。

◎二千石 (じせんせき) シテ、大名。アド、太郎冠者。

冠者が無断で京内詣をし、謠を習つて歸り、二千石の松にこそ云々と謠ふのを聞いて、大名は、その謠を曾祖父が謠つたものだといひ、冠者を責め、手討にしようとしたが、冠者の應答で怒がとけることを作る。

◎七騎落 (しちきおち) シテ、男一人。

源頼朝が石橋山で敗れ、船に乗つて土肥眞平その他七騎で落ちてゆくことを、男一人で物語る體に作る。

◎止動方角 (しどうはうかく) シテ、太郎冠者。アド、主人。小アド、伯父。馬。

茶の湯の會に出かけるため、伯父から借りた馬に乗った主人が、落馬して、太郎冠者を馬にのせ、己は供についてゆき、冠者が主人を召使扱ひすることを作る。

◎痺 (しびり) シテ、太郎冠者。アド、主人。

淀の鯉を買ひに行けと命ぜられ、假病をつかつてゆかない冠者が、振舞に行かうといはれて、すぐなほることを作る。

◎清水 (しみづ) 「鬼清水」参照。

◎舎弟 (しゃてい) 「兄弟諍」参照。

◎宗論 (しゅうろん) シテ、浄土僧。アド、法華僧。小アド、宿屋。

本國寺の僧が、身延參詣の下向道で、黒谷の僧が、善光寺から歸るのに遇ひ、同宿して、法華と浄土の法論をすることを作る。

◎柱 杖(しゅちやう) シテ、旅僧。アド、柱杖屋。小アド、女房。

柱杖を誂へておいた旅僧が、柱杖屋を弟子にして髪を剃り、女房が怒ることを作る。

◎心 奪(しんばひ)〔真奪〕 シテ、太郎冠者。アド、主人。小アド、山の者。

主人と冠者が東山へ花のしんを取りにゆき、東山の男が見事なしんを持つてゐるのに遇つて、掠奪することを作る。

◎素 襖 落(すあうおとし) シテ、太郎冠者。アド、主人。小アド、伯父。

主人から伯父に参宮の知らせを命ぜられた冠者が、先方で酒を祝はれ、素襖をもらつて歸り、素襖を落して主人に拾は

れることを作る。

◎雙 六 僧(すごろくそう) シテ、雙六僧の幽霊。アド、僧。アヒ、所の者。

謡曲まがひの狂言で、旅僧が、雙六の事で相手と切死した僧の幽霊に逢ひ。これを弔ふことを作る。

◎鱧 庖 丁(すずきばうちやう) シテ、伯父。アド、甥。

淀の邊に住む男が、伯父に頼まれた鱧を持参せずにいひわけすると、伯父はその誠の返報として、甥に對し、口さきだ

けていろいろの御馳走をならべたり、御馳走の由来を説いたりして、追ひかへすことを作る。

◎腰 臺(すねはじかみ)〔芥川〕 シテ、片手の男。アド、ちんばの男。

芥川の天神に参詣する下京の生薑(てんぼう)と、上京のちんばとが、みちみち歌を詠んで、互に相手の惡口をいふこと

を作る。

◎酢 薑(すはじかみ) シテ、酢賣。アド、薑賣。

山城の薑賣と和泉の酢賣とが、途で出會つて、互にその系圖を語り、秀句を吐くことを作る。

◎墨 塗 女(すみぬりをんな)〔墨塗〕 シテ、大名。アド、太郎冠者。小アド、女。

永々在京した大名が、歸國に當つて、契を交した女に別れをつけると、女は顔に水を塗つて泣くまねし、冠者が水を盥

と取代へておいたの知らずに、まつ黒に墨を塗ることを作る。

◎水 論 聲(すゐろんむこ)〔水掛聲〕 シテ、聲。アド、舅。小アド、女。

聲と舅が、めいめいの田へ水を引くために喧嘩することを作る。

◎末 廣 が り(すゑひろがり) シテ、大名。アド、太郎冠者。小アド、末廣賣。

扇を買ふことを命ぜられた冠者が、都へ上つて、欺偽に會ひ、古傘を買はされて歸ることを作る。

◎政 賴(せいらい)〔餌差十王(ゑさしじふわう)参照〕

◎節 分(せつぶん) シテ、鬼。アド、女。

夫が出雲大社へ年籠に行つたあとに、蓬萊の島の鬼が来て、女房を驚かせたが、疲れて寝た間に、女房が豆をまいて追

拂ふことを作る。

◎煎 じ 物(せんじものうり)〔煎じ物〕 シテ、煎じ物賣。アド、當番の男。小アド、太郎冠者。

立案、五人。

祇園會の當番の家で、立案等が囃子物の稽古をしてゐるところへ、茶賣が来て、煎じ物召せといふことを作る。

◎惣 八(そうはち)〔宗八〕〔俄道心〕参照。

◎大 般 若 (だいはんにや) シテ、僧。アド、神子。小アド、旦那。

檀家に出家が来て、祈禱をし、大般若を讀むところへ、神子がお籠の殿に来て、神樂を奏することをやる。「狂言記」本は詞章極めて簡單である。

◎寶 の 笠 (たからのかさ) 「隠れ笠」 シテ、太郎冠者。アド、主人。小アド、寶屋。

冠者が寶鏡に出す寶物を求めにやられ、都に上つて欺偽者に、ただの笠を鬼が鳥の隠れ笠だと騙されて買つて歸り、失敗することをやる。

◎唐人 相撲 (たうじんすまふ) 「唐相撲」 シテ、唐帝。アド、日本の相撲。小アド、通詞。立衆、唐人。

日本の相撲取が唐土から歸朝しようとする時、唐帝と相撲をとつて勝つことをやる。

◎寶 の 槌 (たからのつち) シテ、太郎冠者。アド、主人。小アド、すり。

寶物を求めに都へ遣はされた太郎冠者が、すりに打出の小槌を賣りつけられ、主人の前に馬を打出さうとして失敗することをやる。

◎竹 の 子 争 (たけのこあそび) 「竹の子」 シテ、藪主。アド、百姓。小アド、扱人。

百姓が畑に出た竹の子を折つたので、畑の隣の藪の主と喧嘩になつたのを、扱人が出て仲裁し、和歌や相撲の勝負をさせることをやる。

◎蛸 (たこ) シテ、蛸の幽霊。ワキ、旅僧。アヒ、所の者。

謡曲まがひの狂言で、筑紫の僧が清水の浦で蛸の幽霊にあひ、それを弔ふことをやる。

◎大 刀 奪 (たちばひ) シテ、太郎冠者。アド、主人。小アド、通行人。

北野の縁日に参詣した主人と冠者とが、途に出會つた男の太刀を取らうとして失敗することをやる。

◎梅 聲 (たるむこ) シテ、掣。アド、舅。小アド、太郎冠者。清六。

掣入をする男が、掣権を持たせた清六と、舅の出した引出物を争ふことをやる。

◎乳 切 木 (ちぎりき) シテ、太郎。アド、主人。小アド、太郎冠者。女、太郎の妻。立衆、客

三人。

伊勢講に押しかけて行つた太郎が、客に嫌はれて踏みつけられ、女房と共に仇打に出かけたが、皆留守なので、謠をうたつて歸ることをやる。

◎竹 生 鳥 詣 (ちくぶしままうで) シテ、太郎冠者。アド、主人。

無断で竹生鳥詣をした冠者が、主人に叱られて、その物語をし、種々の秀句をいつた擧句、くちなはの秀句でしくじることをやる。

◎地 藏 舞 (ちざらまひ) 「笠の下」 参照。

◎千 鳥 (ちどり) 「對鳥祭」 参照。

◎茶 盞 拜 (ちやさんはい) 「茶盞拜」 シテ、唐人茶盞拜。アド、妻。小アド、教手。

唐人を夫に持った女が、男のよまひ首に腹を立てることをやる。

◎茶 壺(ちやつぼ) シテ、すり。アド、田舎者。小アド、目代。

茶壺を負うて、梅の尾へ茶を取りに行く田舎者が、途中酒に酔って寝込んでゐる間に、すりとその茶壺を奪はうとしたのを、目代が出て、曲舞、連歌などをさせて裁断することを作る。

◎通 圓(つうゑん) シテ、通圓の靈。ワキ、旅僧。アヒ、所の者。

坂東の旅僧が、宇治の里の茶屋坊主通圓の幽霊を弔ふことを作る。

◎對 島 祭(つしままつり) 「千鳥」 シテ、太郎冠者。アド、主人。酒屋。小アド、酒屋。

冠者が主人の命で、借のある酒屋に酒を取りに行き、對馬祭の話にかこつけて、酒樽を盗み出さうとすることを作る。

◎苞 山 伏(つとやまぶし) シテ、山伏。アド、山人。小アド、侍。

侍が樹蔭で寝入つてゐた柴刈男の糞食を盗み食ひして、側にねてゐた山伏の口のはたに飯をなすりつけておいたので、眼をさまして口論することを作る。

◎釣 狐(つりぎつね) 「こんくわい」参照。

◎釣 女(つりをんな) 「釣針」 シテ、太郎冠者。アド、主人。女、上臈。下女。

主人が西の宮のえびすに妻を申受けようとして、冠者をつれて参詣し、西門の一の階で上臈と下女とを釣ることを作る。

◎釣 針(つりばり) 前項参照。

◎聾 座 頭(つんぼざとう) 「不聞座頭」 シテ、つんぼ。アド、座頭。小アド、主人。

つんぼの冠者と、座頭とが留守をして、互にいたづらをし、果ては喧嘩になることを作る。

◎手 負 山 賊(ておひやまだち) シテ、山賊。アド、旅僧。女、山賊の妻。

東國の僧が、美濃國赤坂で山賊に遭ひ、これを欺いて刺刀で傷を負はせ、圖らずその家に宿を借りて、山賊夫婦に追はれることを作る。

◎手 車(てぐるま) 「鈍太郎」 シテ、鈍太郎。アド、上京の女。小アド、下京の女。

久しく田舎にゐた鈍太郎が、都にかへつて、上京の本妻にも、下京の若い馴染にも、別に男を持つたと告げられて、出家しようとし、女どもの手車に乗せられることを作る。

◎鈍 根 草(どこんさう) シテ、太郎冠者。アド、主人。

主人と冠者とが鞍馬に通夜し、重箱の中の葎を食つた主人は忘れ物をし、茗荷を食つた冠者が拾ひ物をする ことを作る。

◎東 西 離(どちはぐれ) シテ、僧。

小庵の住僧が、十疋の布施と常齋と、どつちに行かうかと迷つて、結局兩方ともだめになることを作る。「狂言記」所載のものは一人で物語る體にしてゐるが、「狂言集成」本のは、住持に所の者二人を配して脚色してゐる。

◎飛 越 新 發 意(とびこえしぼち) 「飛越」 シテ、新發意。アド、所の者。

新發意が所の者に連れられて、茶の湯の稽古にゆく途中、溝川を飛びそこね、笑はれて、相撲をとることを作る。

◎井 碯(どぶかつちり) シテ、勾當。アド、菊一。小アド、通行人。

饅頭へ参る句當と供の菊一とが、途中川を渡るのを、通りかかった者がいたずらづることを作る。

◎吃 (どもり) シテ、夫。アド、扱人。女、妻。

女房が夫の甲斐性なしに腹を立てて、いひ争ひ、嫁入道具などを返せといひ、吃の夫は、謠曲で辯疏することを作る。

◎鈍 太 郎 (どんたらう) 「手車」参照。

◎長 光 (ながみつ) シテ、すり。アド、田舎者。小アド、目代。

田舎者が國への土産物を買ふために町をあるいてゐるところへ、すりが出て田舎者の太刀を奪はうとしたのを、目代が来て両方の言分を聞き、すりが返答につまづて失敗することを作る。

◎泣 尼 (なきあま) シテ、僧。アド、施主。尼。

田舎の百姓に親の三年忌に招かれた僧が、泣尼を供につれてゆくと、尼は談議の席で居眠して、布施を半分ねだることを作る。

◎那 須 與 一 (なすのよいち) シテ、一人。

那須與一宗高が扇の的を射ることを、男一人にて物語る體に作る。

◎名 取 川 (なとりがは) シテ、僧。アド、何某。

遠國の僧が、都へ上つて受戒し、名をつけてもらつたが、名取川にさしかかつて、忘れたその名を、所の某に會つて思ひ出すことを作る。

◎繩 掬 (なはなひ) 「緋繩」(さしなは) 参照。

◎鍋 八 撥 (なべやつぱち) 「羯鼓砲磔」(かつこはうるく) 参照。

◎腰 物 (なまぐさのもの) シテ、太郎冠者。アド、主人。

黄金作の太刀を伯父へ返すのに、途中が不用心だからとて腰物の如くよそはせて冠者に持たせてやつた主人が、途中で冠者から太刀を奪取る。冠者は歸つて、追判四五十人に取込められたと嘘をいふことを作る。

◎成 上 者 (なりあがりもの) シテ、太郎冠者。アド、主人。小アド、盗人。

冠者が主人と共に清水の観音に通夜し、居眠して太刀を杖とすり換へられ、いひわけになりあがるものを並べたてるところを作る。

◎二 九 十 八 (にくじふはち) シテ、男。アド、女。

清水観音に妻を祈請した男が、御夢想の女に會つたと思つて、その女の家に出かけ、女に逃げられることを作る。

◎荷 文 (になひぶみ) 「文荷」 シテ、太郎冠者。アド、次郎冠者。小アド、主人。

主人に託された文を、冠者が二人で携へ行き、途中でそれを開いて引裂くことを作る。

◎二 人 大 名 (ににんだいみやう) シテ、左京。アド、右京。小アド、下京の者。

左京と右京とが、北野参の途中に逢つた下京の男に、供をさせようとして太刀を持たせ、却つて愚弄されることを作る。

◎俄 道 心 (にはかどうしん) 「惣八・宗八」 シテ、男。アド、坊主。小アド、主人。

料理人と出家とを抱へようとする家に、堅田の獵師であつた男が坊主になり、出家であつた男が還俗して料理人になつ

て抱へられようとし、失敗することを作る。

◎雞 鴛 (にはとりむこ) シテ、鴛。アド、男。小アド、冠者。

舞入の男が、舅の家へ行つて雞の眞似をし、舅もこれに倣ふことを作る。

◎二 王 (にわう) シテ、男。アド、甚兵衛。所の者二人。参詣人二人。

不仕合せつづきで窮迫した男が、甚兵衛の入智恵で、山の上に二王と現はれて、賽銭を取り、参詣人に見あらはされることを作る。

◎拔 穀 (ぬけがら) シテ、太郎冠者。アド、主人。

主人の情人の許へ使を言ひつかつた冠者が、酒を飲みたさに屢々歸つた揚句、酔つて途中にねてしまひ、主人に鬼の面をかぶせられることを作る。

◎塗 師 (ぬし) 次項参照。

◎塗 師 平 六 (ぬしへいろく) [塗師] シテ、平六。女、妻。アド、師匠。

都の塗師が商賈がはやらす、越前北の莊に住む弟子平六を訪ねてゆくと、平六の女房は夫が死亡したといひ、平六が幽霊のふりをして、師匠に會ふことを作る。

◎塗 附 (ぬりつけ) 「早津」参照。

◎寝 音 曲 (ねおんぎよく) 次項参照。

◎寝 聲 (ねこゑ) [寝音曲] シテ、太郎冠者。アド、主人。

無断で京内詣した冠者が、主人に都の様子をきかれ、小説を習つて来た由をいつて、これを讀み、酔ひ臥して主人に叱

れることを作る。

◎彌 宜 山 伏 (ねぎやまぶし) シテ、山伏。アド、彌宜。小アド、茶屋。大黒。

出羽の山伏と伊勢の彌宜とが、茶屋で口論し、互に茶屋の大黒を祈つて、山伏が負けることを作る。

◎庖 刀 聲 (はうちやうむこ) 「料理聲」参照。

◎萩 大 名 (はぎだいみやう) シテ、大名。アド、太郎冠者。小アド、亭主。

大名が冠者をつれて、下京の庭好きの家へ遊びにゆき、冠者に教へられた歌の末を忘れて、亭主に怒られることを作る。

◎伯 養 (はくやう) 「伯陽」 「琵琶借座頭」参照。

◎八 句 連 歌 (はちくれんが) シテ、九郎次郎。アド、庄右衛門。

米錢の借がある九郎次郎が、貸主庄右衛門の家へつれて行かれ、連歌のお蔭で借状を返されることを作る。

◎花 争 (はなあらそひ) 「櫻争」参照。

◎花 子 (はなご) [座禪衾] シテ、主人。アド、太郎冠者。小アド、女。

座禪をするといつて妻を欺き、冠者を身がはりにして、情人の花子の許へ行つた男が、歸つて見ると、妻が冠者のふりをして座禪をして居り、男の詭計がばれることを作る。

◎鼻 取 相 撲 (はなとりすまふ) シテ、大名。アド、太郎冠者。小アド、坂東の者。

大名が新座者を抱へようとして、坂東者と相撲を取り鼻を叩かれて負けることを作る。

○花 折（はなをり） シテ、新發意。アド、住持。立案、花見の者三人。

住持の留守に、新發意が花見の者に酒を飲まされて酔ひ、大事の花を折つてやり、住持に叱られることを作る。

○早 漆（はやうるし）〔塗附〕 シテ、塗師。アド、男。小アド、連れもの者。

歳暮の禮に出かけた二人の男が、塗師に逢つて、着たまま烏帽子に早漆を塗らせ、二人が續ちつくことを作る。

○腹 不立（はらたてず） シテ、僧。アド、庄屋。小アド、月行事。

空寺に住職を据ゑようとして、庄屋と月行事とが通りがかりの僧を呼びとめ、名を問へば、腹立てずと答へたが、二人がうるさく問うて、腹を立てさせることを作る。

○張 蛸（はりだこ） シテ、大名。アド、太郎冠者。小アド、すつば。

一門の振舞に使ふ蛸蛸を買ひに都に遣はされた冠者が、すつばに騙されて、張太鼓を買つて來ることを作る。

○針 立雷（はりたていかづち）〔神鳴〕 シテ、雷。アド、醫者。

都の醫者が東國へ嫁ぎにゆき、武藏野に落ちた雷に、療治を頼まれて、針を立て、ほめられることを作る。

○比 丘 貞（びくさだ） シテ、尼。アド、親。小アド、子。

親が子に名をつけてもらふために尼の許へゆき、酒を祝つて、子も尼も舞ふことを作る。

○人 馬（ひとうま） シテ、大名。アド、太郎冠者。小アド、東國の者。

大名が新座の東國者を抱へようとし、その者の人を馬にする藝を見ることを作る。

○桶 の 酒（ひのさけ） シテ、太郎冠者。アド、主人。小アド、次郎冠者。

主人の留守に二人の冠者が、桶を作つて酒を盗み飲み、叱られることを作る。

○琵琶借座頭（びはかりざとう）〔伯養・伯陽〕 シテ、勾當。アド、伯養。小アド、琵琶の主。

檢校の弟子伯養が、師匠のために琵琶を借りに行つたところへ、勾當も借りにゆき、勝つた方に貸すといはれて、互に歌を詠み、相撲をとることを作る。

○糶 糊（ひめのり） シテ、殿。アド、太郎冠者。

冠者が紺屋へ肩衣を取りにゆき、ひめのりがなくてまだ出来ぬといはれて歸つたが、ひめのりを忘れてそれを思ひ出すために、殿に平家物語を讀んでもらふことを作る。

○武 惡（ぶあく） シテ、太郎冠者。アド、主人。小アド、武惡。

主人に武惡を討取りにやられた冠者が、武惡をたすけてやり、後、清水で武惡が主人に遇ふと、兩堂だといつて欺くことを作る。

○福 の 神（ふくのかみ） シテ、福の神。アド、利兵衛。小アド、八兵衛。

利兵衛と八兵衛とが、大歳に出雲大社へ參ると、福の神が現はれて、富貴になる法を告げることを作る。

○梟 （ふくろ） 次項参照。

○梟 山 伏（ふくろやまぶし）〔梟〕 シテ、山伏。アド、兄。小アド、弟。

弟が梟に取りつかれて山伏を頼んだが、兄もとりつかれ、しまひに山伏もとりつかれることを作る。

○福 渡（ふくわたし）〔鞍馬參〕 シテ、太郎冠者。アド、主人。



主人と冠者とが鞍馬に通夜し、冠者が夢に福を賜はつたのを、主人が自分に渡せとせがむことを作る。

◎富士松 (ふじまつ) シテ、太郎冠者。アド、大名。  
無断で富士禪定に行つた冠者を、大名が折檻しようとしたが、富士松を所望し、冠者は富士の様子をいろいろ物語ることを作る。

◎附子 (ぶす) シテ、太郎冠者。アド、主人。小アド、次郎冠者。

太郎冠者と次郎冠者とが、主人の戒しめておいた毒物を砂糖と知つて、留守に皆なめしまひ、懸物天目などを壊して、お詫のために毒死しようとしたといひのがれすることを作る。

◎布施ない (ふせない) 「布施無經」 シテ、住職。アド、施主。

坊主が檀家におつとめに行き、布施を忘れられて、いろいろ謎をかけることを作る。

◎布施無經 (ふせないきやう) 前項参照。

◎佛師 (ぶつし) シテ、佛師。アド、田舎者。

佛を買ひに都へ出た田舎者を、不正直な佛師が、佛の面をかぶつて騙すことを作る。

◎舟な (ふねふな) シテ、太郎冠者。アド、大名。

大名と冠者とが西の宮へ遊山にゆき、神崎の渡で、「ふね」と、ふなとに闘して、互に古歌をひいていひ争ふことを作る。

◎文相撲 (ふみずまふ) シテ、大名。アド、太郎冠者。小アド、新座者。

大名が新座の奉公人を抱へようとして、その者と相撲をとり、負けて、伯父からもらった相撲の本を見、とり直しをする。

ることを作る。

◎文荷 (ふみにひ) 「荷文」参照。

◎文山賊 (ふみやまだち) シテ、山賊。アド、同。

長兵衛・源太夫の二人の山賊が喧嘩して、各死ぬ前に書置を書かうとしたが、死ぬのがいやになり、伸直りして歸ることを作る。

◎文藏 (ぶんざう) シテ、主人。アド、太郎冠者。

冠者が臺所でうまいものを食べたが、名を忘れ、主人にいろいろ食物の名をいはせた末、「盛衰記」を読むのを見て、漸く思ひ出すことを作る。

◎法師が母 (ほうしがはは) 「法師物狂」参照。

◎縛縛 (ばうしばり) シテ、太郎冠者。アド、主人。小アド、次郎冠者。

主人が二人の冠者を縛縛にして外出したあとで、二人は縛られたまま、酒を飲み、語り舞ふことを作る。

◎法師物狂 (ほうしものぐるひ) シテ、夫。アド、女房。小アド、媒人。

亭主が酒に酔うて、女房を追出したが、酔が醒めて媒人に逢ひ、女房をつれ戻して來ることを作る。

◎ほうぼう頭 「菊の花」参照。

◎骨皮新發意 (ほねかはしぼち) 「骨皮」 シテ、新發意。アド、住持。小アド、旦那三人。

住持が隠居して新發意に寺を持たせたところへ、旦那三人、一人は傘を借り、一人は馬を借り、一人は齋の招きに

来ると、新發意は住持のいひつけと皆違つた返答をして歸し、住持と喧嘩することを作る。

◎盆 山 (ぼんさん) シテ、源藏。アド、權兵衛。

盆山を盗みに入つた源藏が、持主の權兵衛に見つけられ、犬・鳥・猿・蜘蛛などの啼き聲をすることを作る。

◎枕 物 狂 (まくらものぐるひ) シテ、祖父。アド、孫。小アド、孫。乙。

二人の孫が祖父の戀を心配して、相手の女を連れてくることを作る。

◎松 の 精 (まつノせい) 「松脂」 シテ、松の精、アド、主人。小アド、太郎冠者。立衆、所の者。

松拍子の當番が、所の者と囃子の相談をするところへ、松の精が現はれて、くすねを煉ることを作る。

◎松 脂 (まつやに) 前項参照。

◎松 樨 (まつゆづりは) シテ、丹波の百姓。アド、北山の百姓。小アド、奏者。

北山の百姓は門松を、丹波の百姓は樨を、それぞれ歳暮の祝儀として領主に持参することを作る。

◎鞠 蹴 座 頭 (まりけざとう) シテ、檢校。アド、菊一。小アド、檢校。座頭。使の者。

檢校、座頭どもが寄合ひ、鞠に鈴をつけて蹴鞠をして遊ぶところへ、使の者が来ていたづらすることを作る。

◎饅 頭 食 (まんぢゅうくひ) シテ、饅頭賣。アド、田舎者。

都の饅頭賣が、田舎者にだまされて、賣物の饅頭を皆自分で食つてしまふことを作る。

◎箕 被 (みかづき) シテ、夫。アド、妻。

連歌の會の當番に當つた男が、女房に來客の用意をいひつけると、女房は怒つて、箕を被つて出て行かうとしたが、男

はそれを發句に詠み、女房が恥をつけて、めてたく納まることを作る。

◎水 掛 聖 (みづかけむこ) 「水論聖」(すゐろんむこ)参照。

◎水 汲 新 發 意 (みづくみしほち) 「お茶の水」 シテ、新發意。アド、住持。小アド、女。

住持が新發意にお茶の水を汲ませようとしたが、きかないので、門前の女を汲みにやると、新發意は女に會ひにゆき、様子を見に來た住持を打こかして二人が逃げることを作る。

◎土 産 の 鏡 (みやげのかがみ) シテ、男。アド、女。

京より越後へ歸る男が、女房に鏡をみやげに買つて行くと、女房は鏡に映る姿を他の女と思つて嫉妬することを作る。

◎胸 突 (むねつき) シテ、七兵衛。アド、八兵衛。

米錢の借がある七兵衛が、貸主八兵衛に催促されて、いひがかりをつけて借を免された上に、仕返ししようとするこ

を作る。

◎目 近 (めぢか) ◎目 近 米 骨 (めぢかこめぼね) 次項参照。

◎目 近 大 名 (めぢかだいみやう) 「目近・目近米骨」 シテ、大名。アド、太郎冠者。小アド、次

郎冠者。同、目近賣。

大名から目近籠骨を買つて來いと命ぜられた太郎冠者と次郎冠者とが、都に上り惡者にだまされて、ただの扇と米とを

買つて來ることを作る。

◎餅 酒 (もちざけ) シテ、加賀の百姓。アド、越前の百姓。小アド、奏者。

越前の百姓と加賀の百姓とが、それぞれ圓餅と菊酒とを年貢に持参し、和歌をあげて歸ることを作る。

○實 聲 (もらひむこ) シテ、聲。アド、女。小アド、男。

酒飲の夫にあきれて、女房が里へ歸つたのを、男が追つて來、男に會つていろいろ頼み、子供のことを話すのを聞いて、かくれてゐた女房が夫に負はれて歸ることを作る。

○柳 樽 (やなぎだる) シテ、太郎冠者。アド、主人。小アド、庄介。

主人が柳樽を買つて、酒の相手に庄介を呼び、冠者に挨拶の仕方を教へると、冠者は主人の口真似をすることを作る。

○八幡の 前 (やはたのまへ) 次項参照。

○八幡 聲 (やはたむこ) 「八幡の前」 シテ、聲。アド、男。小アド、太郎冠者。教へ手。

八幡の在所の者が一人娘に一藝ある聲を求め、聲にならうとする男が、弓を射そこなひ、歌を言ひそこなつて追ひ出されることを作る。

○八尾地蔵 (やをぢざう) シテ、鬼。アド、亡者。

亡者が河内八尾地蔵の文を持つて冥土へゆき、閻魔王がこれを見て亡者を九品淨土へ送りとどけることを作る。

○横 座 (よこざ) シテ、伯樂。アド、何某。牛。

横座といふ牛を盗まれた伯樂が、その牛の買ひ手から取り返すことを作る。

○米 市 (よねいち) シテ、男。アド、何某。小アド、所の者。立案。

何某から大晦に米俵と古小袖とを買つた男が、それを負つて歸る途中、所の者に人と見とがめられ、依藤太のお姫御、

米市御寮人のお里歸りちや」といつたが、終に見露はされることを作る。

○鍧 (よろひ) 「鍧腹巻」 シテ、太郎冠者。アド、主人。小アド、悪者。

冠者が、道具鍧に出す鍧を求めに都に遣はされて、悪者に逢ひ、鍧とだまされて鍧の書き物を買つて歸ることを作る。

○鍧 腹 卷 (よろひはらまき) 前項参照。

○老 武 者 (らうむしや) シテ、祖父。稚子。三位。アド、宿屋の亭主。若立案。祖父立案。

三位と稚兒が相模藤澤に宿をとり、土地の若い衆と老武者だちとが、稚兒の盃を所望して争ふことを作る。

○樂 阿 彌 (らくあみ) シテ、樂阿彌の靈。ワキ、旅僧。アヒ、所の者。

東國の旅僧が、伊勢國別保の松原で、尺八吹樂阿彌の幽靈に逢ふことを作る。謡曲まがひの狂言である。

○料 理 聲 (れうりむこ) 「庖刀聲」 シテ、聲。アド、太郎冠者。小アド、男。教へ手。女。

聲が聲入の作法にと相撲の書を與へられ、身に庖刀の手許を望まれて、相撲を取ることが作る。

○連歌毘沙門 (れんがびしゃもん) シテ、毘沙門。アド、男。小アド、男。

男二人鞍馬の多聞天に年籠して、貰つた福について争ふところへ、多聞天が出て仲裁し、二人の連歌を聞いて、矛や兜を與へることを作る。

○遣 尺 (れんじやく) 「連雀」 シテ、商人。アド、目代。女、酒賣。

新市の一の堀を占めようとして、酒賣の女と商人とが争ふところへ、目代が出て、二人に腕押、腰押、相撲などの勝負をさせることを作る。

◎六 地 藏 (ろくぢざう) シテ、すつば。アド、田舎者。小アド、すつば。ツレ、同。田舎者が六地藏を作るために都へ上ると、すつばが眞佛師と稱して、仲間二人に地藏の姿をさせ、田舎者をだまさうとしたが、終に見あらはされることを作る。

◎六 人 僧 (ろくにんざう) シテ、参詣人。アド、同。小アド、同。女三人。三人の男が佛詣にゆく途中、一人の男がくたびれて眠つたのを坊主になると、その男は、他の二人の女房を坊主にし、終に男女六人とも坊主になることを作る。

◎路 蓮 坊 主 (ろれんぼうず) シテ、僧。アド、亭主。小アド、妻。亭主が宿を借らうとした坊主の弟子になつて髪を剃つて貰ひ、女房が大いに立腹することを作る。

◎若 市 (わかいち) シテ、若市。アド、住持。小アド、旦那。立衆、尼。若市が寺の花を盗んだといつて住持に打擲され、尼共を語らつて仕返しにゆくことを作る。

◎居 杭 (ゐぐひ) シテ、居杭。アド、何某。小アド、算置き。居杭といふ者が、清水の観音に祈警して、隠形の頭巾を得、お出入の家に行つて妻をかくしたところへ、占者が来て算を置いたが、所在が知れず、占者が困らされることを作る。

◎餌 差 十 王 (ゑさしじふわう) 「政頼」シテ、政頼。アド、十王。立衆、鬼。政頼(清頼)といふ餌差が、死出の山の鳥をさして閻魔王に與へたために、また娑婆へ歸ることを作る。

◎烏 帽 子 折 (ゑぼしをり) 「麻生」参照。

◎岡 太 夫 (をかだいふ) シテ、舞。アド、男。小アド、太郎冠者。女。舞が男の許へ行つて蕨餅を馳走になり、歸つて女房にそれを所望したが、その名を忘れて、女房が朗詠を讀むのを聞いて思ひ出すことを作る。

◎伯 母 が 酒 (をばがさけ) シテ、甥。アド、伯母。毎年酒屋の伯母の許へ初酒を飲みゆく甥が、今年は初酒も二番酒も騒はられたので、鬼の面を被り、伯母を嚇して酒を飲むことを作る。

◎女 山 賊 (をんなやまだち) シテ、山賊。アド、女。山賊が山越をする女から物を奪はうとして、却つて女に長刀をとられ逃げ失せることを作る。

諸本

古寫本

○大藏彌右門虎明傳書 大本八冊(大藏流) 寛永十九年寫

諸言に述べた通り、これが現在知られてゐる最古の寫本であつて、狂言の古形を存し、最も信頼すべき正本として、貴重な研究資料たるべきものである。

○鶯傳右衛門保教傳書 大本十五冊(鶯流) 正徳頃寫

○波 形 本 大本十五冊(和泉流) 江戸末期寫

第三篇 鎌倉室町時代 (狂言)

狂言諸本

九〇〇

和泉流狂言師早川孝八家が傳へたもので、表紙に波形の模様があるために波形本と呼ばれる。和泉流狂言二百五十二番を収めてゐる。

○雲形本「狂言六議」半紙本二十冊(和泉流) 江戸末期寫

表紙に雲形の模様があるので、かく呼ばれる。所收狂言二百番、本文は山陰六代和泉元貞の改訂を経たものといふ。

古版本

○繪入狂言記

大本五冊

萬治三年・再版寛文二年

○繪入狂言記

半紙本二冊

寛文五年

○繪入狂言記

横本五冊

元祿十二年

○繪入續狂言記

横本五冊

元祿十三年

○繪入狂言記拾遺

横本五冊

享保十五年

○新版繪入狂言記外五十番

半紙本五冊

元祿十三年

右のうち横本の狂言記・續狂言記・狂言記拾遺は最も廣く行はれて、嘉永元年まで數回版を重ね、明治初年にも六冊に改めて刊行したものがあつた。

活版本

○狂言全集(附大藏流)三冊 幸田露伴編

明治三十六年

○和泉流狂言大成 四冊

山脇和泉編

大正六・七・八年

○新撰狂言集(和泉流)二冊

野村萬齋編

昭和四年

○狂言集成(和泉流)二冊

野々村 戒三編

昭和六年

○名著文庫「狂言五十番(鶯流)」一冊

○國民文庫「狂言全集」(附鶯流) 一冊

○謠・曲文庫狂言編(鶯流) 一冊

○日本文學大系「狂言記」二冊

○有朋堂文庫「狂言記」二冊

關係書

○習道書 一卷

世阿彌

永享二年成 (世阿彌十六部集)

○わらんべぐさ

大藏虎明

萬治三年成

○狂言書上

大藏虎純

享保六年成

○猿樂傳記 二卷

著者未詳

元文頃成

(燕石十種・温知叢書)

○猿樂沿革考 一卷

川崎重恭

(燕石十種・温知叢書)

○狂言不審紙

大藏虎光

文政六年成

註釋書・研究書

第三篇 鎌倉室町時代 (狂言)

九〇一

狂言参考書

- 狂言評註 一冊 大和田建樹 明治二十六年
- 謠曲と狂言 一冊 友常秋美 明治四十年
- 謠曲と狂言 一冊 坂本三郎
- 能狂言之研究 一冊 野村八良 大正五年
- 新譯狂言記 一冊 佐久間春山 大正八年
- 狂言の見方と聞方 一冊 山邊圓阿
- 狂言研究 林 若 樹 (日本文學講座)
- 狂言と世相 野村八良 (日本文學聯講第二期)
- 能狂言—戲曲の特性に就いて— 笹野 堅 (岩波講座「日本文學」)
- 狂言集成解説—和泉流に就いて— 笹野 堅 (野々村氏編「狂言集成」)
- 能狂言について 芳賀矢一 (帝國文學一ノ二・三)
- 能 狂 言 松 尼 總 (國學院雜誌十ノ三・五・六)
- 狂言記に見えた文藝の境地 市村 平 (國學院雜誌三十五ノ一)
- 能樂と狂言 野上豊一郎 (解放三ノ四)

- 狂言の可笑味 四明老人 (懸葵八ノ七以下)
  - 狂言の文章 五十嵐 力 (能樂六ノ四)
  - 狂言二百番案内 野村 袋川 (能樂六ノ二以下)
  - 謠曲狂言の本質 佐成謙太郎 (國語と國文學昭和二ノ四)
  - 狂言について 橋 純 一 (國語と國文學昭和二ノ十二)
  - 能狂言の詞章 笹野 堅 (國語と國文學昭和五ノ四)
  - 狂言形態論 笹野 堅 (國語と國文學昭和六ノ十)
  - 狂言研究資料 岩城準太郎 (國文學誌昭和六ノ十)
  - 狂言取材考 野々村戒三 (藝術殿昭和六ノ七)
  - 夫婦を主題とした狂言 安藤常次郎 (藝術殿昭和七ノ三)
- なほ、雜誌「能樂」「謠曲界」などに、多くの論説が載つてゐる。

第十三 評論・藝道論

- 無名草子 (むみやうざうし) 一卷

第三篇 鎌倉室町時代 (評論・藝道論)

概説

八十三歳の老尼なる著者が、東山の最勝光院に詣でたあとで、とある檜皮葺の家に立寄り、請せられて、身の上のことなど語り、讀經をして、その家に泊ることになったが、そこにゐた三四人の女房たちが、いつまでも寝ようともせず、しめやかに物がたりしてゐるのを、自分はねながら聞いてゐた。その物語りを書きしるしたといふ體裁にして書いたもので、内容は「源氏物語」以下十數種の物語類の評論より、「萬葉集」以下千載集に至る諸歌集、著名な女流歌人などの品評、皇后定子・上東門院・皇太后妍子・大齋院・皇太后宮歡子の御逸事などに及んでゐるが、その主要部をなすものは、物語類の評論である。

名稱

書名の「無名草子」は、はじめから著者のつけたものかどうか明らかでないが、恐らく、無名の草子であつたために、後人がかう呼んだものかと思はれる。彰考館本には「建久物語」といふ名がつけられてゐるが、これも、書中に建久七年の年號が見えるところから、後人の假に與へた名稱であらう。

成立

成立年代については、黒川春村が「古物語類字抄」の例言中に「無名草子は應永の頃などの物か、古物語ども多く傳はれるほどにできしものにて、その褒貶どもこまやかなれば、今の世につたはらぬ限も、その大旨のしらるるなむおほかる」といつて、室町期の作と推測して以來、近頃まで立入つて考へた人がなく、尾上八郎博士の日本文學大系本の解題なども、この問題には觸れなかつたが、大正十四年十月發行の「國語と國文學」源氏物語號に、山岸徳平氏は「源氏物語研究の初期」と題する論文を載せ、その中で本書にも觸れて考察された。

山岸氏は本書を文體並びに思想内容の上から、鎌倉初期以前のものであるとし、書中に藤原定家を少將と

いつてゐること、建久七年の年號が見えること、歌集は「千載集」までのことを記して「新古今集」の名の見えぬことなどの諸點から、建久七年以後、定家の中将に任じた建仁二年十月までの間とし、更に後述の作者の推定と相俟つて、建久の末年から正治の初年頃に出来たものとされた。

然るにその後昭和四年に至つて、杉山敬一郎氏は「國語國文の研究」八・九・十一月號に「無名草紙考」を載せ、前記山岸氏のあげた理由の外に、

「五月十日宵の程、日頃降りつる五月雨の霽間を待ち出で、夕日はやかにさし出で給ふもめづらし」と書かれてゐる書中の記事と、「明月記」建仁二年五月の條の、

「七日 天陰雨瀟。八日 天陰自夜雨降終日不休。九日 夜並今朝雨天猶陰。十日 申時許雨即止。」

といふ記事とが符合する點から、本書を、建仁二年五月十日頃から着手して、それ以後「新古今集」の竟宴の行はれた元久二年四月二十七日までの間に成立したものと推定された。但し、定家が少將から中将に轉じたのは、建仁二年閏十月二十四日であるから、もし定家の少將であつた間に成つたものとするれば、推定成立期間はなほ一層縮まつて、建仁二年五月十日以後同年閏十月二十三日以前といふことになるわけである。

作者の問題も成立年代の問題と密接につながつてゐるのであるが、山岸氏は、前記の論文に於て、書中著者自身の身の上を語つたくだりの記事と、書中に引用された「源氏物語」の本文が、従一位麗子本と同系統のものであることなどの點から、これに相當する女を求むれば、藤原俊成の女で後白河院の女房であつた京極の局(母は爲忠の女)であるとし、しかし文中に女の作らしくないところがあるから、それは表面上の事實

作者

で、實は京極の局の作に假托して書いたものであらうとの想像のもとに、實際の作者を俊成であらうと推測された。その主なる理由は、歌の批評の仕方、歌集や百首歌などに關する考や態度の一致する點、及び作者の年齢を八十三歳とすれば、本書の推定成立年代における俊成の年齢が、それに一致する點などである。それに對して、杉山氏の前掲論文は、本書をその形式・思想・文體などの點から、女性の作と見るべきであることを論じ、更に種々の點から、俊成の女で、源通具の妻であつた押小路女房が、作者として最も可能性が多いことを論じてゐる。その後まだこれに對して有力な反對説は現はれないやうである。

平安朝以來、和歌に對する評論研究は盛に行はれたが、物語に對するまともな評論が書かれたのは、現在知られる限りでは、本書がはじめである。評論の對象となつた物語は「源氏物語」をはじめ約二十種に及んでゐるが、「源氏」について語ることも最も多く、かつこれには無條件に讃辭を呈してゐるが、その他のものについては、それぞれ缺點をあげてゐる。その批評は大體印象批評の域を出ないが、表現の巧拙、構造の自然・不自然などの問題にも觸れて、可なり適切と思はれるものもある。何れにしても、鎌倉時代初期の最も高い教養を持つた人々の間における物語觀を知る資料として注意すべきものであり、かつ今は傳はらない物語についても語られてゐるから、「拾遺百番歌合」や、稍や後の「風葉集」などと共に、散佚物語を考察する上にも貴重な資料たるべきものである。

諸本

- 成實堂文庫本
- 藤井乙男博士藏本
- 彰考館本「建久物語」

古寫本

特性

版本

- 群書類從卷三百十二(活版本第十一輯)
- 國文大觀(第七卷)
- 日本文學大系(第二卷)

解題・研究

- 近古小説解題 一冊 平出鏗二郎 明治四十二年
- 無名草子解題 尾上八郎 (日本文學大系本解題)
- 源氏物語研究の初期 山岸徳平 (國語と國文學大正十四ノ十)
- 無名草紙考 杉山敬一郎 (國語國文の研究昭和四ノ八・九・十一)

◎世阿彌十六部集(せあみじふろくぶしふ)

能樂の大成者世阿彌の藝道・能樂に關する遺著十六部を收めたものである。元來世阿彌の遺著は、その一部は版本として傳はつたものもあるが、頗る杜撰で信憑し得ないものであつた。然るに明治四十一年に、十六部の信用すべき古寫本が安田善之助氏の手に入り、翌四十二年、吉田東伍博士の校訂で能樂會から刊行されるに至つた。「世阿彌十六部集」の名はその際につけられたのであるが、その後大正十五年に、野々村戒三氏が、同書をもとにして更に校訂を加へ、簡單な頭註を施して、「註世阿彌十六部集」を刊行された。十六部のうち、「花傳書」及び「申樂談儀」は世阿彌の主著とも見るべきものであるから、別項を設けて解説することとし、ここにはその他のものの内容を簡単に記しておく。

參考書

概説

内容





關聯して、作曲諷諷の心得を細説したものである。

○風 曲 集 成立年代未詳

はじめに、「凡そ五音四聲より呂律の達聲に相應たるべき位に至る稽古の條々は記すに事多かるべし」といひ、音聲に縦横の差別があること、文字に四聲があることなどを説いて、音曲學習の指針たるべきことを述べたものである。

○習 道 書 永享二年成

申樂の仕手・脇の心得、鼓・笛などの囃子方及び狂言方の心得を説き、一日の演能の番数について述べたもので、能樂演奏の實際に關する注意を懇切に記してゐる。世阿彌六十八歳の作。

○夢 跡 一 紙 永享四年成

世阿彌が七十歳の時に、子息善春(元雅か)の死に遭つて書いた哀悼の文で、終に「おもひきや身は埋木の残る世に、盛りの花の跡を見んとは」といふ和歌を記してゐる。

○世子七十以後口傳 永享五年成

一名「却來花」。子息元雅の死後、藝道の極意を譲るべきものがないことを慨き、「却來風」の秘曲は、元雅にも口傳ばかりで、書き物は傳へなかつたが、最新近くなつて、秘傳を會得した由を述べ、しかし元雅が早世した以上は、後世にその曲名をだに知る人があるまいから、書き遺しておくといつて、天女の舞と白拍子に關する秘傳二箇條を記してゐるが、所説簡單平凡で、特に見るべきものがない。

○金 島 集 永享八年成

世阿彌は永享六年、七十二歳の老齡で佐渡に配流されたが、本書は、その途中のこと、配所のさま及び經驗などを、謡曲風の文章に綴つたもので、若州・海路・配所・時鳥・泉・十社・北山の七項から成り、悲境にあつた世阿彌の心境を窺ふべき文である。

十六部集のうちには「夢跡一紙」「全鳥集」の如き特殊のものもあるけれども、他は皆能樂を中心としての藝道論で、或ものは論證を主とし、或ものは實際の指導を主としてゐるが、能樂研究上の最も貴重な根本資料であると同時に、日本における最初の大きな藝術論として注意せらるべきものである。

(註)世阿彌 觀阿彌清次の子。本名、結崎左衛門大夫元清。幼名、藤若丸、後、三郎。法名を世阿彌また沙彌善芳と

いひ、外に貫翁・至翁の號がある。父の業をついで能樂を大成し、謡曲をも作つた。藝道論建立の業績は「十六部集」によつて知られる。はじめ足利將軍義滿に愛されて、その保護を受け、ついで義持・義教に仕へたが、永享六年五月、佐渡に配流せられ、やがて歸洛を許されて、女婿金春禪竹のもとで餘生を送り、嘉吉三年、八十一歳で歿したらしい。

古 寫 本

○安田家本

古田博士校訂「世阿彌十六部集」の底本となつたものであるが、大正十二年の震災で燃失した。なほ「花傳書」についてはその項参照。

活 版 本

第三篇 鎌倉室町時代 (評論・藝道論)

特 性

諸 本

○吉田博士校訂本 一冊 明治四十二年

安田家本を底本として校訂を加へたものであるが、安田家本は「花傳書第六」を缺いてゐたので、流布の偽版中から抜抄したものを「花傳書逸文」として添へてゐる。

○野々村氏校註本 一冊 大正十五年

吉田博士校訂本をもとにして、更に校訂を加へ、簡単な頭註を添へたもので、前者が「花傳書第六」の代りに入れた「逸文」を除き、その代りに、藤代順輔博士が京極片山家所蔵の「花傳書」を雑誌「藝文」に掲載したの中から、「音曲聲出口傳」を探り、これを「花傳書第六」として収めてゐる。

○岩波文庫本「花傳書」「申樂談議」「能作書・學習條條・至花道書」(野上豊一郎氏校訂)

註釋書・研究書

○能と謠の根原 一冊 池内如翠 大正十五年

「十六部集」を意譯したものである。

○十六部集評註 能勢朝次 (『觀世』に連載中)

○世阿彌の藝術觀 安倍能成 (新小説大正十ノ四)

○世阿彌の所謂花の美について 岸義秋 (歴史と國文學昭和六ノ五)

○世阿彌の物真似論 小澤健雄 (國語と國文學昭和六ノ十)

○世阿彌の幽玄と藝術論 西尾實 (國語と國文學昭和六ノ十)

参考書

- 世阿彌の藝術論に於ける大衆的傾向 西尾實 (國文學誌昭和六ノ十)
- 世阿彌に於ける心の諸問題 能勢朝次 (學藝昭和七ノ七)
- 五音の發見による收穫 能勢朝次 (觀世昭和七ノ九)
- 世阿彌の遺著 笹野堅 (文學昭和八ノ十二)
- 觀阿彌世阿彌事蹟考 野々村戒三 (校註世阿彌十六部集附録)
- 世阿彌元清 西尾實 (岩波講座「日本文學」)

◎花傳書(くわでんしよ) 世阿彌

各篇の内題に「風姿花傳」と記されてゐる。第五篇「奥儀」に、「心より心に傳ふる花なれば、風姿花傳と名付く」と記してゐるから、それがもとの書名であらう。

世阿彌の藝道に關する著述中、初期に屬するものであるが、能樂を中心としての基礎的全般的藝術論として、最も主要な位置を占めるものである。

七篇より成り、第一・年來稽古條々、第二・物學條々、第三・問答條々の三篇は第一次的述作、第四・神儀、第五・奥儀の二篇は第二次的述作、第六・花修、第七・別紙口傳の二篇は第三次的述作と見られる。吉田博士校訂の十六部集本は、第六篇「花修」の代りに、偽版の「花傳書」中から抜抄した「花傳書逸文」を附載し、野々村氏の校註十六部集本及び岩波文庫本には、「花傳書逸文」と略同内容の「音曲聲出口傳」を第六篇に當

書名  
性質  
組織

て、何れも「花修」を缺いてゐるが、昭和五年、觀世宗家所藏の「花傳第六花修」が小澤健雄氏によつて紹介され、次いでその玻璃版複製が出るに及んで、「花傳書」第六篇は「花修」であることが明らかになつた。それと關聯して、「音曲聲出口傳」は「花傳書」から獨立せしむべきものであることが、能勢朝次氏によつて唱へられ(岩波講座「日本文學」中「花傳書」)、今はそれが通説となつてゐる。

十六部集本の底本となつた安田家本によれば、第三篇「問答條々」の奥書に「應永七年庚辰卯月十三日 左衛門大夫 秦元清書」とあつて、「年來稽古條々」「物學條々」「問答條々」の三篇は應永七年(世阿彌三十八歳)四月までに成つたことが知られ、また第五篇「奥儀」の奥には「于時應永第九之曆暮春二日馳筆畢 世阿彌在判」とあつて、「神儀」「奥儀」の二篇は、應永九年(四十歳)の三月頃までに成つたことが分る。第六篇「花修」と第七篇「別紙口傳」とは成立年代が明らかでない。「別紙口傳」の奥には「應永廿五年六月一日」の日附があるが、その識語に、「此別紙ノ條々、先年弟四郎相傳スルト云ヘドモ、元次藝能感人タルニヨツテ、是ヲ又傳所也。秘傳之。」とあつて、應永二十五年の所作ではなく、その以前に作られたものであることは疑ないところである。恐らく「奥儀」の成つた應永九年の後あまり遠くない間に出来たものではなからうか。

「花傳書」の内容は、能樂の基本問題全般に亘つてゐるが、その中心をなすものは、いはゆる花の體得表現である。花といふ語には、いろいろ複雑な意味と句とを含んでゐるが、つまるところ、能樂における至上の藝術美を意味してゐる。この花に到達するためには、まづ懸念の修業を必要とする。「年來稽古條々」には、その意味で、七歳から五十餘歳までを六期に分けて、その各時期に於ける藝道修業の注意を述べ、次の「物

成立

内容

學條々」では、修業の目標として物まね即ち寫實を説き、その限度と注意とを具體的に示し、第三「問答條々」に於ては、演能の實際に關することと、花の本質に關することとを問答體に記して、花の最も主要な屬性と見るべき幽玄に説き及んでゐる。以上の三篇は、能樂を中心とする藝道論として、一のまとまつた體系をなすものである。

次に第四「神儀」に於ては、申樂の歴史を述べて、その傳統を神聖化し、第五「奥儀」に於ては、田樂と申樂、大和と近江の藝風の相違を説いて、花が申樂の生命であることをいひ、花を體得する上の示唆を與へ、藝道と壽福との關係に論及してゐる。この二篇は前の三篇と相補足する別の一團をなすものと見られる。

最後に、第六「花修」は四章から成つて、前二章は能作論、後二章は演能の心得と、強き能、幽玄の能、弱き能、粗き能の區別、及び能の位と演奏者の技量との關係などについて述べ、前の「問答條々」の補足細説とも見るべきものである。第七「別紙口傳」は、能樂の理想たる花について、諸方面から徹底的に解説したもので、はじめに總論を設け、次に、音曲・舞・働・振・風情、物眞似、能の十體、物まねと花との關係、秘する花を知ること、因果の花を知ること、因果のよしあしなどを細論し、最後に、迷悟一如、善惡不二、「タダ時ニヨリテ用足ルモノヲ善キモノトシ、用足ラヌモノヲ惡シキモノトス。(中略)人々心ゴコロノ花ナリ。イヅレヲマコトトセンヤ。タダ時ニ用ユルヲモテ花ト知ルベシ」といつて、藝術美の相對性を説いてゐる。「花傳書」一部の總括をつけるものとして、最も注意すべき一篇である。

諸本

古寫本

第三篇 鎌倉室町時代 (評論・藝道論)

○觀世宗家藏本「花傳第六花修」「第七別紙口傳」

世阿彌自筆と傳へられるもので、その眞似は明らかでないが、書體は應永の頃をあまり降らないものであるといふ。

○京都片山家藏本(宗節本)

世阿彌の後七代目の觀世大夫宗節の筆寫本で、「第六花修」を缺いて、その代りに「音曲聲出口傳」が入つてゐる。この本の本文は、大正三年三月・五月・六月の「藝文」に發表された。

○齋藤香村氏藏本 二冊

宗節本の轉寫と見るべき慶長前後の書寫本で、「花傳書」七篇全部の外に「音曲聲出口傳」及び「能序破急事」を含むといふ。觀世宗家には「花習内拔書」と題する一書があり(「觀世」昭和六年六月號に發表)、「能序破急事」はこれと同一書の由である。

○安田善之助氏藏本

吉田博士の「校訂世阿彌十六部集」の底本となつたものであるが、大正十二年の震災に焼失した。

版 本

○八帖本花傳書

慶長頃の木活字本を初として、江戸時代の版本が數種あり、明治三十一年、同三十五年にも、大和田建樹氏校訂の本が出てゐるが、世阿彌の遺著の一部に後人の筆を加へて八帖とした偽書である。

○吉田博士校訂本 (「校訂世阿彌十六部集」の内)

明治四十二年

○頭註花傳書

一冊 丸岡桂校註 明治四十四年

參考書

○宗節本花傳書 (「藝文」大正三年三・五・六月號掲載)

○野々村氏校註本 (「校註世阿彌十六部集」の内) 大正十五年

○岩波文庫本「花傳書」一冊 野上豊一郎校註 昭和二年

右四本は何れも「第六花修」を缺き、その代りに、或は「花傳書逸文」を、或は「音曲聲出口傳」を収めてゐる。

○觀世宗家本「花傳第六花修」複製本 昭和六年

研究書

○世阿彌の藝道教育論 西 尾 實 (國文教育昭和三ノ三)

○演劇論としての花傳書 阿波根朝松 (鹿兒島日本文學昭和七ノ四)

○花傳書 能 勢 朝 次 (岩波講座「日本文學」)

その他前掲諸書附載の解説、「世阿彌十六部集」の項にあげた諸論文も參考すべきである。

◎申 樂 談 儀 (さるがくだんぎ) 世 阿 彌 永 享 二 年 成

「世子六十以後申樂談儀」とも呼ばれる。

世阿彌が申樂に關して語つたものを、秦元能(世阿彌の次子か)の筆録したもので、奥書に、「永享二年十一月十一日 爲殘志 秦元能 書之」とあり、世阿彌の談話の時期は精確でないが、永享二年十一月十一日に筆録し終つたものであることは明らかである。但し書中に永享元年三月のことが語られてゐるから、談話

名 稱  
成 立

第三篇 鎌倉室町時代 (評論・藝道論)

内容

と筆録との間に時間の隔りが無いことは想像し得られる。初に序話があり、次に三十一條の談話を一つ書きにし、終に魚崎座の規約を添へてゐるが、序話に於ては申樂は舞歌二曲を本風とすべきこと、田樂と申樂、大和と近江との藝風のこと、一忠・増阿・犬王・觀阿らの藝風に關することを述べ、第一條以下には、定まり・懸り・物まね、聲出などの心得より、曲舞と小歌との區別、心根・位・能作・勸進能などについて説き、金春・金剛などの能役者のこと、面打の事を述べ、大和申樂四座の沿革、世阿彌が神佛の加護を蒙つた經驗、田樂の起原、松ばやし、薪能などのことを語り、役者の行儀のことに及んでゐる。

性質

本書は「花傳書」と並ぶ大著であるが、藝道論としては、既出のもの反覆が多く、かつ談話の聞書であるから、十分に秩序立つてゐない。しかし當時の能樂に關する各方面の事實が具體的に語られてゐる點で、能樂研究上の貴重な資料を豊富に含んでゐるのである。

諸本

諸本

○世子六十以後申樂談儀 一冊 吉田東伍校註 明治四十一年

黒川春村が瑞家所藏の寫本を筆寫したものを、更に小杉相郎が轉寫して、その編著「徵古雜抄」中に收めたものを底本とし、校註を施して刊行したものである。

○世阿彌十六部集 一冊 吉田東伍校訂 明治四十二年

○世阿彌十六部集 一冊 野々村戒三校註 大正十五年

参考書

○岩波文庫本「申樂談儀」 一冊 野上豊一郎校註 明治三年

「申樂談儀」だけの註釋書・研究書の類はまだ現はれないが、前掲諸本中の解説、及び「世阿彌十六部集」「花傳書」の項にあげた諸文献は、多少とも本書に觸れてゐるから、参照せられたい。

### 第十四 歴史・記録

緒言

この章には、漢文または準漢文で書かれた、鎌倉室町時代の歴史・記録のうち、主要なものを一括して解説する。

これらの中には、個人の手に成つたものと、「吾妻鏡」の如き、半ば公の性質を持つたものがあり、個人の手に成つたものにも、著者自身の生活の記録たる日記と、一般的な歴史的記録とがある。

これらは皆、純粹の文學作品ではないけれども、當時の文學に關係するところが多く、また文學研究の側面の資料としても閑却し得ないものである。

○玉 葉 (ぎよくえふ) 卷數不足 藤原兼實

普通「玉海」と呼んでゐるが、原名は「玉葉」である。伊藤東涯の「乗燭談」によれば、「玉葉」の名は、父忠通の日記「玉林」に因んでつけたもので、のち二條良基が筆寫した際に「玉海」と改めたのであるといふ。

(注) 藤原兼實の記録體の日記で、記事は二條天皇の長寛二年十月から、土御門天皇の正治二年八月まで、六代

第三篇 鎌倉室町時代 (歴史・記録)

解説

三十七年間に亘り、平安時代末から鎌倉時代初にかけての、源平二氏の興亡、幕府の創設など、史上の大事變を背景として、堂上の重職にあつた兼實の見聞遭遇したところを詳細に記してあるから、史料として貴重なものであると同時に、「平家物語」「源平盛衰記」などの記事と史實との關係を調べる上にも、有力な材料となるのである。

(註)藤原實兼 關白忠通の子。九條家の祖。文治二年攝政、同五年太政大臣、建久二年關白。世に月輪關白と稱する。博く典故に通じ、屢朝廷の大儀に諮詢を蒙つた。建仁二年、剃髮して圓澄と號し、承元元年四月五日歿、年五十九。日記「玉葉」の外、「千載集」以下の諸勅撰集に歌がある。

古寫本

○九條家本 五十冊 ○二條家本「玉葉」二百二十冊目錄十冊 ○秘閣本 六十八冊

○帝國圖書館本 九十一冊 ○柳原伯爵家本 五十冊

活版本

○國書刊行會第一期本「玉海」二冊 (秘閣本を底本とし、他の諸本を以て校合したもの)

◎明月記(めいげつき) 卷數不定 藤原定家

藤原定家の記録體の日記で、記事は高倉天皇の治承四年から四條天皇の文曆二年まで、七代五十六年間に亘り、著者の公私兩面に亘る日々の見聞經驗を詳細に記したものである。

解説

諸本

書名ははじめ「照久記」といつたのを、元久の頃住吉に參籠して、靈夢を蒙り、それによつて「明月記」と改めたと傳へられてゐる。卷數は「群書一覽」に九十六卷としてゐるが、完本が傳はらず、現存諸本には、四五卷本・五十四卷本・六十一卷本などがあつて一定しない。定家の青年時代から晩年に至るまでの詳細な生活記録として、彼の經歷・經驗・爲人などを知る上の、最も直接かつ有力な資料たることはいふまでもないが、それと同時に、古典の書寫・校合、「新古今集」の撰定、その他和歌・物語・歌人などに関する記事を多く含んでゐるから、文學史の資料としても貴重なものである。

(註)藤原定家「新古今和歌集」の條參照。

○國書刊行會第二期本 三冊

○明月記脱漏 寫七卷

「明月記」の傳本に缺けてゐる寛喜二年・三年・貞永二年・天福元年・二年・文曆二年などの記事を集めたものである。

○明月記抄出 一卷 傳一條兼良 (續群書類從卷四七〇)

「明月記和歌部類」ともいひ、「明月記」中から和歌に関する記事を年代順に抄出したものである。

◎百鍊抄(ひやくれんせう) 十七卷(現存十四卷)

漢文の歴史で、六國史の「三代實錄」の後を繼ぐ意圖のもとに書かれたものと思はれるが、現存本は第四卷以下で、初めの三卷を缺き、記事は冷泉天皇の康保四年五月二十五日踐祚のことから、後深草天皇の正元元

第三篇 鎌倉室町時代 (歴史・記録)

版本

参考書

解説

年十二月まで、二十七代二百九十二年間のことに亘つてゐる。缺巻の部分には、宇多・醍醐・朱雀・村上諸朝のことが書かれてゐたのであらう。

著者も成立年代も共に詳かでないが恐らく書中の最終記事の年に後れること遠くない頃に書かれたものであらう。

○國史大系 (第十四卷)

鳩保己一の校本をもとにし、金澤文庫本の轉寫本を以て校訂したものである。

○百鍊抄類標 寫三卷 著者 未詳

「百鍊抄」記載の事項をいろは順に排列した索引書である。

◎吾妻鏡 (あづまかがみ) 五十二卷(現存五十一卷)

鎌倉幕府方の半官的記録で、記事は高倉天皇の治承四年四月、源三位頼政らが以仁王を奉じて、諸國の源氏に平氏追討の令旨を傳達することに始まり、龜山天皇の文永三年七月、宗尊親王が將軍を廢せられて入洛し給ふまで、將軍六代、執權七人、前後八十七年の間に亘つてゐるが、そのうち、壽永二年・建久七年・八年・九年・嘉祿元年・二年・安貞元年・建長元年・七年・正元元年・弘長二年・文永元年の十二年は記事を缺き、その他一月乃至數月間の記事を缺いた箇所も少くない。なほ卷十七から卷二十九までは概ね記事が簡略で、抜抄本を傳へたものであらうといふ説もある。文體は記録體の漢文であるが、當時の慣用語・俗語を交へた一種の

和漢混清文と見るべきものである。

書名は關東方の歴史といふ意味から、「大鏡」「今鏡」などの例に倣つて「吾妻鏡」と名づけたものであらう。後世「東鑑」とも書くやうになつたのは、慶長十年の刊本に始まることで、支那の「唐鑑」「通鑑」「帝鑑」などに準據したのである。

卷數は目録によれば五十二卷であるが、今は卷四十五を缺いて、五十一卷が傳はつてゐる。「旅宿問答」に本書のことを記して「コレハ先代九代(頼朝から守邦親王まで)ノ間ヲ記ス書ナリ、六十卷アリ」といつてゐるのは思違ひであらう。

著者の誰であるかは明らかでない。林道春の「東鑑考」には、「東鑑未詳誰撰、蓋北條家之左右執文筆者記之歟(中略)、又廣元・邦通・俊兼等之筆記、亦當混雜而在」歟云々とある。恐らく幕府方の書記數人の手に成つたものであらう。

鎌倉時代初期の史料として最も信頼すべきものであり、公家方における藤原兼實の日記「玉葉」などと相俟つて、朝幕兩面の消息を明らかにすることが出来るばかりでなく、「平家物語」「源平盛衰記」等を考察する上にも有力な参考資料となり、また義經傳説・曾我傳説などの原據となつてゐる點から、「義經記」「曾我物語」「御伽草子・舞の本・謡曲の判官物・曾我物などとも淺からぬ關係を持つて居り、中世文學の研究上閑却すべからざるものである。

古寫本

第三篇 鎌倉室町時代 (歴史・記録)

概説

版本

参考書

書名

卷數

著名

性質

諸本



○内閣文庫藏北條本 永正・大永頃書寫

近藤正齋の「右文故事」によれば、この本はもと北條家のものであつたが、天正十八年に黒田孝高の手に入り、慶長九年、その子長政から父の遺物として徳川家康に献上したものであるといふ。

○宮内省圖書寮本 ○島津公爵家本 ○吉川子爵家本 ○京都府立圖書館本

○黒川家本 ○伏見宮家本(零本) ○前田侯爵家本(零本)

なほ、水谷伊勢守萬藏の「水谷本」、塙保己一舊藏の「應永書寫本」などが名を知られてゐる。

古版本

○慶長十年木活字本

徳川家康の命により、京都南禪寺の僧承兌が林道春と議り、前記北條本を校訂して刊行したもので、「東鑑」の字を用ひ、承兌の序文が添へてある。

○寛永元年整版本 (前者を底本とし和詞を加へたもので、林道春の跋文を附す)

○寛文元年整版本 (前者の再版本である)

活版本

○高桑駒吉外二氏校訂本 十冊 明治二十九年

○續國史大系本 (第六・七・八冊) (北條本を底本として諸書を参照校合したもの)

○國書刊行會第四期本 三冊 (吉川子爵家本を底本とす)

○日本古典全集第一期本 八冊 (寛永元年本を底本とし、「東鑑脱漏」「東鑑纂」を加へ、吉川本と対校し、

續國史大系本をも参照して、校異を註記してゐる)。

補 註 書

○東鑑纂 島津公爵家藏 (島津家本によつて、「吾妻鏡」刊本卷十以下卷四十六までの脱漏を集めたものであ

る。史籍集覽に收め、日本古典全集本にも添へてある)

○東鑑脱漏 寛文八年 (「吾妻鏡」卷二十六に當る部分の嘉祿元年・二年・安貞元年の記事が缺けてゐるのを

補つたものである。史籍集覽に收め、前者と共に日本古典全集本に加へてある)

研究書・註釋書

○東鑑綱要 一卷 林 道 春

○東鑑曆纂改補 一卷 安藤 有 彦 延寶四年成

○東鑑脱漏抽纂 一卷 著者 未 詳 延寶七年成

○東鑑集要 二卷 著者 未 詳 元祿七年

○東鑑要目集成 一卷 榑 原 長 俊

○東鑑不審問答 伊勢貞丈・布引高敬

○東鑑類標(東鑑早見) 高田 與 清

○右文故事 近藤 守 重 (近藤正齋全集二)

第三篇 鎌倉室町時代 (歴史・記録)

右のうち要目集成・不審問答・類標は、次の「吾妻鏡集解」中に収載されてゐる。

- 吾妻鏡集解 二卷 高桑駒吉・依田喜一郎・成川容次郎共編 明治二十九年
- 吾妻鏡備考 三冊 高桑駒吉編
- 吾妻鏡の研究 一冊 八代國治
- 吾妻鏡物語 一冊 芝野六助
- 歴世記録考 星野 恒 (史學叢書一)
- 吾妻鏡脱漏・吾妻鏡脱漏抽纂 星野 恒 (史學叢書一ノ二)
- 吾妻鏡の性質及其史料としての價値 原 勝 郎 (史學雜誌九ノ五・六)
- 吾妻鏡古寫本考 和田英松 (史學雜誌二十三ノ十)
- 吾妻鏡の女性 玉井幸助 (國語教育十一ノ二)
- 吾妻鏡諸本難考 丸山二郎 (歴史地理昭和八ノ五)

◎元亨釋書(げんかうしやくしよ) 三十卷 師鍊編 元亨二年成

内容

漢文の僧侶傳並びに佛教史ともいふべきもので、全篇を傳・贊・論・表・志に分けてゐる。卷一から卷十九

までは傳部で、これを更に傳智・慧解・淨福・感進・忍行・明戒・檀興・方應・力遊・願雜の十傳に分け、各傳に論讚を加へ、傳部の終に度總論を添へてゐる。卷二十から卷二十六までは表部で、欽明天皇元年以降承久三年七月まで六百八十餘年に亘る間の資治表を掲げ、卷二十七以下卷三十までは志部で、これを更に學修・度受・諸宗・會儀・封職・寺像・音藝・拾異・難争・序説の十志に分け、なほ師鍊の「智通論」を附載してゐる。終の序説志は本書の總序と見るべきものである。

成立

本書の成立については、巻頭に載せた「上元亨釋書表」によつて、大體を知ることが出来る。それによれば、本書はもと某の編成したものを或人に献じたものに本づいて、師鍊が更に集成し、元亨二年八月十六日に上表文を添へて後醍醐天皇に献上したもののやうであるが、「碧山日録」(續史傳集覽・改定史籍集覽所收)長祿三年二月二十七日の條によれば、本書の原著者は凝然で、これを固山一輩に贈り、一輩がもと和文であつたのを漢文に翻譯して師鍊に呈したのを、師鍊がこれに資治表・諸志及び贊を加へて上梓したものであるといふ。なほ、「碧山日録」長祿四年九月一日の條にも、凝然の事蹟を記して、「又據本朝諸高僧之履歷、以作大冊、呈慧草海藏師(師鍊)、師潤刪以號元亨釋書、蓋其始出於然手也」と見えてゐるから、傳部の原著者を凝然とすることは正しいと思はれる。随つて本書は、凝然原撰、一輩漢譯、師鍊補訂編成といふ経路を取つて成つたものと見るべく、その最後の形の成立したのは、上表文の日附によつて元亨二年八月と見てよいであらう。

註(一)凝然 華嚴宗の高僧。示觀と號し、戒壇院その他に住した。元亨元年九月五日寂、年八十二。著書は「探玄洞

四抄「五教章通略記」など、凡て千百餘卷あると傳へられる。  
 (2) 固山 臨濟宗の高僧。肥前の人、源氏、法名は一葉。別號、無中。固山は字である。東福寺・天龍寺に歴住した。延文五年(正平十五年)二月十二日寂、年七十七。  
 (3) 師鍊 臨濟宗の高僧。京都の人、藤原氏、號は虎關。無隱。一山らに就て學び、後、東福寺・南禪寺等に住した。康永元年(興國三年)、後村上天皇から國師號を賜はつた。貞和二年(正平元年)七月二十四日寂、年六十九。著書に本書の外、「佛語心論」十八卷・「十禪支錄」三卷・「禪餘或問」一卷・「禪儀外文」一卷・「正修論」一卷・「禪戒論」一卷・「衆分韻略」五卷及び詩文集「濟北集」二十卷がある。

諸本

古寫本

○東福寺本 (虎關・龍泉等三人の筆寫に成ると傳へられる)

○松本文三郎博士藏本 一帖(卷十三・十四) 南北朝時代寫

古版本

○傳貞和本 東福寺藏 (本書が果して貞和年間に開版されたかどうかは明らかでない)

○貞治三年本 海藏院單況等印行 (内閣文庫に紅葉山文庫舊藏のもの殘闕六卷を藏してゐる)

○永和三年本 惠勇等印行 (京都帝大藏)

○至徳元年本 (性海靈見が永和本を重刻したもの。現在存否不明)

○慶長四年本 如菴宗軋印行 ○慶長十年木活字本 下村生藏印行 (久原文庫藏)

○元和三年木活字本 ○寛永元年本

活版本

○大日本佛教全書本 ○國史大系 (第十四卷)

註釋書・研究書

- 元亨釋書徵考 三十卷八冊 師鍊 元和二年
- 元亨釋書和解 二十三卷 惠空 元和三年 (明治二年の翻刻本三冊あり)
- 元亨釋書私考 寫一冊 惠空 (自筆本大谷大學藏)
- 元亨釋書文辨 一卷一冊 曾清 元祿頃刊
- 元亨釋書辨蒙 刊本 瑞嚴
- 元亨釋書類字 寫本 著者未詳

第十五 漢詩文

鎌倉室町時代の漢詩文は、前にしては鎌倉五山、後にしては京都五山の、禪僧の手に壟斷されてゐた觀がある。殊に鎌倉末期から南北朝・室町期を通じて、彼等の間に幾多の名匠巨擘が輩出し、詩文の創作、漢唐詩文の註疏、語錄等に尾大な業績を遺した。いはゆる五山文學がこれである。

第三篇 鎌倉室町時代 (漢詩文)

參考書

緒言

五山文學は鎌倉室町時代の漢詩文を代表するものといつてよい。この章にはその意味で五山文學をあげることにした。

◎五山文學(ごさんぶんがく)

五山文學は鎌倉末期から室町末期にかけての五山の僧侶の手になつた漢詩文・註疏・語録などの總稱であるが、その中心をなすものは、いふまでもなく漢詩文である。しかしそれらの集は、その数が頗る多く、個々について解説する餘裕がないから、ここには唯その中の主要なものについて、書名・卷數・著者・收載書などを記し、終に参考書をあげるに止めようと思ふ。

- 濟北集 刊二十卷 東福寺・南禪寺住 虎關 師鍊 (五山文學全集一)
- 禪居集 寫一卷 建仁寺住 清拙正澄 (同上)
- 岷峨集 刊二卷 建仁寺住 雪村友梅 (同上)
- 松山集 寫一卷 東福寺住 龍泉令淬 (同上)
- 商游集 刊一卷 建仁寺住 別源圓旨 (同上)
- 東歸集 刊一卷 同 (同上)
- 早霖集 刊二卷 東福寺住 夢巖祖應 (同上・續群書類從卷三二五)
- 東海一漚集 刊五卷 建仁寺住 中巖圓月 (五山文學全集二)

概説

- 同 別集 寫一卷 同 (同上)
- 同 餘滴 寫一卷 同 (同上)
- 閻浮集 刊二卷 天龍寺住 鐵舟德濟 (同上・續群書類從三二四)
- 空華集 刊二十卷 南禪寺住 義堂周信 (五山文學全集二)
- 蕉堅稿 刊二卷 天龍寺住 絶海中津 (同上)
- 竹居清事 寫二卷 東海寺住 惠鳳翎之 (五山文學全集三・續群書類從卷三三〇)
- 不二遺稿 寫三卷 東福寺住 岐陽方秀 (五山文學全集三)
- 翰林葫蘆集 寫十七卷 相國寺住 景徐周麟 (五山文學全集四)
- 狂雲集 刊一卷 大徳寺住 一休宗純 (續群書類從卷三三二)
- 續狂雲集 寫一卷 同 (同上卷三三四)
- 鳥陰漁唱集 寫三卷 建仁寺住 桂菴玄樹 (同上卷三三六)
- 梅花無盡藏 寫七卷 居士 萬里周九 (同上卷三三九)
- 默雲稿 刊一卷 建仁寺住 天隱龍澤 (同上卷三四一)
- 幻雲稿 刊一卷 建仁寺住 月舟壽桂 (同上卷三四三)
- 翰林五鳳集 六十五卷 南禪寺住 以心崇傳等編 (大日本佛教全書)

後臨成天皇の勅旨によつて、五山諸詩僧の漢詩を分類選集したものである。なほ、この種の選集の小規模なものに、

收載書

「禪林風月集」「花上集」(群書類從卷三二〇)「北斗集」「遍界一覽亭集」などがある。

收載書

○五山文學全集 詩文部四冊

上村觀光編 明治三十九年—大正四年

五山僧侶の詩文集百十種、日記二十五種、語錄五十八種、通計四百五十八巻を収めて刊行する豫定であつたが、そのうち詩文集約三十種を収めた詩文部四冊が出ただけで中絶し、編者の絶大な努力が完全に果を結ばないでしまったのは惜しむべきである。

○續群書類從文筆部

卷三百二十二以下に五山僧侶の詩文集二十數種を収めてゐる。

参考書

研究書

○五山文學小史 一冊

上村觀光 明治三十九年

○五山詩僧傳 一冊

上村觀光 明治四十五年

○五山文學研究

笹川種郎 (日本文學講座)

○五山文學に於ける學僧義堂と詩僧絶海

北村香陽 (帝國文學五ノ七一—七二)

○五山の詩人雪村

久保保二 (帝國文學十一ノ一)

なほ前掲諸集の大部分は「日本文學大辭典」に解説が載つてゐるから就いて見られたい。

—終—

昭和九年九月十五日印  
昭和九年九月二十日發行

9.14

印檢



日本文學書誌

定價 金五圓三十錢

著作權者 石山徹郎

發行者 東京市京橋區京橋二丁目  
大倉克

印刷者 東京市京橋區木挽町一ノ二  
川橋源三郎

發行所 東京市京橋區京橋一ノ八  
大倉廣文堂  
振替東京四六八四番  
電話京橋(56)五六六番

堂川仁橋川・所刷印

<small>第四高等學校教授</small> 鴻巢盛廣著	<small>第八高等學校教授</small> 小室由三著	<small>岡山高等科前教授</small> <small>高女</small> 吉田九郎著	<small>第八高等學校教授</small> 小室由三著	<small>第八高等學校教授</small> 小室由三著	<small>臺北帝國大學教授</small> 植松安著	<small>臺北帝國大學教授</small> 安藤正次著
萬葉集全釋 <small>(一冊・二冊・三冊・四冊・五冊)</small> <small>既三冊・四冊刊</small> <small>近索引</small>	紫式部日記全釋	竹取物語全釋	土佐日記全釋	十六夜日記全釋	改訂國文學史概說	國語學史概說
<small>菊判各六〇頁以上</small> <small>送料各金六圓三十二錢</small>	<small>菊判一圓二五十四錢</small> <small>送料一圓</small>	<small>菊判一〇〇錢</small> <small>送料一〇〇錢</small>	<small>菊判一八〇錢</small> <small>送料一〇〇錢</small>	<small>菊判一二六錢</small> <small>送料一〇〇錢</small>	<small>四六判三四〇錢</small> <small>送料一圓五十五錢</small>	<small>近刊</small>

R910.31

I.83

終